HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本書紀古訓の形容詞語彙に関する研究
Author(s)	劉, 琳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12077号
Issue Date	2016-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12077
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61605
Type	doctoral thesis
File Information	Liu_Lin.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士学位論文

日本書紀古訓の形容詞語彙に関する研究

平成 27 年度

北海道大学大学院文学研究科

言語文学専攻

劉琳

目次

1　本研究の目的と概要 1
1.1　日本書紀古訓 1
1.2　『日本書紀』の諸本と調査資料 2
1.2.1　『日本書紀』の諸本 2
1.2.2　調査資料 4
1.3　『日本書紀』及び日本書紀古訓に関する先行研究 7
1.3.1　『日本書紀』の研究 7
1.3.2　日本書紀古訓の研究 8
1.4　研究対象と研究目的 12
1.5　論文の構成 13

2　量的構造から見る日本書紀古訓の形容詞語彙 15
2.1　調査資料と方法 15
2.1.1　調査資料 15
2.1.2　調査方法 16
2.2　各写本における古訓形容詞語彙の使用状況 16
2.2.1　各写本に見る古訓形容詞語彙 16
2.2.2　各写本における古訓形容詞語彙の使用状況 20
2.2.3　各写本の共通する古訓形容詞語彙 22
2.3　日本書紀古訓形容詞語彙の階層構造 23
2.4　日本書紀古訓形用詞語彙の新しさと古さ 26
2.5　まとめ 27

3　意味的構造から見る日本書紀古訓の形容詞語彙 29
3.1　意味分野別構造 29
3.2　調査方法と利用資料 29
3.2.1　調査方法 29
3.2.2　調査資料 30
3.3　神代巻に見る日本書紀古訓の形容詞語彙 31
3.4　意味分野別構造法による調査 34
3.5　史的変遷 36
3.6　まとめ 39

4　諸本の比較から見る日本書紀古訓の形容詞語彙 40
4.1　研究目的と方法 40
4.2　古写本系統『日本書紀』における古訓形容詞 40
4.2.1　調査資料 40
4.2.2　岩崎本の古訓形容詞 41
4.2.3　図書寮本の古訓形容詞 45
4.3　卜部家系統『日本書紀』における古訓形容詞 47
4.3.1　調査資料 47
4.3.2　兼右本の古訓形容詞 48
4.4　近世刊本『日本書紀』における古訓形容詞 50
4.5　諸本の比較 51
4.5.1　岩崎本における古訓形容詞の相異 52
4.5.2　諸本における古訓形容詞の相違 56
4.6　まとめ 60

5　漢字・漢語との対応から見る日本書紀古訓の形容詞語彙 62
5.1　『日本書紀』の原文における形容詞 63
5.1.1　原文における形容詞の判定について 63
5.1.2　原文に見える形容詞 64
5.1.3　原文の形容詞に関する考察 66
5.2　日本書紀古訓における形容詞 68
5.2.1　漢字一字と対応する古訓形容詞 68
5.2.2　漢字二字と対応する古訓形容詞 68
5.3　考察 69
5.3.1　品詞から見る漢字と古訓の対応関係 69
5.3.2　語法構造から見る漢字と古訓の対応関係 71
5.3.3　意味から見る漢字と古訓の対応関係 75
5.3.3.1　漢字一字と対応する古訓形容詞 75
5.3.3.2　漢字二字と対応する古訓形容詞 75
5.4　まとめ 78

6 日本書紀古訓形容詞「カシコシ、サカシ、オサナシ」の意味記述 79
6.1　問題提起 79
6.2　国語辞書における記述 80
6.3　『日本書紀』における「カシコシ、サカシ、ヲサナシ」 81
6.4　古訓形容詞「カシコシ」と「サカシ」 85

6.4.1　先行研究 85
6.4.2　平安時代文学作品における「カシコシ、サカシ」 87
6.5　「不賢」の古訓「オサナシ」 88
6.6　まとめ 89

7　おわりに 90

参考資料 1：古訓形容詞語彙の階層構造 93
参考資料 2：神代巻の古訓形容詞語彙(60 語) 97
参考資料 3：四種の伝本における日本書紀古訓の形容詞 98
参考資料 4：四種の伝本における形容詞にて附訓した漢文箇所 102
参考資料 5：同一漢文の古訓形容詞対照一覧表 118
参考資料 6：岩崎本原文の形容詞とそれと対応する古訓 128
参考資料 7：岩崎本『日本書紀』の合符のある用例 134
参考資料 8：古訓と原文形容詞語彙の語法構造一覧表 135

参考文献 149

日本書記古訓の形容詞語彙に関する研究

1　本研究の目的と概要

1.1　日本書紀古訓

『日本書紀』は、養老四年(720 年)に天皇の命令によって舎人親王らによって編纂された。神代から持統天皇時代までの歴史を記述した日本最古の編年体史書であり、六国史の第一として古くから尊重されてきた。一方で、『日本書紀』が編纂された奈良時代において、日本語表記の手段には漢字の音訓を借りて日本語を表記するか、漢文という外国語に翻訳した文体で表記するかの二つの方法しかなかった。『日本書紀』は当時の大和朝廷の律令機構確立期における天皇の神聖な地位を根拠づけ、全国を統治する所以と正統性を国内外に顕示するために、全書三十巻は歌謡部分を除き、日本周辺の朝鮮半島諸国や中国大陸で共通して使用された正式な漢文によって記述され[1]、日本の正史にふさわしい文献となっている。そして、当時国家の重要な事業として編纂された『日本書紀』は、早くもその完成した翌年(721 年)から宮廷において「日本書紀講筵」と呼ばれる『日本書紀』の本文を読み解く講義・研究が行われた。このような研究は後世の学者たちに引き継がれてきた。これよって、『日本書紀』に関する解釈・研究には長い伝統があることが分かる。このような『日本書紀』に対する研究の蓄積は『日本書紀』諸本の一部に存する訓点、『日本書紀私記』、『日本書紀』の注釈書などとして遺されている。また、古くから行われたこのような研究では『日本書紀』本文のみならず、本文に対する解釈・研究の成果の積み重ねである訓読にも重要な価値が置かれた。現存する『日本書紀』諸本の本文には万葉仮名や仮名によって古い和風の訓読みが施されたものがある。通常このような『日本書紀』の諸本に見られる訓読のことを「日本書紀古訓」という[2]。

「日本書紀古訓」は『日本書紀』の本文を解釈するための重要な典拠であり、『日本書紀』に対する研究における貴重な資料として従来重要視されている。古くから、「日本書紀古訓」に関する研究が盛んに行われており、一つの研究分野を形成してきたとされる。しかしながら時代や学派によって差があり、共時的にも通時的にも複雑な構造を持っているとされている[3]。また、「日本書紀古訓」は

[1]小島(1996：515-516)
[2]杉浦(2008：14-15)
[3]築島・石塚(1978：477-478)

漢籍や仏典などの訓点資料の訓読とは違い、上代語が残存することや特殊語彙が存するなどの特異性があることが築島(1963)や小林(1967)によって指摘されている。したがって、平安時代に遡る「日本書紀古訓」は古い日本語の実態を知る上で重要な手懸かりの一つであり、日本語の語史研究のおいても重要な資料となり得る。

1.2 『日本書紀』の諸本と調査資料

1.2.1 『日本書紀』の諸本

『日本書紀』全書三十巻のうち、第一・二巻は上代の神話を中心とする内容であり、通常神代巻と言う。第三巻～三十巻は神武天皇から持統天皇まで、歴代天皇の歴史を編年体によって記述する内容であり、通常人皇巻という。『日本書紀』は成立して以来、日本最初の歴史書として重要視され、各時代の古写本や版本、注釈書などが多く残されている。『日本書紀』に相関する書物を確認するために、日本古典籍総合目録データベース[4]を利用して検索すると、『日本書紀』や『日本書紀』の注釈書などは 384 点が記録されている。さらに、日本古典資料調査データベース[5]を利用して確認すると、日本国内各図書館に所蔵する『日本書紀』の古写本や版本が 457 点が確認できた。こんなに大量の古写本や版本が現存することは『日本書紀』が古くから重要な典籍と視された証拠の一つであると言える。また、これらの書物のうち、神代巻の古写本や神代巻の内容に関する注釈書が多く見られる。これは『日本書紀』が編纂された目的の一つとして天皇の神聖な地位を裏付けるために、宗教的視点から神代巻が重要視されることと注釈書の著者が神道家であるなどの理由によると考えられる。さらに、『日本書紀』の各時代に書き写された古写本には国宝に指定されているものだけでも、下記の五点が挙げられる。

ⅰ　田中本　九世紀(巻十：奈良国立博物館蔵)
ⅱ　岩崎本　十世紀(巻二十二、二十四：京都国立博物館蔵)
ⅲ　前田本　十一世紀(巻十一、十四、十七、二十巻：前田育徳会蔵)
ⅳ　弘安本　十三世紀(巻一、二：京都国立博物館蔵)
ⅴ　乾元本　十四世紀(巻一、二：天理大学附属天理図書館蔵)[6]

---

[4]『国書総目録』(岩波書店刊) の継承・発展を目指し、古典籍の書誌・所在情報を著作及び著者の典拠情報とともに提供する日本古典籍総合目録のデータベースである。国文学研究資料館によって構築された。
[5]国文学研究資料館が調査した日本国内外の大学・図書館・文庫等所存の写本・版本の書誌情報に関するデータベースである。
[6]遠藤(2015:30)

以下、現存する『日本書紀』の主な古写本及び版本について概観してみる。『日本書紀』の諸本には訓点のある訓点本と訓点のない無訓点本の二種がある。訓点を有してない写本のうち、次の四種は現存する諸本の中でも最古のものだと言われ、奈良時代末期或は平安時代初期の書写とされる。

訓点を有してない古写本：

猪熊本：巻一・神代上断簡

佐々木本：巻一・神代上断簡

四天王寺本：巻一・神代上断簡

田中本(国宝)：巻十・応神天皇二年から四十一年までの歴史を記述した

また、院政期の書写とされる図書寮本の巻十にも訓点が施されていない。一方、訓点を有している諸本は、古写本系統、卜部家系統、近世刊本の三種類に大別される。

(一)　古写本系統

1　岩崎本：巻二十二、二十四の二巻、平安時代中期の書写、京都国立博物館蔵。

2　前田本：巻十一、十四、十七、二十の四巻、平安時代後期の書写、前田育徳会蔵。

3　図書寮本：巻十、十二、十三、十四、十五、十六、十七、二十一、二十二、二十三、二十四巻の十一巻、院政期の書写、宮内庁書陵部蔵。

4　北野本：巻二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七の六巻、院政期の書写、北野天満宮蔵。

5　鴨脚本：巻二(神代巻下)の一巻、嘉禎二年(1236 年)の書写、国学院大学蔵。

6　丹鶴叢書本：巻一、二(神代巻)の二巻、嘉元四年(1306 年)の書写、宮内庁書陵部蔵。

(二)　卜部家系統

1　卜部兼方本(弘安本)：巻一、二(神代巻)の二巻、弘安九年(1286 年)以前の書写、京都国立博物館蔵。

2　卜部兼夏本(乾元本)：巻一、二(神代巻)の二巻、乾元二年(1303 年)の書写、天理大学附属天理図書館蔵。

3　卜部兼右本(兼右本)：巻一、二の神代巻を欠く、巻三～巻三十の二八巻、天文九年(1540 年)に完成、天理大学附属天理図書館蔵。

4　熱田本：巻一～巻十、巻十二～巻十五の十四巻、永和元年頃(1375 年)の書写、熱田神宮蔵。

5　北野本：巻二、巻十四を欠く、全二十八巻、書写年代及び加点は次に示すように五種に分ける。

①院政初期ごろ：巻二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七の六巻

②源平時代か鎌倉時代：巻二十八、二十九、三十の三巻

③吉野時代：巻一、四、五、七、八、九、十、十二、十三、十五、十七、十八、十九、二十、二十一の十五巻、そのうち巻一には訓点なし

④卜部兼永自筆による室町後期兼永点：巻三、六、十一の三巻

⑤江戸時代の補写：巻十六の一巻

6　水戸本：巻一、二(神代巻)の二巻、嘉暦三年(1328 年)の書写、彰考館蔵。

7　図書寮本：巻二の一巻、南北朝の書写、宮内庁書陵部蔵。

8　内閣文庫本(永正本)：全三十巻の完本、永正十年頃(1513 年)の書写と推測され、その転写本は慶長頃の書写、内閣文庫蔵。

(三)　近世版本

1　慶長勅版本：巻一、二(神代巻)の二巻、慶長四年(1599 年)に印刷出版。

2　慶長十五年本：全三十巻の完本、慶長十五年(1610 年)に刊行。

3　寛文九年版本：全三十巻の完本、寛文九年(1669 年)に刊行。

1.2.2　調査資料

前節では『日本書紀』の現存する主な諸本について概観したが、次に本論文と関連する諸本を中心に述べることにする。

(一)　古写本系統

1　岩崎本：『京都国立博物館所蔵国宝　岩崎本日本書紀』

『東洋文庫蔵　岩崎本日本書紀本文と索引』

岩崎本『日本書紀』は巻二十二の推古紀、巻二十四の皇極紀の二巻のみ現存し、両巻とも本文は平安時代中期頃の書写と推定され、『日本書紀』の最古の訓点本として従来注目されており、その訓点に関する研究も多い。岩崎本の古訓は『日本書紀』の各種の訓点本のみならず、他の漢籍・仏典の訓読法とも異なるため、比較研究において貴重な資料とされる。岩崎本の加点は数度に及ぶものであり、

複雑な様相を呈し、同じ漢文箇所であっても学統や時代によって異なる読み方が見られる。岩崎本に存する訓点は大きく分けて次の三種類に分けられる[7]。

Ⓐ平安中期末の古い博士家点
Ⓑ院政期の博士家点（1086 年～1185 年）
Ⓒ室町時代宝徳三年（1451 年）点及び文明六年（1474 年）点、
ともに一条兼良加点。

2　前田本：『尊経閣善本影印集成 26　日本書紀』

前田育徳会尊経閣文庫に所蔵する前田本『日本書紀』は巻十一の仁徳紀、巻十四の雄略紀、巻十七の継体紀、巻二十の敏達紀の四巻が現存し、岩崎本に次いで古い写本であり、国宝に指定されている。前田本の本文は平安後期の書写と見られ、訓点には万葉仮名や多くの声点が附されていることにより注目されている。前田本の訓点は図書寮本の訓点より古い要素を有しているが、図書寮本の移点された永治二年頃(1142 年)より遅れる院政期の後期と見るのが妥当とされる[8]。

3　図書寮本：『宮内庁書陵部影印集成・日本書紀』
『日本書紀：図書寮本(本文編・索引編)』

宮内庁書陵部に所蔵する図書寮本『日本書紀』は、平安院政期(平安時代後期)に書写・加点された古写本系統の十一巻と、興国七年(1346 年)十一月十三日の北畠親房伝授奥書を有する巻二の一巻からなる。図書寮本の現存する十二巻のうち、巻十を除き、他の十一巻は朱点・訓点を有している。図書寮本は『秘籍大観』（大阪毎日新聞社、1927)に複製が収められ、学界で広く図書寮本として知られ、利用されるようになった。そして、『新訂増補国史大系』(巻一上・下　日本書紀前篇・後編：吉川弘文館、1951・1952 年）及び『日本古典文学大系』（六六・六七　日本書紀上・下：岩波書店、1965・1967 年)においても対校本として使用され、国語学・国文学並びに古代史研究にとって、貴重な学術資料であるとされる[9]。

（二）　卜部家系統

1　卜部兼方本(弘安本)：『国宝卜部兼方自筆日本書紀神代巻』

京都国立博物館が所蔵する兼方本『日本書紀』は平野家で伝えられた卜部兼方の自筆本とされ、巻二(神代下)には、兼方による弘安九年(1268 年)の奥書が見ら

[7]築島・石塚(1978：7-8)
[8]石塚(1978：343)「前田本日本書紀院政期点(研究編)」
[9]石上(2006：437)『宮内庁書陵部影印集成 4 日本書紀書誌解説』

れる[10] 。兼方本は弘安本ともいわれ、神代巻二巻を完備している写本である。しかも現存する卜部家系統の写本の中で最古であり、国宝に指定されている。兼方本は大江家本、卜部家別本をもって校合されており、さらに『日本書紀私記』などを参照して訂正を加えている。この本は兼方が著した『釈日本紀』の成立と密接な関係があるとされる。そして、本文に施された綿密な訓点以外のほか、おびただしい注記が見られるため、『日本書紀』の研究において貴重な資料の一つとされる。

2　卜部兼夏本(乾元本)

『新天理図書館善本叢書第 2-3 巻　日本書紀：乾元本』

兼夏本は天理大学附属天理図書館に所蔵され、吉田家で伝えられた古写本であり、乾元本ともいわれる。兼夏本は乾元二年(1303 年)に卜部兼夏が写した奥書が見られ､兼方本と同じく神代巻の二巻を完備している卜部家系統の写本であるが、兼方本とは本文と訓点において相違が見え、卜部兼夏が作為的に改変を加えたとされる。この本には万葉仮名による和訓が多く見られ、そのほとんどは乾元本にのみ見られるものである。そして、乾元本の内容は後世の写本に伝写されることが多く、中でも三条西実隆によって書写されたものは、その後の流布本の神代巻の基礎となったとされる。

3　卜部兼右本(兼右本)

『天理図書館善本叢書和之部第 54-56 巻　日本書紀：兼右本』

兼右本は卜部家相伝の本が大永五年(1525 年)に紛失したため、卜部兼右がその以前に卜部家の家本を書写した三条西家本を底本として一条殿之御本等により校訂を加え、天文九年(1540 年)に作り上げたと言われる。一条殿之御本の巻二十二と巻二十四の二巻が岩崎本『日本書紀』として現存し、卜部家系統とは大きく異なるものである。兼右本は三条西家本、卜部家本の流れを伝え、流布本である寛文九年版本に繋っていくものである[11]。兼右本は巻三～巻二十八の二十八巻が現存し、人皇巻を完備したものとしては最古であるとされる。その訓点は岩崎本の一条兼良による訓点を含め、明経道の朱訓点も多く取り入れていることなどの理由のため、卜部家系統写本の中で異質な存在であると指摘される。

（三）　近世版本

[10]遠藤(2015：32)

[11]石塚(1983A：1)

寛文九年版本：石塚晴通が所蔵する複製本

北海道大学附属図書館所蔵札幌農学校文庫の貴重資料

寛文九年版本は全三十巻が揃っている。この本は先行する慶長勅版本の訓点付整版、寛永版本の整版本として、寛文九年(1669 年)に刊行された版本であり、それまでの版本に比べて誤りが少ないとされる。寛文九年版本は江戸時代に広く流布し、数多くの再刷・再刻が行われた。そして、後世の諸刊行本には大きな影響を与え、それらの多くは寛文九年版本の訓読を踏襲するとされる。『日本書紀』の本文・訓読が普及することにおいて、大きな位置を占めている。現在の代表的な『日本書紀』のテキスト(『新編日本古典文学全集』)などの多くは寛文九年版本を底本とする。寛文九年版本の「古訓」はある時期の特定の集団の中で行われていた均質な訓読ではなく、卜部氏によって確立され、くりかえし印刷された整版本を通じて流布されたものである[12]と指摘される。

1.3 『日本書紀』及び日本書紀古訓に関する先行研究

1.3.1 『日本書紀』の研究

前節で述べたように、『日本書紀』は撰上された翌年の養老五年(721 年)よりすでに宮廷において『日本書紀』本文を読み解く講義が始まり、平安時代前期に至って全七回にわたって行われた。そして、当時講義を行った講師である博士が訓義を中心に講述した内容の記録は『日本紀私記』類に書き留められている。この時期の『日本書紀』に関する研究は主として唐代の訓詁学的な視点から博士による『日本書紀』本文に対する解釈や訓読である。中世の鎌倉・室町時代に入ると、このような研究は卜部家に受け継がれ、卜部兼方が著した『釈日本紀』(文永十一年・1274 年)が最初の『日本書紀』に関する注釈書として成立した。このほか、一条兼良の『日本書紀纂疏』(康正年間・1455～1457 年)などが挙げられる。ただし、これらの注釈書の注釈対象は主に『日本書紀』の巻一、二の神代巻に集中している。『日本書紀』の全巻にわたる詳細な注釈書には谷川士清の『日本書紀通証』(延享四年・1747 年)や河村秀根の『書紀集解』(天明五年・1785 年)などがあり、いずれも近世になって成立した書物である。また、近世以前の訓読が『日本書紀』本文の語句ごとに文脈に即して解釈し、和訓を付ける傾向であるに対し、近世の『日本書紀』本文の訓読は、文字ごとに、あるいは句ごとに、一定の和訓を施す傾向が見られる。さらに明治期になって、国史学・国語学的な研究以外でも、国文学・考古学・民俗学など多方面にわたって『日本書紀』に関する研究が進めら

[12]遠藤(2015：38-39)

れるようになった。この時期の注釈書には敷田年治が著した『日本紀標注』(1891年)、飯田武郷が著した『日本書紀通釈』(1902-1909年)などがある。特に、後者は『日本書紀』の通釈書として最初のものである。明治期以降は、『日本書紀』三十巻がすべて均質のものではなく、種々の特徴によっていくつかの部分に区分できるという『日本書紀』の成立・編纂に関する区分論が盛んに論じられてきた。万葉仮名、漢字音、使用語句、語法、分注の偏在などについての分析を通して、『日本書紀』はいくつかのグループによって分担編集されたものと考えられるようになった。

それから、近代以降は現在に至って、『日本書紀』の岩崎本、前田本、図書寮本、北野本、兼方本、乾元本などの古写本は続々と翻刻され、その複製本が刊行され、一部の古写本の和訓索引も編修された。そのほか、『国史大系・日本書紀』、『新訂増補国史大系・日本書紀』、『日本古典文学大系・日本書紀』、『新編日本古典文学全集・2-4』などの校訂本の出版、『日本書紀総索引漢字語彙篇』、『日本書紀索引』、『日本書紀神代巻和訓研究索引：六種対照』などの索引の編修は『日本書紀』の研究に大きな利便性を提供している。

1.3.2 日本書紀古訓の研究

日本書紀古訓は古くからの『日本書紀』の本文に対する解釈・訓読によって生まれたものである。日本書紀古訓はどのような性格があるのか、漢籍・仏典などの一般訓点資料に見える訓読に比べてどのような特異性があるのか、原文の漢字・語句とはどのように対応させたのか、国語学研究におけるその位置づけはどのようなものであるかなど、これまで日本書紀古訓をめぐって多くの研究課題が行われてきた。以下ではこれまでの日本書紀古訓に関する先行研究を概観しようとする。

日本書紀古訓の特性についての論考には上野(1952)、築島(1963)、小林(1969)、中田(1979)、石塚(1992)などが挙げられる。上野(1952)では、日本書紀古訓の特性に焦点を当てて『日本書紀』最古の訓点本である岩崎本の古訓を検討し、古語を用いて読む態度の出発点は神代巻の訓読にあることを述べている。さらに吉田本と比較したうえで、「日本書紀訓読の姿は特殊である。必ずしも訓読に適せざる文章に対して能ふ限り国語－然も古い国語－を以て読まんとする意図が著しい」[13]と述べている。

築島(1963)は『日本書紀』の平安時代の古写本を調査資料として、日本書紀古

[13]上野(1952：59)

訓について検討した上で、日本書紀古訓は一般の漢文訓読と異なる特性を持つと指摘した。日本書紀古訓の性格について、次のように述べている[14]。

一　日本書紀古訓は字音語が極めて少ないこと
二　漢字の字面から離れた意訳的な訓法をすること
三　訓読に見えず、和文のみに見える語彙を用いること
四　当時一般の訓読に用いない上代語を用いること
五　日本書紀古訓だけに存する特異な表現が見えること

小林(1969)は日本書紀古訓が漢籍の訓読と密接な関係があるところから出発し、日本書紀古訓の特性を担う語と、漢籍において特別に伝えられた漢籍の古訓読語とで共通するものを取り上げ、そして訓法において共通する部分も指摘し、その共通面を通して窺われる両者の訓読語の性格を提示した。そして、両者の相違点を通してそれぞれの訓読語について漢文訓読史上の位置づけを論究している。上記の論考以外、日本書紀古訓と漢籍の訓読語との比較研究には大野晋[15]と林勉の一連の論考[16]も挙げられる。

中田(1979)は日本書紀古訓の読み方に注目し、『日本書紀』において古くから固有名詞・仏語・官職制度などが字音語で読まれていたことを指摘している。

石塚(1992)は国宝である兼方本について調査し、その書式・本文の上でも平安時代の諸本とは画期的に異なるものであるだけではなく、その訓点も極めて特徴のあるものであると指摘している。そして、兼方本の古訓には「古語・古語法志向、和文化傾向、漢文訓読系の混在、神道観・諱に基づく新訓法、合点訓[17]あり」といった特徴があるという、兼方本に存する古訓の性格を明らかにした。

日本書紀古訓と漢字・漢語との対応関係について、論を展開したのは神田(1949)が挙げられ、それ以降の訓詁学上の日本書紀古訓に関する研究の基礎となった。神田(1949)は日本書紀古訓の用例を二十九例を取り上げて分析を加え、数多くの漢籍資料から古訓の根拠を求める。そして、次のように日本書紀古訓の特質を指摘し、古訓は漢土の訓詁学上からみて、正確であることを論証した。

[14]築島(1963：128-181)
[15]大野(1993：1-3)『日本書紀』(解題)『日本古典文学大系(新装版)』
[16]林(1970)、(1971)、(1972)、(1973)は岩崎本を中心に、ほかの日本書紀古写本や漢籍仏典と比較し、岩崎本訓点の音韻・語法上の特徴などを論じている。
[17]石塚(1992：172)漢文の左右などに二訓以上が併記されている場合には、何れが正訓であるかを示す合点のことである、と定義されている。

一　古訓は漢土訓詁学上より見て極めて正確なること
二　古訓の一見疑わしきものも必ず何かの典拠に基づくものなること
三　古訓には今日古典の正統的注釈書と認められるものに必ずしも依拠せざるものの多きこと[18]

小島(1962)は漢籍の訓詁によって日本書紀古訓の正誤を判定し、古訓に存する誤訓、あるいは適当ならざる訓には何らかの根拠があり、古訓の大半はほぼ正訓に近いと述べている。平安時代における漢籍研究の成果は、同様に日本書紀講書の成果へそのまま及び、『日本書紀』の本文を漢籍の正しい訓詁に従って「読み解く」成果は現存する古写本や近世版本に見える日本書紀古訓[19] であると指摘している。

内田(2005)は日本書紀古訓の意訳方法に関して論じている。『日本書紀』の訓読は、できるだけ和語を以て、日本語文化して訓み下すことを目指しており、それを実現するために、意訳の方法をとらなければならなかったと述べ、「不覺、不良、不才」など、否定表現の古訓を取り上げ調査・検討した。そして、訓詁学の方法を用いて書紀古訓「イザワ」について考察を行った。

中川(1993)は漢語「努力」の日本書紀古訓を各古写本から収集して整理し、それを「ユメ」と訓む理由を探り、日本書紀古訓は文脈や語性を考慮したものであると指摘している。つまり、日本書紀の附訓のあり方は、漢文で書かれる前の日本語に還元して訓もうとする態度であり、訓点を加える者の取り得るの立場であったのではないかと述べている。同じく個別な古訓について検討した論考は松本(2001)であり、漢語「天降」の古訓について考察・分析を行ったものである。

また、日本書紀古訓を見直してその正誤を判断すべきであり、訓読の方法は主として訓読みではなく、音読みで『日本書紀』の本文を読むべきだという論考が見られる。中村(1986)では、日本書紀古訓の不適訓(本文の語義を正しく移していないが、文意はある程度重なるので、全く誤りとも言い難い訓)と誤訓(本文の文意・語義に合わない訓)[20]を検討し、『日本書紀』全般について一応現存の訓を離れて読解を進める立場が適切であり、音読を主とし、訓読を添用することによって全体として適確簡明な読み方を目指してゆくのは『日本書紀』に対する正しい読み方だと主張する。そして、寛文九年版本を底本とする『新編日本古典文学全集・日本書紀』(1994-1998 年)では、原文の一部の語句に対して古訓の読み方を用いず、音読みにて訓読する方法を試みたのである。

[18]神田(1949：101)
[19]小島(1962：519-535)
[20]中村(1986：147-150)

日本書紀古訓の年代性・系統及び異なる写本の訓法の相違などに関して、築島・石塚(1978)は岩崎本『日本書紀』の古訓の系統を綿密な検討を行い、岩崎本の訓法は図書寮本と北野本とはかなりの相違があり、岩崎本の十世紀末の訓点は国語資料としてかなり均質的なものであるのに対し、図書寮本の訓点はすでに集成的性格をもっていると指摘している。石塚(1984)は図書寮本と前田本とを比較してその相違を検討した。前田本の訓点には、図書寮本に見えない新しい仮名字体群・辞書的注記などがある一方、前田本の訓点は図書寮本のそれより古い要素を持っていることを指摘している。また、杉浦(1995)は異なる伝本の訓読を比較し、その差異をめぐって神代巻を中心として検討した。以上の研究より、『日本書紀』の訓点資料としての総合的研究成果が提示された。

一方で、日本書紀古訓の敬語表現や語彙についての研究も挙げられる。敬語表現について、林(1977)、杉浦(1990)などの論考がある。林(1977)は岩崎本を中心に検討し、岩崎本の敬語は上代語の特徴を強く持っているとする。杉浦(1990)は敬語表現をめぐって、異なる伝本の異同を比較した。

また、日本書紀古訓の語彙を対象に、意味分野別・品詞別にて論じるものも見られる。金(2008A・B)は日本書紀古訓に存する親族語彙を中心に論究した。三保(1995)は『日本書紀』の岩崎本、前田本、北野本など、五種の古写本を考察対象として、『日本書紀』の本文における助数詞の用法を観察し、さらにその古訓における助数詞の受容、摂取の様相を検討している。唐(2009)は、『日本書紀』に見える中国口語起源の二字漢語の訓法について、平安時代から江戸時代に至るまで、十四種の『日本書紀』の写本や版本を利用し、品詞別に調査を行った。

以上のように、これまで日本書紀古訓に関して多方面にわたって研究が行われ、数多くの優れた研究成果を積み重ねられてきた。しかし、これまでの研究は、日本書紀古訓の系統・訓法・諸本間の訓法の異同・古訓の根拠などに集中する。日本書紀古訓の語彙を全体に検討するものは盛んになされていないようである。上記の先行研究の中に、金(2008A・B)、三保(1995)、唐(2009)は日本書紀古訓の語彙に関する論考であり、先見性を示すものである。しかし、金(2008A・B)は親族語彙の全体ではなく、母親や兄弟姉妹を中心に検討するだけであり、三保(1995)は平安時代の『日本書紀』の古写本を中心に考察し、ほかの時代の写本については論じておらず、唐(2009)は唐代口語の二字漢語以外の漢文箇所について、その訓みはどうなされたかは触れていないなど、先行研究の不足点が指摘できる。すなわち、『日本書紀』の古訓語彙に関してまとまった研究が見出せないのが現状である。このような状況の中、本研究では、日本書紀古訓語彙の中で特に古訓の形容詞語彙を取り上げ、その全体の様相及び性格を明らかにしたい。

1.4　研究対象と研究目的

本研究では『日本書紀』の諸訓点本を調査の中心資料とし、日本書紀古訓語彙の中で特に形容詞語彙を取り上げて調査・分析をしたい。形容詞はものの属性・性質・状態や人の感情・感覚・評価を表す[21]ものであり、文章を構築する際に重要な役割を担う語である。そして、名詞や動詞と違って、形容詞は人間の認識や物事の把握方式に関係する部分が多く、事柄に左右されない特質をもっているため、表現の素材を等しくしない資料の語彙を比較するには便宜なところがあると指摘している[22]。

日本語の形容詞は上代に発生し、平安時代になって語数が多くなり、用法も整えられるようになって著しい発達を遂げた。特に、平安時代の女流文学作品において物事の属性・状態を表す場合だけではなく、作品の人物の喜怒哀楽などの心情を描写する場合に盛んに利用され、現在数多くの優雅な文章が残されている。それ以降の中世に入ってから、表現対象の多様化に伴って新たに作りだされたものも少なくはない。その結果、これまで古典語・現代語の形容詞について豊富な資料を用い、計量語彙論・意味論・語構成論などの視点から、日本語形容詞の形態・意味・文法機能などの様相を論じる先行研究が多く見られる。しかしながら、古典語の形容詞を対象とする研究における語を採取する資料は和歌､物語､散文、韻文などに集中する傾向があり、訓点資料の形容詞に関する論究は盛んに行われているとはいえない。その理由は、訓点資料の数が膨大であり、かつ内容の全貌が公表されているものは極めて少なく、他の資料に比べて語彙の索引ができているものは稀である[23]ことと、訓点資料の附訓が、訓点を加える者が漢文に対する理解と解読に左右される面が多いことなどが挙げられる。しかし、訓点資料は国語研究における重要な資料の一つであり、日本語の形容詞語彙の全体像を明らかにするには、訓点資料の形容詞語彙についての考察が欠かせないと思われる。そのため、本研究は日本語の形容詞語彙の様相・歴史的変遷全貌の解明に関する研究の一環とするばかりではなく、これまでほとんど研究されてこなかった日本書紀古訓語彙に関する研究とするものである。そして、日本書紀古訓語彙の中、特に形容詞語彙に着目し、量的構造、意味的構造、異本間の同文比較、原文の漢字・漢語との対応関係など、いくつかの方面から考察する。日本書紀古訓の形容詞語彙全体の様相、『日本書紀』の各写本・版本における古訓形容詞語彙の性格を明らかにすることが研究の目的である。

---

[21]北原(2010：26-28)
[22]寿岳(1955：61-62)
[23]築島(1956：34)

1.5　論文の構成

本研究では、『日本書紀』の諸古写本や近世版本を中心に、日本書紀古訓の形容詞語彙を取り上げ、量的構造、意味的構造、異本間の同文比較、原文の漢字・語句との対応関係、日本書紀古訓語彙の意味記述とその史的変遷などの方面から日本書紀古訓の形容詞語彙全体の様相・性格を検討する。本論文は七つの部分から構成され、次に順を追って各章における調査・検討する内容について簡単に紹介する。

第 1 章では、日本書紀古訓、『日本書紀』の諸本及び本研究において利用する『日本書紀』の訓点本を紹介し、日本書紀古訓に関連する先行研究を概観した。そして、本研究の研究対象と研究目的を明らかにし、論文の構成と各章の内容について簡単に紹介する。

第 2 章では、計量的比較の方法を用いて日本書紀古訓の形容詞語彙の量的性格を明らかにする。具体的な調査・分析方法は村田（2005）の調査結果と比較し、量的な側面から日本書紀古訓の形容詞語彙の性格を分析する。村田(2005)が利用した調査資料の年代を考慮し､それと隔たりの少ない古写本系統に属する岩崎本、前田本、図書寮本を利用した。

村田(2005)は上代資料、中古の散文資料及び一般の訓点資料を用いて語構成をはじめ、活用形、語の古さと新しさ、語の階層構造、造語形式、結合タイプなど、すなわち語構成論的な観点から上代と中古の形容詞について分析を行い、各資料の間に見られる共通点や相違点を検討し、形容詞語彙における上代から中古への体系的変化を述べている。本論では、日本書紀古訓の形容詞語彙について考察した結果を村田(2005)の調査結果と対照し、日本書紀古訓の形容詞語彙はどの資料の形容詞語彙と近似するかを分析する。

第 3 章では、神代巻における日本書紀古訓の形容詞語彙について、その意味的構造及び史的変遷を考察する。調査資料は『日本書紀』神代巻の卜部兼方本(弘安本)と卜部兼夏本(乾元本)の二種である。

『日本書紀』の神代巻は上代の神話を取り扱う内容であり、その中で使用された形容詞語彙は意味的にどのような特徴があるかを検討する具体的な調査内容は、神代巻の古写本から採取する日本書紀古訓の形容詞語彙を整理し､一覧表にする。それから、収集された語彙に対する集計処理及び意味分析によって、神代巻の古写本二種における日本書紀古訓の形容詞語彙の様相と意味構造について究明する。意味分野と意味的特徴を調査する際に､『日本古典対照分類語彙表』を利用する。

また、調査資料としての神代巻古写本二種にある古訓は十三、十四世紀に加点

されたものであるため、時代の移り変わりとともに、古訓語彙にどのような史的変遷が発生したかを調査する。収集したした古訓形容詞語彙について、現代に引き継がれているもの・現代に引き継がれ、意味が変化したもの・消滅したものなどに分類して調査する。

第 4 章では、同文比較の方法を用い、巻二十二と巻二十四を有する『日本書紀』の訓点本四種から採取した古訓形容詞語彙を比較し、その異同を記述する。

『日本書紀』諸本の中では、巻二十二と巻二十四を有するものが比較的多い。本論では巻二十二と巻二十四を有する古写本系統の岩崎本と図書寮本、卜部家系統の兼右本、近世刊本の寛文九年版本の四種について、それぞれの巻二十二と巻二十四から古訓形容詞を抽出して整理する。そのうえで、同じ漢文に対して各古写本の古訓形容詞の附訓状況、語数、語彙などの様相を調査し、それと対応する漢文との関係も見ていく。そして、四種の訓点本における同一漢文と対応する古訓形容詞を比較し、その共通面と相違面を考察する。このような考察を通して日本書紀古訓における形容詞語彙の様相、異なる伝本において形容詞語彙使用の実態及びその相違、歴史的変遷などの解明を目的とする。

第 5 章では、岩崎本を中心な調査資料として、日本書紀古訓の形容詞語彙と原文の漢字・漢語の対応について検討する。具体的な方法は日本書紀古訓の形容詞と対応する原文の漢字一字と合符のある漢字二字に分類して整理する。古訓における形容詞で附訓する漢文箇所が原文において形容詞と認められるかどうかを検討する。さらに原文の形容詞はどのように日本語に受容されることと古訓と漢文原文の関連性を見つける。検証する目的は、『日本書紀』における古訓はいかなる根拠によって漢字・漢語と対応させたのかを究明し、日本書記古訓の妥当性を検討することにある。

第 6 章では、日本書紀古訓の形容詞語彙の中、漢字「賢」にかかわる古訓形容詞「カシコシ、サカシ、ヲサナシ」の三語を取り上げ、原文においてこの三語の古訓を持つ漢文の用例を収集し、原文の文脈に基づき分析したうえで、三語それぞれの意味用法を記述する。そして、その意味的変遷の様相についての考察も加える。

本論文の最後の部分では、調査内容の全体をまとめ、調査を通して得た結果と残された問題を今後の課題として述べる。

2　量的構造から見る日本書紀古訓の形容詞語彙

語彙の量的構造というのは計量言語学の術語であり、それついての定義は学者によって異なり、広い意味と狭い意味からの二種の解釈がある。広い意味での語彙の量的構造については、国立国語研究所の「雑誌 90 種の調査」(報告 25)の第 2 章で、「語の使用率の分布、語種と品詞の使用率分布」などは「語彙の量的な構造」とする。狭い意味での語彙の量的構造とは語彙の分布法則を近似関数で表すものである。語彙の量的記述に終わっているものは「語彙の性格」とし、あるいは「広い意味での語彙の量的構造」と呼ぶ[24]。

本章では、村田(2003)、(2004)、(2005)、(2010)など、一連の調査・分析結果と比較対照し、『日本書紀』の訓点本に見える形容詞語彙はどのような量的性格を有するのか、異なり語数・述べ語数・使用度数・活用の比率などの方面から調査するため、広い意味での『日本書紀』における古訓形容詞語彙の量的構造の考察であると思われる。

2.1 調査資料と方法

2.1.1　調査資料

本章では、日本書紀古訓の形容詞語彙についての調査結果を村田の調査結果と比較するために、村田が調査した資料の年代を考慮し、可能な限りそれと年代的な隔たりの少ない『日本書紀』の訓点資料を調査する。したがって、次の古写本系統に属する『日本書紀』の古写本三種は本章の調査資料とする。

1　岩崎本　　京都国立博物館蔵、東洋文庫旧蔵
2　前田本　　前田育徳会尊経閣文庫蔵
3　図書寮本　宮内庁書陵部蔵

また、前章で述べたように、岩崎本の訓点は複雑な様相を呈しており、Ⓐ平安中期末点・Ⓑ院政期点・Ⓒ室町時代の三種に分けられる。よって本章では、岩崎本から採集された日本書紀古訓の形容詞語彙に対し、加点の時期に分けて調査する。図書寮本は古写本系統のものを利用し、すなわち現存する十二巻のうち、訓点を有していない巻十と卜部家系統に属する巻二を除き、院政期書写の十巻を調査する。前田本は現存する四巻すべてについて調査する。

[24]伊藤(2002：247-248)

2.1.2　調査方法

日本古典語の形容詞について詳しい研究を行っているのは村田菜穂子である。村田(2003)、(2004)、(2005)、(2010)の一連の研究では、上代資料[25] 、中古の散文・韻文資料[26]及び訓点資料[27] から採取した形容詞語彙のデータについて、語構成をはじめ、活用形・構成単位数・結合型・語の古さと新しさ、語の階層構造、造語形式など、いくつかの観点から分析を行い、各資料の間に見られる共通点や相違点を検討し、形容詞語彙における上代から中古への体系的変化について述べている。本章では、村田の研究を踏まえ、『日本書紀』の古写本から収集された日本書紀古訓の形容詞語彙について検討し、その結果を村田の研究結果と比較する。比較を通して、相違点及び日本書紀古訓の形容詞語彙の量的性格を見出す。

具体的な調査方法は、『日本書紀』古写本系統の岩崎本、前田本、図書寮本の三種の古写本から古訓の形容詞を抽出し、語数・活用形の構成比率・三種の写本に共通する語・語の階層構造・語の新旧を統計し、その結果を村田(2005)、(2010)の調査結果と比較しながら、基礎的な調査を行う。すなわち、量的側面から三種の古写本における古訓形容詞語彙の性格を明らかにする。

2.2　各写本における古訓形容詞語彙の使用状況

2.2.1　各写本に見る古訓形容詞語彙

各古写本から古訓形容詞語彙を採集する際にその認定に当たっては、形式的な方法と意味的な方法を用いる。そして、認定が難しいものに対し、『日本国語大辞典(第二版)』、『時代別国語大辞典(上代篇)』、『岩波古語辞典(補訂版)』などの国語辞書や古語辞書を参考した。なお、上記の辞書において見出し語として登載されてないものは稀にあるが、このような語に対して、語構成を分析したうえで調査し、原文の文意に合わせるために造り出したもの、すなわち日本書紀古訓特有の語と判定できれば考察の対象とする。そして、「かほよし、いのちながし」のような複合語は複合形容詞として一語と認めている。また、古訓は同じだが、それと対応する漢字が異なり、かつ漢字の意味も異なるものは二語と認めている。こ

[25]『時代別国語大辞典上代編』から収集する形容詞のうち、東国語方言の語や複合形容詞にのみその存在が確認される語を除き、万葉集・古事記(仮名書き部分)・日本書紀・風土記・続日本紀宣命・祝詞に用例のあるもの。
[26]中古資料には八代集の『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』『千載集』『新古今集』及び『竹取物語』『土佐日記』『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』『多武峯少将物語』『宇津保物語』など総計 22 作品がある。
[27]『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』『神田本白氏文集巻第三・四』『高山寺本古往来』。

のように採集した『日本書紀』各古写本の形容詞の異なり語数とその使用度数[28]を次のように示した。

(一)岩崎本(60 語)

ア：アカシ１　アシ 14　アツシ(厚)2　アマネシ４　アヤシ１　アヤフシ３
　　アラシ２

イ：イササケシ５　イトナシ１　イノチナガシ１

ウ：ウタガワシ１　ウツムナシ５　ウルハシ２

オ：オソシ３　オモシ１　オモシロシ１

カ：カウバシ１　カシコシ３　カタシ１　カタマシ４　カナシ２　カルガルシ２

キ：キヨシ１

ク：クサシ２　クヤシ１

サ：サカシ３　サガナシ１

シ：シゲシ１　シロシ１

ス：スクナシ２　スズシ１ スミヤケシ２

タ：タカシ３　タダシ１　タフトシ１　タヤスシ２

チ：チカシ２　チヒサシ５

ツ：ツタナシ１

ト：トシ(利)3　トシ(疾)2　トホシ３　トモシ１

ナ：ナシ 17

ニ：ニヒシ４

ハ：ハヤシ３

ヒ：ヒサシ１

フ：フカシ３　フルシ３

マ：マヅシ１

ム：ムナシ２

メ：メグシ１　メヅラシ１

ヤ：ヤスシ１

ユ：ユルシ１

ヨ：ヨシ８

ワ：ワイワシシ２　ワカシ３

ヰ：ヰヤナシ２

ヲ：ヲサナシ１

---

[28]使用度数はアラビア数字にて語の後に示す、多義語に対し、それと対応する漢字を(　)の中に示す。

(二)前田本（77 語）

ア：アザラケシ 2　アシ 10　アツシ(敦)2　アツシ(熱)1　アヤシ 7　アヤフシ 2　アラシ 4

イ：イサギヨシ 2　イササケシ 1　イスカシ 1　イソシ 1　イタシ 1　イツクシ 2　イヤシ 2

ウ：ウルハシ 4

オ：オソシ 3　オフシ 2　オホシ 4　オムオムシ 1　オモシ 4　オモナシ 1

カ：カタシ 9　カダマシ 2　カナシ 2　カホヨシ 2　カラシ 1

キ：キヨシ 3　キラキラシ 2

ク：クダクダシ 1　クハシ 2　クラシ 1　クルシ 2

コ：コハシ 1

サ：サカシ 5　サガシ 6　サガナシ 2　サトシ 1

シ：シロシ 1

ス：スズシ 2　スクナシ 1

タ：タカシ 3　タクマシ 1　タケシ 4　タシナシ 1　タダシ 2　タヤスシ 1

チ：チカシ 1　チヒサシ 1

ツ：ツタナシ 1　ツヨシ 1

ト：トシ(敏)3　トシ(疾)9　トホシ 7

ナ：ナガシ 1　ナシ 11　ナメシ 1

ハ：ハヅカシ 1

ヒ：ヒサシ 5　ヒトシ 1　ヒロシ 3

マ：マタシ 5

ミ：ミジカシ 1　ミダリガハシ 1　ミヅナシ 2　ミニクシ 1

ム：ムヅマジ 2　ムナシ 1

メ：メズラシ 1

ヤ：ヤスシ 2

ヨ：ヨシ 8　ヨワシ 1

ワ：ワカシ 4

ヰ：ヰヤナシ 2　ヰヤヰヤシ 1

ヲ：ヲシ 1　ヲサナシ 1　ヲヂナシ 2

(三)図書寮本(107 語)

ア：アシ 12　アツシ(敦)5　アマネシ 2　アヤシ 10　アヤフシ 2　アラシ 6

イ：イカシ 1　イサギヨシ 1　イササケシ 2　イサヲシ 3　イスカシ 1　イタハシ 2

イツクシ１　イトキナシ１　イトナシ１　イヤシ３

ウ：ウツナシ１　ウツムマシ１　ウマシ１　ウヤナシ１　ウルハシ 10　ウラタシ１

オ：オソシ７　オホシ４　オムオムシ２　オモシ７　オモシロシ２

カ：カグハシ１　カシコシ４　カタシ(堅)5　カタシ(難)3　カタジケナシ１
カダマシ３　カナシ２　カヘガヘシ１　カホヨシ４　カマビスシ１　カラシ３
カルシ１

キ：キタナシ１　キヨシ６　キラキラシ４

ク：クサシ２　クダクダシ１　クハシ１　クヤシ１　クラシ１　クルシ１

コ：コハシ１

サ：サカシ 13　サガシ３　サガナシ１　サトシ４　サムシ１

シ：シロシ２

ス：スクナシ１　スズシ３

タ：タカシ４　タクマシ１　タケシ５　タダシ６　タハシ１　タハヤスシ２
タヤスシ１

チ：チカシ３　チヒサシ２

ツ：ツタナシ３　ツバヒラケシ１

ト：トシ(疾)5　トシ(利)1　トホシ７　トモシ１

ナ：ナガシ１　ナシ 12　ナメシ１

ニ：ニヒシ３

ネ：ネガハシ３　ネタシ１

ハ：ハゲシ１　ハヅカシ１　ハナハダシ１

ヒ：ヒサシ７　ヒトシ１　ヒロシ１

フ：フカシ１　フルシ１

マ：マタシ７

ミ：ミジカシ１　ミヅナシ１　ミニクシ１

ム：ムツマジ４　ムナシ１

メ：メグシ４　メヅラシ２

モ：モシ(茂)1

ヤ：ヤスシ４　ヤヤヒサシ２

ユ：ユルシ１

ヨ：ヨシ 11　ヨロシ１　ヨワシ１

ワ：ワカシ７

ヰ：ヰヤナシ９　ヰヤヰヤシ１

ヲ：ヲサナシ６　ヲサヲサシ１　ヲヲシ１

2.2.2　各写本における古訓形容詞語彙の使用状況

この節では、『日本書紀』の古写本三種における古訓形容詞の使用状況を調査し、写本ごとの異なり語数、延べ語数、活用形の構成比率を表１に示す。そのうち、岩崎本の古訓は、大別して平安中期、院政期、室町時代宝徳３年及び文明６年の三つの時期に加点された三種のものがあるため、その加点時期に分けて示す。また、古訓形容詞に対する調査結果の比較対象として、村田(2005)から上代語、八代集、中古散文、訓点資料についての調査結果を表２に示す。

表１『日本書紀』各写本における形容詞の語数及び活用形構成比率

写本		語数		活用形（異なり語数）			
		異なり	延べ	ク活用	比率%	シク活用	比率%
岩崎本（2巻）	平安中期	42	131	32	76.2%	10	23.8%
	院政期	35	127	24	68.6%	11	31.4%
	室町時代	40	136	27	67.5%	13	32.5%
前田本(4巻)		77	201	50	64.9%	27	35.1%
図書寮本(10巻)		107	314	70	65.4%	37	34.6%

表２　村田(2005)による古代形容詞の活用形構成比率　(pp.38-39)

活用	上代形容詞		八代集の形容詞		中古散文の形容詞		訓点資料の形容詞	
	語数	比率	語数	比率	語数	比率	語数	比率
ク活用	134	54%	210	77.5%	738	65.7%	152	77.6%
シク活用	114	46%	61	22.5%	386	34.3%	44	22.4%
合計	248	100%	271	100%	1124	100%	196	100%

『日本書紀』の古写本三種から収集された形容詞について、まず異なり語数・一語当たりの平均使用度数から見ておく。表１に示したように、異なり語数は岩崎本の平安中期加点では42語、院政期では35語、室町時代では40語であり、それぞれ重複する語を除き岩崎本の異なり語数は60語、前田本では77語、図書寮本では107語である。各写本の巻数、各巻の取り扱った内容などが語数にかなり影響している。特に図書寮本の現存する巻数は比較的多く、本文の内容も多いと考えられる。したがって、古訓形容詞の異なり語数は岩崎本と前田本では差が見られる。三種の古写本の附訓状況を確認すると、岩崎本の加点は数回を経て同じ

漢文箇所に対し数度の附訓が見える箇所と、すでに附訓のある箇所には再度附訓しないものがある。一方で、前田本と図書寮本には漢文の左右両側に附訓した箇所が見られる。附訓の状況はそれぞれ違うが、さほど大きな差は見られない。そして、各古写本の共通する語、各巻にわたって用いられる語は 40 語以上あり、岩崎本と前田本の異なり語数の半分以上、図書寮本の 4 割程度を占める。このような語は『日本書紀』の訓点本に使用する形容詞の基調語彙の一部だと思われる。

一語当たりの平均使用度数について確認すると、岩崎本は平安中期に加点したものは 3.12 回、院政期のものは 3.63 回、室町時代のものは 3.4 回であり、前田本は 2.61 回、図書寮本は 2.93 回である。語の使用度数については前田本がやや低いが、岩崎本と図書寮本とは大きな差が見られない。また、いずれの写本においても、一回のみ使われる語が形容詞全体の約半分を占めている。三種の古写本に共通する形容詞で使用頻度の高い語は、「アシ(悪)、ヨシ(善)、ナシ(無)」の 3 語である。

次に、形容詞の活用形とその割合について見てみる。岩崎本では、平安中期に加点した 42 語のうち、ク活用が 32 語で 76.2%、シク活用が 10 語で 23.8%を占め、ク活用がシク活用との比率差が最も大きい。それに対し、院政期及び室町時代加点したものはその比率差はやや小さく、大きな差が見られない。前田本と図書寮本の語数は違うが活用形の比率には大きなひらきが見られない。三種の古写本の巻数、内容に差異があるため、完全な比較が難しいのは言うまでもない。しかし、上記の数値を見ると、三種の古写本におけるク活用形用詞の構成比率は 65%以上を占め、シク活用形用詞の比率は 30%程度にとどまり、いずれの古写本においてもク活用とシク活用形用詞の構成比率には大きなひらきがあると認められる。

ク活用形容詞は物事の客観的な状態・性質を表す語が多いことに対し、シク活用形容詞は人間の心情を表すものが多いとされる。本章で利用した古写本は人皇巻であり、内容には豊富な人物の心情などの描写がなく、歴代の天皇が即位前以前から即位以降の治世についての内容を記述する。異なり語数を見ると、ク活用形容詞はシク活用形容詞を上回ることは、『日本書紀』は歴史書である性質にかかわるといえる。

村田(2005)は上代（『時代別国語大辞典上代編』）、中古（八代集、中古散文及び訓点資料）の資料を比較し、形容詞の形態的な特徴についての分析を行っている[29]。その結果は、活用形から見ると、表 2 に示すように上代形容詞ではク活用とシク活用の構成比率には大きなひらきはない。それに対し、中古の形容詞は

[29]村田(2005：37-40)

ク活用とシク活用の構成比率の差は著しく大きくなり、いずれの資料においてもク活用形用詞の割合がシク活用形用詞を上回るようになる。

表 1 と表 2 の数値を合わせてみると、形容詞の活用形構成では、表 2 に示している上代資料を除き、調査した三種の古写本と八代集、中古散文および訓点資料のいずれの場合もク活用形用詞がシク活用形用詞を大きく上回り、ク活用対シク活用の構成比に大きな偏りがあるという共通する性質が認められる。そのうち、岩崎本の平安中期加点は、ク活用の比率は 70%以上を占め、シク活用は 20%程度で、その数値は八代集、訓点資料のそれと近似している。それに対し、岩崎本の院政期加点、室町時代加点、前田本、図書寮本の場合は、中古散文の性質に近似している様相を呈する。形容詞活用形の側面から考察した結果、『日本書紀』三種の古写本に見える形容詞は上代語形容詞の性質とは異なる様相を呈し、八代集・中古散文及び訓点資料に見られる形容詞の性質に近似しているという特徴が窺える。

2.2.3　各写本の共通する古訓形容詞語彙

今回調査した『日本書紀』三種の古写本における共通して認められる語及び各写本のそれぞれ特有の語について、その使用状況を調査し、異なり語数を表 3 にまとめる。各写本共通の古訓形容詞を集計する際に、同音語については、慣用表記漢字が違い、かつ意味も違う場合は違う語として扱っている。例えば、「アツシ（篤)、アツシ（厚)、アツシ（熱)」は 3 語として認めるが、「カタシ（堅)、カタシ（固)」は 1 語として扱っている。

三種の古写本に共通する形容詞は 41 語があり、各写本の特有語を確認すると、図書寮本のほうが語数が最も多く、22 語がある。内訳を見ると、「オモシ(重)、オモシロシ(面白)、チカシ(近)」など、共通する形容詞は意味的にも基本的なものが多い。しかし、現代語には多用される「ウマシ（ウマイ)、キタナシ（キタナイ)、サムシ（サムイ)」などの語は岩崎本と前田本には見られない。また、各写本共通の古訓形容詞(延べ語数)で、最も多用されるのは「ナシ(ク活用)」(51 語)であり、「ヨシ」(42 語)、「アシ」(36 語)、「トシ」(25 語)、「サカシ」(21 語）の 4 語がこれに続き、『日本書紀』の古写本に見える形容詞において、使用頻度の高い語と言える。

表 3　各写本にある形容詞の比較（異なり語数）

各写本共通の形容詞		語数	ク活用	シク活用
		41	28	13
岩崎本特有	平安中期	7	5	2
	院政期	3	3	0
	室町時代	12	7	5
前田本特有		11	7	4
図書寮本特有		22	14	8

2.3　日本書紀古訓形容詞語彙の階層構造

本節では、『日本書紀』三種の古写本から収集した形容詞語彙について、階層構造という観点から異なり語数とその比率を調査し、どのような特徴があるかを分析してみる。「階層構造」というのは語構成論的な観点で、形容詞の発達段階に見られるいろいろな語構成要素の結合による重層的な在り方のことである。それについての詳しい説明を村田(2010)は以下のようにのべている。

> 階層構造というのは、成立した語形が形容詞として第一番目のものであるか、或いは既存の形容詞になんらかの語構成要素が接合して構成された第二番目、或いは第二番目の形容詞さらに別の要素が接合して構成された第三番目のものであるかを分析したものであり、派生や複合によってどの程度自己繁殖が進んでいるかを捉えようとした観点である。例を用いて具体的に言うと、形容詞として成立した第一番目の語形である形容詞として「なし、くるし」などがあり、この第一次形容詞から構成された「をさ/なし、こころ/くるし」などは第二次形容詞ということになる。さらに、この第二次形容詞から構成された「こころ/をさ/なし、もの/こころ/くるし」などは第三次形容詞となる。上代及び中古の資料から採取された形容詞は以上のような三段階のものが存在する[30]。

以上の定義に従い、次に古写本三種ごとの形容詞階層構造の量的構成について調査を行う。調査方法は、村田（2010）の上代～中世資料の形容詞語彙表にある語と対照する。この語彙表は村田(2010)が日本語の上代資料（『時代別国語大辞典上代編』)、中古資料（八代集・中古散文作品・訓点資料）および『今昔物語集』、

[30]村田(2010：161)

軍記物語三作品から採取した形容詞について語構成論的な観点から調査・分析を行い、その結果をまとめたものである。

手順としてはまず、村田（2010）の語彙表と照らし合わせ、本研究で扱う三種の古写本からそれと対応する語を拾い出した。対応する語は、その階層構造について村田(2010)に従い、語彙表の語と対応しない語については独自に分析する。対応しない語は以下の通りである。

岩崎本（5語）　イササケシ、ウツムナシ、ニヒシ、ワイワイシ、ヰヤナシ
図書寮本（9語）イササケシ、イスカシ、ウツナシ、ウヤナシ、ツバヒラケシ、ニヒシ、ミツナシ、ヰヤナシ、ヲヂナシ
前田本（5語）アザラケシ、イササケシ、イスカシ、ミツナシ、ヰヤナシ

『日本国語大辞典』及び『時代別大辞典上代編』で確認し、「ウツムナシ」と「ウツナシ」、「ウヤナシ」と「ヰヤナシ」は、それぞれ同じ語と認めることができ、それ以外、重複する語を除いて、以下の10語の階層構造が不明であり、村田(2010)と同様の分析方法を用いて分析する。

アザラケシ、イササケシ、イスカシ、ウツムナシ、ウヤナシ（ヰヤナシ）、ツバヒラケシ、ニヒシ、ミツナシ、ワイワイシ、ヲヂナシ

このように分析した結果、『日本書紀』三種の古写本にある古訓形容詞は第一次、第二次形容詞しか見られず、第三次のものは存在しなかった。具体的な調査結果を表４にまとめた。

表４　日本書紀古訓形容詞の階層構造

写本		異なり語数	形容詞の階層構造			
			第一次	比率%	第二次	比率%
岩崎本	平安中期	42	36	85.7	6	14.3
	院政期	35	31	88.6	4	11.4
	室町時代	40	38	95.0	2	5.0
前田本		77	61	79.2	16	20.8
図書寮本		107	77	72.0	30	28.0

表4を見ると、『日本書紀』三種の古写本において、いずれも第一次形容詞の比率が高い。そのうち、岩崎本の室町時代加点は、第一次形容詞の比率が最も高く

95%になり、第二次形容詞の比率は 5%しか占めず、第一次形容詞と第二次形容詞には大きなひらきが見られる。前田本と図書寮本においても、両方とも第一次形容詞が 7 割以上を占め、第二次形容詞は 2 割程度にとどまっている。

村田(2005)によると、上代から中世にかけては、上代形容詞で、第一次形容詞が優位性を占めるが、中古になると、第二次形容詞の割合が一気に高くなり、訓点資料以外の資料でも第二次形容詞が半分以上を占めるようになり様相が変わるという結果が分かる。ここでは、『日本書紀』三種の古写本における古訓形容詞語彙について調査した結果と比較するために、村田(2005)の調査結果を表 5、表 6 に示す。

そして、村田(2005)では、すでに上代から存在が認められる形容詞を「既存」の形容詞、上代にはその存在が認められていない形容詞を「新出」の形容詞と呼んでいる。さらに、「既存」の形容詞と「新出」の形容詞の異なり語数についても調査し、その結果を含め、表 5 と表 6 に示している。本研究では、それについて次の節で考察する。

表 5　村田(2005)による上代、中古資料における形容詞の階層構造(p. 109)

資料 / 階層	上代		八代集(全体)		八代集(新出)		中古散文(全体)		中古散文(新出)	
	語数	比率%	語数	比率%	語数	比率%	語数	比率%	語数	比率%
第一次形容詞	188	75.8	126	46.5	39	22.4	391	34.8	266	27.3
第二次形容詞	60	24.2	142	52.4	132	75.9	690	61.4	666	68.3
第三次形容詞	0	0	3	1.1	3	1.7	43	3.8	43	4.4
合計	248	100.0	271	100.0	174	100.0	1124	100.0	975	100.0

表 6　村田(2005)による中古訓点資料に見える形容詞の階層構造(p. 113)

資料 / 階層	訓点資料(全体)		訓点資料(新出)	
	語数	比率%	語数	比率%
第一次形容詞	103	52.6	32	27.6
第二次形容詞	93	47.4	84	72.4
第三次形容詞	0	0	0	0
合計	196	100	271	100

表 4 に示す『日本書紀』三種の古写本の古訓形容詞について調査結果を表 5、表 6 の調査結果を比較してみると、語数について、第三次形容詞が存在していないという点は、日本書紀古訓の形容詞は上代資料、訓点資料の形容詞と同じ様相

を呈している。比率という側面からみると、村田(2005)の調査結果では、上代資料の形容詞で第一次形容詞の比率は 75.8%、第二次形容詞 24.2%、その間に大きなひらきがある。訓点資料語彙全体の場合は、第一次形容詞対第二次形容詞の比は大きな差がない。したがって、日本書紀古訓の形容詞は上代資料形容詞の性質に近い様相を呈することが分かる。

2.4　日本書紀古訓形用詞語彙の新しさと古さ

今回調査した『日本書紀』三種の古写本の訓点は平安時代中期末、院政期に加点したものであり、岩崎本には室町時代の加点もある。したがって、各古写本に使用された形容詞には、上代においてすでにその存在が確認できる語と、中古に入ってからその存在が確認できるようになった語の、性質の異なる二種が併用されていると考えられる。本論では村田(2010)の対照語彙表を用い、各写本から収集した古訓形容詞の新旧状況を調査する。

表 7 は収集した日本書紀古訓の形容詞語彙について調査し、その「既存」の語と「新出」の語の語数と比率について、異なり語数、延べ語数に分けて示したものである。

表 7　「既存」と「新出」語数及び比率

＜異なり語数＞

写本		異なり語数	語の新旧			
			上代既存	比率%	中古新出	比率%
岩崎本	平安中期	42	33	78.6	9	21.4
	院政期	35	28	80.0	7	20.0
	室町時代	40	36	90.0	4	10.0
前田本		77	63	81.8	14	18.2
図書寮本		107	83	77.6	24	22.4

＜延べ語数＞

写本		延べ語数	語の新旧			
			上代既存	比率%	中古新出	比率%
岩崎本	平安中期	131	117	89.3	14	10.7
	院政期	127	115	90.6	12	9.4
	室町時代	136	125	91.9	11	8.1
前田本		201	185	92.0	16	8.0
図書寮本		314	273	86.9	41	13.1

異なり語数の調査結果を見ると、岩崎本は、三期の訓点における形容詞はいずれも「新出」の語は多くない。今回調査した『日本書紀』三種の古写本において、図書寮本では 24 語あり、他の写本に比べ、中古新出の形容詞の語数が多少多くなっている。一方、語の新旧構成比率は、岩崎本の室町時代加点において、上代に既存する語の比率は最も高く、90%になり、それを除き、岩崎本のほかの二種の訓点に見える形容詞、前田本、図書寮本は、いずれにおいても、上代に既存する形容詞が少なくとも 7 割以上を占めており、中古新出の形容詞は 2 割程度にとどまる。これは、築島（1963）が指摘した「日本書紀古訓には当時の一般の訓読に用いられていない、上代語が用いられている」という特徴と一致していると考えられる。

延べ語数についての調査結果を見ると、「新出」の形容詞の比率は更に低くなり、1 割程度である。この数値より、『日本書紀』三種の古写本において上代から存在する「既存」の語のほうが「新出」の語より繰り返し使用されていたことが読み取れる。以上のような形容詞の新旧構成についての調査結果から、古写本系統に属する『日本書紀』三種の古写本において古訓の形容詞語彙には上代語形容詞が比較的多いという特徴が窺える。

また、語の階層構造と語の新旧を照らし合わせてみると、岩崎本は三期の訓点に見える形容詞は、重複する語を除き 60 語がある。そのうち第一次形容詞は 51 語があり、第二次形容詞は 9 語ある。上代既存の語は 48 語、中古新出の語は 12 語がある。第一次形容詞はほぼ上代既存の語であり、第一次形容詞であるかつ中古新出の語は 6 語しかない。前田本と図書寮本について調査してみると、第一次形容詞且つ上代既存の語が多く、岩崎本と同じ様相を呈することが分かる。

2.5　まとめ

本章では古写本系統に属する『日本書紀』三種の古写本を用い収集した古訓形容詞語彙を対象に、語数・活用形の構成比率・三種の古写本に共通する語・語の階層構造・語の新旧などについて、量的側面から、村田(2005)、(2010)の調査結果と比較しつつ、基礎的な調査を行った。

異なり語数から見ると、三種の古写本はいずれも形容詞の附訓が多いとは言えない。『日本書紀』は全三十巻があるが、今回調査した古写本はその一部しか残らず、また各巻の取り扱った内容などが語数に影響することが考えられる。これは異なり語数が多くない理由の一つと言えるだろう。なお、各写本における古訓形容詞の使用状況から見ると、岩崎本は現存 2 巻、前田本 4 巻、図書寮本は現存 12

巻あり、本論でその中の 10 巻を調査した。図書寮本の巻数は比較的に多いため、語数は岩崎本と前田本と差が見られる。三種の古写本の共通する語について確認すると、各巻共通の語、各巻にわたって用いられる語は 41 語あり、このような語は『日本書紀』三種の古写本に使用する形容詞の基調語彙の一部だと考えられる。それに対し、各写本において 1 回限り使用された語は形容詞語彙全体の約 5 割を占めている。

また、活用形の構成から見た体系的特徴として、岩崎本の平安中期加点はク活用形容詞の比率が高く、76.2%を占め、シク活用は 23.8%を占めている。さらに、岩崎本のほかの二期の訓点及び前田本、図書寮本において、ク活用形容詞がいずれも 6 割以上を占めて、シク活用は 3 割程度に止まる。この様相を村田(2005)の調査結果と比較すると、岩崎本の平安時代に加点したものは中古の訓点資料の形容詞の比率にかなり類似していることが分かる。一方で、岩崎本の他の二期の訓点、前田本、図書寮本における古訓形容詞は上代語形容詞より中古散文に見る形容詞の性質に近似している。

語の階層構造では、三種の古写本における古訓形容詞はいずれも第一次形容詞の語数が多く、比率は七割以上を占めている。この結果を村田(2005)の調査結果と比較すると、三種の古写本における古訓形容詞は上代形容詞の性質に近似していることが分かる。また、語の新旧について、三種の古写本において、中古に造語された「新出の語」より上代からすでに存在する「既存の語」のほうが多用されていることも明らかになった。

上記の結果より、活用形の構成の比率に三種の古写本それぞれ異なる様相を呈するが、ク活用形容詞の比率が高い点に一致する。これについて、前節で述べたように、『日本書紀』の歴史書である性質にかかわると考えられる。また、『日本書紀』の古写本は加点時期の日本語資料であるため、語の階層構造、語の新旧の調査結果からみると、三種の古写本の古訓形容詞は上代語形容詞の性質に近似しているが、そのまま上代語形容詞だといえるかについてはさらに検証する必要がある。

3　意味的構造から見る日本書紀古訓の形容詞語彙

第 2 章では、量的側面から古写本系統に属する『日本書紀』三種の古写本における古訓の形容詞語彙について考察を行った。田島(1999)は総体としての語彙が持つ性格としては、基本的に数量的側面と意味的側面があるとしたうえで、語彙の性格を分析するには、数量的側面と意味的側面の両方を考慮しなければならないと主張する。よって、本章では、日本書紀古訓の形容詞語彙について、意味的側面から考察し、その性格を明らかにする。

また、調査資料としての神代巻古写本二種の古訓は十三、十四世紀に加点したため、時代の移り変わりに従い、日本書紀古訓の形容詞語彙にはどのような変遷が発生したかを調査する。

3.1　意味分野別構造

語彙全体について、その数量的側面と意味的側面の両方を考慮して研究を始めたのは阪倉(1960)である。阪倉(1960)は『万葉集』における名詞語彙を構成する個々の語にコードを付け、名詞語彙全体を 5 種類に分類し、『古今集』の語彙と比較し、両作品の違いを明らかにした。この阪倉(1960)によって始められた語彙の意味構造を分析する方法は、現在に至るまで継承され、田島(1992)が最初その分析方法を「意味構造分析法」としたが、その後「意味分野別構造分析」と改めた。「意味分野別構造分析」とは、語彙の構成要素である個々の語を意味分野別に分けて、語彙全体の構造を分析する方法である。具体的に言うと、語彙を形成する各単位語に『分類語彙表』によって意味コードを付け、語彙を意味分野別に分けてみる方法、つまり、意味分野別の構成がどのようになっているかを見る語彙分析法である[31]。

国立国語研究所によって刊行された『分類語彙表』は現代語の調査が基本になっており、本研究では日本書紀古訓の語彙を研究対象とするため、『日本古典対照分類語彙表』を利用する。

3.2　調査方法と利用資料

3.2.1　調査方法

『日本書紀』三十巻のうち、第三～三十巻は歴代天皇の歴史を記述する内容である一方、第一、二巻の神代巻は上代の神話を取り扱う内容である。他の巻と異

[31]田島(1999：78－83)

なる内容を扱った神代巻において、その古訓の形容詞語彙が意味的にどのような特徴があるかを調査する。具体的な調査内容は、まず神代巻の古写本から採取する古訓の形容詞語彙を整理し、一覧表にする。それから、『日本古典対照分類語彙表』を利用して、個々の古訓形容詞に意味コード付けをする。その次にコード別（意味分野別）によって語彙を整理する。最後に、『日本古典対照分類語彙表』に収録する文学作品における形容詞語彙の意味分野と比較し、神代巻における古訓形容詞語彙の意味構造がどのようになっているかを究明する。

『日本書紀』神代巻における古訓形容詞語彙の史的変遷を調査する際に、収集した古訓形容詞語彙について、現代に引き継がれているもの・現代に引き継がれながらも意味が変化したもの・消滅したものなどに分類して調査する。

3.2.2　調査資料

本章で依拠する『日本書紀』の古写本資料は以下の二種である。

１卜部兼方本(弘安本)：『国宝卜部兼方自筆日本書紀神代巻』
２卜部兼夏本(乾元本)：『新天理図書館善本叢書第 2-3 巻　日本書紀：乾元本』

意味分野と意味的特徴を調査する際に､『日本古典対照分類語彙表』を利用する。『日本古典対照分類語彙表』は、宮島達夫編『古典対照語い表』(1971) の改定増補版にあたる。古典でどの単語が何回使われているかを、作品間で対照できる表にまとめている。この語彙表は方丈記・大鏡・更級日記・紫式部日記・源氏物語・枕草子など 17 作品を対象とする｡旧版の平安作品と徒然草とのあいだの空白をうめることができた。そして、この語彙表にあるすべての単語に国立国語研究所編『分類語彙表』(増補改定版 2004) の分類番号を記した[32]。

また、日本書紀古訓の形容詞語彙の史的変遷について、以下の辞書を用いて調査する。

ⅰ時代別国語大辞典(上代編)：1967 年に刊行された時代別国語大辞典(上代編)は上代語の全貌を捉えた本格的な言語辞典であり、全 8,500 項目があり、本文に触れた用例は 20,000 である。

ⅱ時代別国語大辞典(室町時代編)：1985 年に刊行、2000 年に刊行を完結した。室町期から織豊期に及ぶ約二百年間の言葉を取り扱ったものである。

ⅲ日葡辞書：1603 年に本編が、補遺が 1604 年に刊行されたが、総語句数は

[32]『日本古典対照語彙表』による。

32,758 語句に及ぶ。『日葡辞書』は中世日本語の音韻体系、意味、用法を知ることができ、語学研究において貴重な資料である。

iv 言海：国語学者の大槻文彦が明治期に編纂した国語辞典である。1891 年に出版され、日本最初の近代的国語辞典とされる。

vi 現代形容詞用法辞典：1991 年に出版された現代日本語形容詞の専門辞典である。現代日本語の形容詞 1,010 語を収録し、個々の語の意味、用法、イメージ、ニュアンス、類義語との相違、関連語句について詳しく記述したものである。

具体的な調査方法は、まず『日本書紀』神代巻二種の古写本から集めた古訓形容詞について、上記の辞書の見出し語として採録されたかないかを調査する。これにより、消滅した語彙の全体を把握できる。日本書紀古訓の形容詞語彙を上記の辞書に収録される語彙と照合する際に「タフトシ（タットシ）」のような語形の変化したものは同じ語とする。次に、日本書紀古訓形容詞の意味変化を調査する。日本書紀古訓形容詞の意味について、原文において確認する。その語は現代語における意味、使用状況は現代の国語辞書、現代日本語用法辞典、「web データに基づく形容詞用例データベース」などによって確認する。

3.3　神代巻に見る日本書紀古訓の形容詞語彙

まず兼方本と兼夏本から採集した古訓形容詞の語数を集計して表 1 に示す。

表 1

写本	巻	異なり語数	延べ語数	平均使用度数
兼方本	神代上	46	278	4.63
	神代下	48		
	合計	60		
兼夏本	神代上	45	305	5.08
	神代下	50		
	合計	60		

語数からみると、兼方本と兼夏本における古訓形容詞の異なり語数は同じく、両方とも 60 語であり、述べ語数は兼夏本が兼方本より 30 語程度多く、305 語である。一語の平均使用は 4 回以上であり、使用回数 10 回以上の上位語は「アシ、アヤシ、ウルハシ、ケガラハシ、タケシ、ナシ、ヒサシ、ヨシ」の 8 語である。そのうち、「ヨシ、ウルハシ」の 2 語の使用は最も多い。『日本古典対照分類語彙表』に収録する作品における形容詞語彙の使用に比べ、神代巻の形容詞語彙の使用は少ないとはいえない。異なり語数は『方丈記』61 語、『土佐日記』62 語に

近似し、延べ語数は『竹取物語』283 語に近く、一語の平均使用度数は『更級日記』4.65 に近似する。

次に日本書紀古訓の形容詞語彙の語構成について調査する。日本語の語構成の観点からみると、語は大きく「単純語」と「合成語」に分けられる。さらに、「合成語」は「複合語」と「派生語」に分けられる[33] 。神代巻から収集した古訓形容詞語彙の語構成を見ると、全 60 語のうち、8 割以上(49 語)は単純形容詞、残りの 2 割程度(11 語)は合成形容詞である。そして、合成形容詞の 11 語には、重ねた語幹をとる形容詞 1 語が見られ、ここでは「重複形容詞」と呼ぶ。以下は合成形容詞の用例をあげる。

①重複形容詞　キラキラシ

「キラキラシ」のような形容詞語幹や擬声語を重ねた形をとる形容詞は、上代から存在し、室町時代においてさらに範囲を広げて用いられ、それ以降の時代にも使われる。「キラキラシ」の「キラ」は、状態的意義をもつ擬声語であるとされる[34]。

②複合形容詞

複合形容詞には、次のような形が見られる。

ア　動詞連用形＋形容詞　ミニクシ

イ　名詞＋形容詞　　カホヨシ

ウ　形容詞語幹＋形容詞　トホシロシ

エ　語基＋形容詞　イサギヨシ

③派生形容詞

集めた古訓形容詞の合成語(11 語)には接頭辞による派生形容詞は見られず、「ウタガハシ」のような接尾辞によるものが見られる。

日本語の形容詞は、上代から接頭辞と接尾辞による形容詞の派生が多く見られる。上代以降、特に室町時代においては、より多くの形容詞語彙が作られた。さらに、造語法の発展により、大量の合成形容詞が現れた。本章で収集した神代巻の古訓形容詞語彙だけでなく、岩崎本、図書寮本、前田本(人皇巻)から収集した古訓形容詞語彙の全体を見ると、単純形容詞の使用が多く、合成形容詞の使用が少ないという様相を呈する。

最後に収集した古訓形容詞はどのような漢字・漢語と対応するかを調査し、以下の表 2 に示した。

---

[33]于(2013：220)

[34]『日本国語大辞典(第二版)』による。

表 2

古訓形容詞	対応する漢字
アカシ	赤、艶然
アシ	非、強暴、悪、毒、邪、不順、横悪
アヂキナシ	無道、無状、
アツシ	厚
アヤシ	霊異、異、神、一、邪、奇、横悪、悪、異之、
アラシ	暴
イサギヨシ	清、明浄
イタシ	甚、懐
イツクシ	嚴
イヤシ	鄙
ウシ	憂
ウスシ	薄
ウタガハシ	疑
ウツクシ	美、愛、顯見
ウツシ	珍、顯見
ウトシ	疎
ウマシ	可美、于麻時、善、可怜、于麻師、
ウラメシ	恨
ウルハシ	友愛、明彩、彩、花艶、華艶、麗、恩親、友善、艶、光彩、愛、麗美、實
ウレシ	憙
オソシ	晩、來之晩
オホシ	多、彌復遠、溟、大
カシコシ	可畏、稜威
カタシ	崇、堅、難、制
キヨシ	明浄、赤、清、平
キラキラシ	端正
クラシ	闇
クロシ	黒
ケガシ	濁穢
ケガラハシ	濁悪、穢、濁穢、所汚、汗穢
サガナシ	悪、不詳
サハシ	多
シコメシ	凶目、之居梅枳、凶目杵

タカシ	高、崇、臺、建雄
タカナシ	悲
タケシ	悍、建雄、武建、武、壮
タノシ	楽
タフトシ	貴、多輔妬勾
チヒサシ	小、体小
ツヨシ	悪
トホシ	遠、可美
トホシロシ	大
ナシ	無、不幸、無隔絶、
ニコシ	柔
ニヒシ	新
ヌルシ	弱
ハゲシ	慷慨
ハヤシ	波夜、急峻、壮、早、疾、太急、急
ヒサシ	久
ヒトシ	無窮、拾然、恰然、聆然
ヒロシ	廣
フカシ	甚、深、幽深
マグハシ	妙美
ミニクシ	為醜
ムツマジ	恩親、親昵
ムナシ	亡
ユルシ	弱
ヨシ	無頼、不善、佳、當可、可、宜、将佳、能、善、壮、友善、可美、豫嗣、好、貴
ヨロシ	宜
ワカシ	壮、稚、少

3.4　意味分野別構造法による調査

次は収集した日本書紀古訓の形容詞語彙について、個々の語に意味コードを付け、意味分野別に整理する。「カカシ、ケガシ、サハシ、シコメシ、タカナシ、ニコシ、ニヒシ」の 7 語は『日本古典対照分類語彙表』に収録されてない。この 7 語について、『古語大辞典(小学館)』及び『日本書紀』の文脈によって確認し、

それと類義の意味がある語に基づいて意味分野を判定する。このように、調査した結果が表 3 である。

表 3

	意味コード	意味分野に属する語	比率[35]
1	35020(色)	アカシ、クロシ	3.33%
2	31332(良不良・適不適)	アシ、アヂキナシ、ウマシ、タケシ、ヨシ	8.33%
3	31911(長短・高低・深浅・厚薄・遠近)	アツシ、ウスシ、タカシ、トホシ、フカシ	8.33%
4	33068(詳細・正確・不思議)	アヤシ、ウタガハシ	3.33%
5	31400(力)	アラシ、ハゲシ、ユルシ	5.00%
6	33420(人柄)	イサギヨシ、キヨシ	3.33%
7	33001(感覚)	イタシ（痛）	1.67%
8	31920(程度)	イタシ（甚）	1.67%
9	333680(待遇・礼など)	イツクシ、ウトシ	3.33%
10	31345(美醜)	ウツクシ、ウルハシ、マグハシ ミニクシ、ハゲシ、シコメシ	10.0%
11	33410(身上)	イヤシ	1.67%
12	33014(苦悩・悲哀)	ウシ、タカナシ	3.33%
13	33000(心)	ウツシ	1.67%
14	33012(恐れ・怒り・悔しさ)	ウラメシ、カシコシ	3.33%
15	31913(速度)	オソシ	1.67%
16	33011(快・喜び)	ウレシ、タノシ	3.33%
17	31910(多少)	オホシ、サハシ	3.33%
18	31346(難易・安危)	カタシ、サカシ	3.33%
19	35010(光)	キラキラシ、クラシ	3.33%
20	33300(文化・歴史・風俗)	ケガラハシ	1.67%
21	33021(敬意・感謝・信頼など)	タフトシ	1.67%
22	31912(広狭・大小)	チヒサシ、トホシロシ、ヒロシ	5.00%
23	31200(存在)	ナシ、ムナシ	3.33%
24	33014(苦悩・悲哀)	ツラシ	1.67%
25	35170(熱)	ヌルシ	1.67%
26	31600(時間)	ヒサシ	1.67%

[35]各意味分野に属する語の異なり語数は語彙全体の異なり語数に占める比率である。

27	33500(交わり)	ムツマジ	1.67%
28	31331(特徴)	ヨロシ、ニコシ	3.33%
29	35701(生)	ワカシ	1.67%
30	31130(異同・類似)	ヒトシ	1.67%
31	31660(新旧・遅速)	ニヒシ	1.67%

上記の表に示したように神代巻から収集した日本書紀古訓形容詞の語数は 60 語で、意味分野は 30 以上にわたる。31345(美醜)、31332(良不良・適不適)、31911(長短・高低・深浅・厚薄・遠近)の項目では語彙の使用が他の分野より豊富である。

『日本書紀』神代巻に用いられた古訓形容詞の語数は『源氏物語』、『枕草子』のような形容詞語彙が盛んに使用された作品に比べ、決して多いといえない。しかしながら、女流文学である上記二点の作品とは異なる性質の『土佐日記』、『方丈記』に比べると、形容詞の語数、一語あたりの使用度数はあまりひらきが見られない。そして、ほかの作品に用いられず、『日本書紀』にのみ使用される語彙も見られる。それは、訓点資料の特有語彙と言えるのではないだろうか。

3.5 史的変遷

神代巻から収集した日本書紀古訓形容詞は各辞書における見出し語として収録される状況を次の表 4 に示す。

表 4

古訓	上代編	室町時代編	日葡辞書	言海	現代形容詞用法辞典
60	59	53	49	50	43

日本書紀古訓形容詞 60 語のうち、「カカシ:邪、タカナシ:悲」の 2 語を除き、残りの 58 語は全部『時代別国語大辞典上代編』に収録される。『日本書紀』において、普通漢字「邪」に「アヤシ」、「悲」に「カナシ」の訓が当てられ、上記 2 語はそれぞれ一つの用例しか見られず、この 2 語で附訓した根拠はさらに調査する必要がある。『時代別国語大辞典室町時代編』にはこの 2 語のほか、「ウツシ、シコメシ、ニコシ、ニヒシ、マグハシ」の 5 語が見出し語として収録されてない。『日葡辞書』にはさらに「カホヨシ、キラキラシ、サガナシ、トホシロシ」のような合成形容詞 4 語が収録されてない。それに対し、『言海』には「キラキラシ」という語が見られ、収録語数は 50 語になる。最後に『現代形容詞用法辞典』を用いて現代日本語の形容詞と照合し、日本書紀古訓形容詞の 3 割程度は現代語においてその姿が見えなくなった。これより、日本書紀古訓の形容詞は主に上代語で

あり、これらの語は中世になって一部は消滅し、一部が「ニヒシ - アタラシ、イツクシ - ウツクシ」のように室町時代以降類義語と混同して用いられ、次第にそれと類似する意味を持つ語が主流になった。近代以降、さらに一部の語彙が消え、7 割程度が現代語に残存している。次に、現代に引き継がれる 43 語を ⅰ 意味変化なし、ⅱ 意味変化ありに分類し、考察を行う。

ⅰ 意味変化なし

意味変化がない古訓形容詞にはものの状態、性質を表す属性形容詞が多いようである。次のような語が挙げられる。

厚 - アツシ、薄 - ウスシ、晩 - オソシ、多 - オホシ、闇 - クラシ、黒 - クロシ
小 - チヒサシ、遠 - トホシ、早・疾・急・太急 - ハヤシ、壮・稚・少 - ワカシ

厚 - アツシ

(1) 其造宮之制者、柱則高大、板則廣厚。「アツク」　（神代下）

例(1)の「厚」の古訓は形容詞「アツシ」の連用形であり、この文では板を厚くするという宮殿を建てる基準についていう語として用いられる。「物の一面から反対側の一面までの距離が長い」を意味し、現代語の形容詞「厚い」はこれと同じ意味を持つ。

(2) 乃使忌部首遠祖太玉命執取、而廣厚稱辭祈啓矣。「アツク」　（神代上）

例(2)の「厚」の古訓はは例(1)と同じく形容詞「アツシ」の連用形であり、ここでは「心情が濃く深い」を表し、現代語形容詞「厚い」には同じ意味がある。

『日本書紀』には形容詞「アツシ」は「厚、敦、篤」などの漢字に対応し、すなわち例(2)の意味が多用される。

ⅱ 意味変化あり

意味の変化がある語にはさらに古訓の意味が現代になって完全に消えてほかの意味に転じたもの、意味が付け加えられて拡大したもの、意味が縮小したものなどに分類できる。

無道、無状、無頼 - アヂキナシ

(3)汝甚無道、不可以君臨宇宙。「アヂキナシ」　（神代上）

(4)素戔嗚尊之為行也、甚無状。「アヂキナシ」　（神代上）
(5)汝所行甚無頼。「アヂキナシ」　（神代上）

例(3)－(5)の「無道、無情、無頼」の古訓は形容詞「アヂキナシ」で、「物の道理をわきまえない、乱暴で手がつけられない、乱れている」の意味を表す。この語はもともとの語形は「あづきなし」とされ、日本書紀の古訓を始め、平安時代以降は「アヂキナシ」となり、現代は「あじけない」に転じ、古訓と同じくマイナスのイメージの語である。しかし、現代になって古訓の意味は消えてしまった。現代語において例(6)、(7)[36]のように生活・雰囲気などに魅力がなく、失望をさそう様子を表す。

(6)都会のあじけない生活にはもうあきあきした。
(7)彼らは結婚生活をあじけなく感じ始めていた。

可美、可怜、－ウマシ
神代巻において、形容詞「ウマシ」は「可美、可怜」に当てられた古訓である。

（8）因此有化生之神、號可美葦牙彦舅尊。…可美、此云于麻時。　（神代上）
（9）卽自然有可怜小汀。可怜、此云于麻師。汀、此云波麻。　（神代上）

例(8)(9)では、日本書紀古訓「ウマシ」は人名、地名を修飾する。「人や物に対する満足、賛美する気持ち、すばらしい、うつくしい、よい、りっぱだ」の意味を持つ。

現代語形容詞「うまい」には次の例文のように①「味覚・感覚を満足させるようなよい味わいについていう。美味しい」②上手だ。技術が優れて巧みだ。③好都合で望ましい様子」などの意味がある。すなわち、時代の移り変わりとともに古訓形容詞「ウマシ」の意味が拡大したことが分かる。

（10）あの店のラーメンはうまかったなあ。
（11）彼女はピアノがうまかった。
（12）工程がうまくないから立て直そう。

[36]形容詞の現代語における意味及び用例は『現代形容詞用法辞典』による。

3.6　まとめ

本章では、『日本書紀』神代巻古写本の二種から収集した古訓形容詞について、意味的構造、史的変遷の様相を調査した。

結果について、意味分野からみると、神代巻の古訓形容詞語彙にかなり多くの意味分野の語が使用され、30 以上にわたる。

史的変遷について、日本書紀古訓語彙は『日本書紀』原文の漢字・漢語の解釈として附したものであるため、『日本書紀』の特有の意味用法が存する。したがって、収集した古訓形容詞がかなりの史的変遷と意味変化が発生した理由の一つはこのような性質を持っているのではないかと考えられる。もちろん、語彙の史的変遷及び意味変化は時代の移り変わりに従い、何らか時代の文化・社会の背景に潜む、人間のものの考え方が変化することにより言語に起こる変化の面もある。『日本書紀』に使用されている古訓形容詞はどのように現代語の意味用法に移行していったのかについての考察を今後の課題とする。

4　諸本の比較から見る日本書紀古訓の形容詞語彙

4.1　研究目的と方法

本章では、同文比較の方法を用いて日本書紀古訓形容詞語彙の実態を明らかにする。同文比較は訓点資料を研究する方法の一種であり、すなわち漢文の同一著書に対し、加点された異なる伝本の漢文同文箇所の訓読を比較する方法である。このような方法を通して、各伝本における訓読の異同を見つけ、訓読法の歴史的変遷を解明することが可能である。同一漢文の異なる訓点資料について、小林(1963)は、書陵部所蔵の時賢本『白氏文集』に関する調査をはじめ、これまで種々の資料の比較を試みてきた。春日(1985、1986)は、比較訓読とは漢文文献における同一紙面に、複数種以上の加点が存する訓点資料を比較し、その間の訓法の異同を抽出し、国語史的または訓読史的に検討を加える研究方法であると述べ、『金光明最勝王経』等の仏典を対象に調査を行った。『日本書紀』の訓点本に関しての同文比較研究は、石塚の研究が挙げられる。石塚(1978)は岩崎本の本文・訓点の翻刻を行ったのだけではなく、さらに岩崎本と図書寮本との詳細な比較研究も行っている。図書寮本『日本書紀』に関して、石塚(1980)は、図書寮本の本文・訓点の翻刻を行っい、石塚(1984)は図書寮本を岩崎本及び前田本と比較し、その本文及び訓点の相違を明らかにし、『日本書紀』の訓点資料としての総合的研究を提示した。

『日本書紀』の現存する諸本の中には、巻二十二と巻二十四を有するものは比較的多い。本章では巻二十二と巻二十四を有する古写本系統の岩崎本、図書寮本、卜部家系統の兼右本、近世版本の寛文九年版本の『日本書紀』四種の伝本を調査資料とし、それぞれの古写本と版本の巻二十二と巻二十四から古訓形容詞を抽出して整理する。そのうえで同じ漢文に対して各伝本における古訓形容詞の附訓状況・語数・使用語彙などの様相を調査する。四種の伝本における同一漢文と対応する訓読を比較して、その共通面と相違を明らかにする。

4.2　古写本系統『日本書紀』における古訓形容詞

4.2.1 調査資料

本節で用いた調査資料と利用するテキストは以下の通りである。

1　岩崎本 :京都国立博物館編 2013『京都国立博物館所蔵国宝　岩崎本日本書紀』勉誠出版

築島裕・石塚晴通 1978『東洋文庫蔵　岩崎本日本書紀本文と索引』貴重本刊行会

2　図書寮本：石塚晴通編 2005-2006『宮内庁書陵部影印集成 1-4・日本書紀』八木書店

石塚晴通 1980『日本書紀：図書寮本(本文編)』美季出版社

石塚晴通 1981『日本書紀：図書寮本(索引編)』美季出版社

4.2.2　岩崎本の古訓形容詞

岩崎本は現存する『日本書紀』の最古の訓点本であるため、従来注目を集めてきた。その訓点の点法、訓点の系統、岩崎本平安中期末点と院政期点との相違、岩崎本平安中期末点と図書寮本永治二年頃点との相違について、岩崎本室町時代点の性格の究明[37]などについて、築島・石塚(1978)の研究が挙げられる。また、『日本書紀』のほかの古写本や漢籍仏典との比較を通して、岩崎本の古訓の音韻・語法上の特徴についての検討、岩崎本にある再読字、助字類の訓読についての調査などには、林(1970)、(1971)、(1972)、(1973)の一連の研究が挙げられる。すなわち、今まで岩崎本『日本書紀』の訓点について数多くの研究成果が蓄積されてきた。しかし、岩崎本における古訓形容詞を取り上げた研究はほとんどなされてないようである。したがって、本節では岩崎本の平安中期末、院政期、室町時代という三種の加点に見える古訓形容詞語彙の全体を整理し、検討することとする。

岩崎本の訓点の特徴としては、同じ古写本系統の図書寮本に比べ、本文に加点する箇所が多いという様相を呈する。また、漢文箇所によって全附訓と部分附訓にかかわらず、各時期の附訓は確定した一訓のみが示される場合が多く、再出語への附訓が省略されるという状況が見られる。古訓形容詞を収集し、全附訓か部分附訓か、異なり語数と延べ語数数の統計、対応する漢文との関係などについて見ていく。

古訓形容詞の全附訓と部分附訓については、次の例を参照されたい。

(1) 遂雨五日**溥**潤天下。「アマネク」(巻二十四－69 Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点) [38]

(2) 其臨大事而不遂矣甚**悲**乎。「(カナ) シ」　(巻二十二－85 Ⓐ平安中期末点)

例(1)漢字「溥」に当てられた和訓は形容詞「アマネク」、補読がないため、全

[37]築島・石塚(1978：463－533)

[38]例文は、巻数を漢数字、行数をアラビア数字で示す。「巻二十二－120」とは岩崎本巻二十二の 120 行を示す。加点の時期は、ⒶⒷⒸでそれぞれ、平安中期末、院政期、室町期の加点を示す。

附訓と見なす。例(2)の漢字「悲」に当てられた和訓は「カナシ」という形容詞であるが、その語尾のみ示し、築島・石塚(1978)によって補読があると見なされているため、部分附訓と見なす。

次の表 1 では岩崎本各時期加点における古訓形容詞の異なり語数、用例数、全附訓と部分附訓の数を示している。

表 1　岩崎本の附訓状況

岩崎本	訓点	全附訓	部分附訓	異なり語数	述べ語数
巻二十二	Ⓐ平安中期末	24	19	34	43
	Ⓑ院政期	18	10	25	28
	Ⓒ室町時代	41	23	44	64
巻二十四	Ⓐ平安中期末	23	5	24	28
	Ⓑ院政期	24	4	24	28
	Ⓒ室町時代	8	9	17	17

表 1 に示したように、附訓の状況、異なり語数・延べ語数において各時期の加点は増減があることが知られる。岩崎本の古訓形容詞の附訓状況からみると、巻二十二のⒶ平安中期末点は延べ語数 43 の内、全附訓箇所は 24、Ⓑ院政期点は延べ語数 28 の内、全附訓箇所は 18、Ⓒ室町時代点は延べ語数 64 の内、全附訓箇所は 41、それぞれ古訓形容詞全体の 55.81%、64.29%、64.06%を占め、すなわち用例数の半分以上である。巻二十四のⒶ平安中期末点の全附訓箇所は古訓形容詞全体の 82.14%、Ⓑ院政期点は 85.71%、Ⓒ室町時代点は 47.06%を占める。巻二十四は巻二十二に比べ、Ⓐ平安中期末点とⒷ院政期点は古訓の形容詞の全附訓箇所が多く、古訓形容詞全体に占める比率も高いが、Ⓒ室町時代点の比率は低いことが知られる。古訓形容詞の附訓状況のみを見れば、岩崎本の巻二十二と巻二十四の附訓方法にはやや相違があると考えられる。

異なり語数から見れば、巻二十二はⒸ室町時代点の語数が最も多く、44 語である。それに対し、巻二十四はⒶ平安中期末点とⒷ院政期点の語数が多く、それぞれ 23 と 24 語である。語彙の実際の使用状況を見ると、巻二十二と二四の二巻、どの時期の加点においても 7 割以上の古訓形容詞は一度しか使われてない点に共通する。使用度数が多い語はアシ（悪、非、毒）、アマネシ(周、浹、溥)、イササケシ(少、小)、サカシ（賢、哲）、フカシ(深幽)、ヨシ（良、是、好）等が挙げられ、いずれも原文の漢文の意味において共通する面があり、同じ和訓が当てられたため、使用度数はほかの古訓形容詞よりやや多くなったと考えられる。

そして、形容詞の附訓状況を確認すると、巻二十二には同じ漢文箇所に対しても、Ⓐ平安中期末点で附訓があっても、Ⓑ院政期点では附訓がないため、Ⓑ院政期点の語数はⒶ平安中期末点のそれより少ない。しかし、Ⓑ院政期点で使用する語彙の 25 語はⒶ平安中期末点のものに含まれる。そして、巻二十四はⒶ平安中期末点とⒷ院政期点の語数、使用語彙は完全に一致する。これは、石塚(1978)がⒷ院政期点の仮名表記がⒶ平安中期末点を模しているためにⒷ院政期の加点当時としては異常に古い字体となっており、形態の近い他の字に誤読した箇所が相当量存するが、点図の相違にも関わらず訓の系統としては極めて近い同系統のものと見なし得る。Ⓑ院政期点の依拠したものはⒶ平安中期末点自身であると述べている[39]。古訓形容詞語彙からも、岩崎本Ⓐ平安中期末点とⒷ院政期点とは相当一致するところが多いことが裏付けられた。

一方で、Ⓒ室町時代点を見ると、使用語彙においてかなりの相違が認められる。確認すると、Ⓐ平安中期末とⒷ院政期に加点した漢文箇所に再度附訓する箇所が少なく、再度附訓があっても読み方が違う場合が多いのである。使用語彙において相違が見えるのはⒶ平安中期末点とⒷ院政期点に附訓がない漢文箇所に訓を付けるというⒸ室町時代点の附訓態度によるためと考えられる。三つの時期に加点するものの相違については後節に改めて詳しく検討する。

次に古訓の形容詞について岩崎本における三種の加点の共通する語とⒶ平安中期末、Ⓒ室町時代加点における独自の形容詞を示す。

巻二十二Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点Ⓒ室町時代点の共通語彙(16 語)

1 アシ(惡) 2 アシ(非) 3 アマネシ(周) 4 イササケシ(少、小) 5 オソシ(晏)
6 カタマシ(鈍)7 カヘカヘシ(反覆) 8 サカシ(賢)9 スミヤケシ(急)
10 チヒサシ(少)11 ムナシ(空) 12 ヨシ(是)13 ヨシ(好・良)14 ワカシ(少幼)
15 ワイワイシ(辨才)16 ヰヤナシ(不禮)

巻二十二Ⓐ平安中期末の独自語彙(4 語)

1 アラシ(暴) 2 イツクシ (憲) 3 サカナシ(不良) 4 ヒサシ(久)

巻二十二Ⓒ室町時代の独自語彙(26 語)

1 アカシ(赤) 2 アツシ(敦、厚) 3 アヤフシ(危) 4 イトマナシ(靡盬)
5 ウタカハシ(疑)6 オモシ(重)7 カシコシ(賢愚) 8 カタシ(難)9 クヤシ(悔)
10 サカシ(賢) 11 シケシ(繁)12 シロシ(白) 13 スクナシ(少)14 スズシ(冷)
15 タカシ(達、高)16 タフトシ(貴)17 タヤスシ(輙)18 トオシ(達)

[39]築島・石塚(1978：489、507－508)

19 トヲキヲソシ(急緩、遐邇)20 フカシ(深)21 ナシ(無)22 ニハシ(新)
23 マツシ(貧)24 ムツマシ(斷金) 25 メツラシ(珎)26 ワカシ(稚)
巻二十四Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点Ⓒ室町時代点の共通語彙(9 語)
1 アヤフシ（殆）2 アヤシ（記）3 イノチナカシ（壽）4 ウツムナシ（定、決）
5 ウルハシ（全）6 オモシロシ(伎）7 サカシ(賢、哲）8 チヒサシ(小)
9 ワツラハシ(煩労)

巻二十四Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点の独自語彙(12 語)
1 アシ(暴) 2 アマネシ(溥) 3 カウハシ(氣) 4 キヨシ(赤)5 クサシ(臭)6 タタシ(正)
7 トシ(疾)8 ナシ(不在)9 フカシ(幽) 10 ニヒシ(新) 11 ヰヤナシ(無禮)
12 ユルシ(順)

巻二十四Ⓒ室町時代の独自語彙(7 語)
1 アラシ(暴)2 ウタカハシ(決) 3 タカシ(高)4 チカシ(近) 5 ツハヒラケシ(曲)
6 ムツマシ(婚姻) 7 ワカシ(幼)

日本書紀古訓語彙の中、形容詞のみを調査対象としたため、他の和訓の附訓状況は不明であるが、古訓の形容詞については前述のように、岩崎本Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点の語彙と附訓態度は一致すると考えられる。一方で、Ⓒ室町時代の加点は基本的にはⒶ平安中期末点Ⓑ院政期点には附訓のない漢文箇所に訓を付するという附訓の態度の一端が窺える。さらに、使用語彙の面では、Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点のものは古い語が多いのに対し、Ⓒ室町時代加点には現代にも多用される形容詞が見られ、現代の語彙に近い一面がある。

現代に多用される形容詞：
アツシ(厚) 、オモシ(重) 、シロシ(白)など
現代の形容詞語彙に近い例：
Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点「少」イササケシ、「赤」キヨシ
Ⓒ室町時代「少」スクナシ、「赤」アカシ

上記の例を見ると、漢字「少」、「赤」の訓み方はⒶ平安中期末点Ⓑ院政期点の「イササケシ、キヨシ」のような古い語彙であるのに対し、Ⓒ室町時代点は「スクナシ、アカシ」のような新しい訓み方で訓を付したことが分かった。

4.2.3　図書寮本の古訓形容詞

石塚(1984)は用字・加点様式・音韻・語彙・文法などの面より図書寮本の訓点に対し詳しく検討し、その性格を明らかにした。語彙について、図書寮本は日本書紀古訓の特性の一つとされる和文のみに見える語彙を用いるが、助動詞・助詞などにおいては一般訓読語のほうが圧倒的に多く、その中に部分により和文語彙が交じっている状況を呈していると指摘している[40]。

図書寮本の訓点は、古語法志向や擬古語の生成、和文語彙と加点当時の漢文訓読語の混在、新旧の語彙・語法の混在など、鎌倉中後期創始の卜部家訓点と多くの共通する特色を持っている。そのことによって訓点資料としての均質性また年代性が複雑なものとなっている[41]。

ここでは、古訓の形容詞を絞って、その様相を考察する。まずは前節と同じように、附訓の状況、異なり語数と述べ語数から見ていく。表 2 には図書寮本の古訓形容詞の全附訓・部分附訓・異なり語数と延べ語数の数を示す。

表 2　図書寮本の附訓状況

図書寮本	全附訓	部分附訓	異なり語数	延べ語数
巻二十二	35	6	35	41
巻二十四	25	2	25	27

図書寮本における古訓の形容詞は巻二十二と二四の二巻ともに、基本的には全附訓という附訓の態度が窺がえる。次の例(3)－(5)の示すように部分附訓の省略方法には、形容詞の語尾あるいは語幹のみを示すものと、形容詞最初の仮名のみを示すものなどがある。そして、複数訓の併記は少なく、下記の例(6)を除き、確定した一訓のみが示される。

(3) 其臨大事而不遂矣甚**悲**乎「(カナ)シ」　(巻二十二 21 オ－6)
(4) 百濟是多**反覆**之國「カヘカヘ」　(巻二十二 41 オ－8)
(5) **篤**敬三寶「ア(ツク)」　(巻二十二 22 オ－8)
(6) 豈獨朕**不賢**耶大臣亦不忠「右：ヲサナカラ　左：ヲサナ」(巻二十二 45 ウ－1)

[40]石塚(1984：163－184)
[41]石塚(2006：435)

古訓形容詞の異なり語数と延べ語数に関しては、巻二十二は巻二十四に比して、少し上回っている。巻二十四より巻二十二の分量が少し多いことがその理由の一つのではないかと思われる。二巻に共通する語彙も少なくはないが、9 割ほど一度のみ使い、使用度数が低いことが知られる。2 回以上使用される語彙は巻二十二には 5 語、巻二十四には 3 語しかない。

巻二十二①アツシ：　**篤**敬三寶(アツク)
　　就禮神祇周祠山川(アツク)
②イササケシ：事無大**少**得人必治(イタサケク)
　　少事是輕不可必衆(イササケク)
③カタマシ：　亦**佞**媚者對上則好**說**下過(カタマシク)
　　奸者有官禍亂則繁(カタマシキ人)
④サカシ：　其**賢哲**任官頌音則(サカシキヒト)
　　五百之乃今遇**賢**(サカシヒト)
　　然我王聞日本天皇之**賢哲**…(サカシキ)
⑤オ(ヲ)ソシ：群卿百寮早朝**晏**(ヲソク)
　　退後擊之**不晩**也(オソカラ)

巻二十四①アシ：　總言不知且疑**毒**物(アシキ)
　　知得志欲歸之意與**毒**殺之(アシキモノ)
②ニヒシ：　淨掃別殿高鋪**新**蘆(褥)(ニヒシキ)
　　而使呼曰**新**富入來(ニヒシキ)
③タタシ：　爲人恵正有**匡**濟心(タタシ)
　　中臣鎌子連爲人恵**正**(タタシ)

上記の巻二十四の例①、②では古訓と対応するのは同じ漢字であるが、他の例では、同じ訓であっても対応する漢字は異なる。しかし、漢字の意味に共通する面があり、同じ和訓が充てられたのである。これは岩崎本の附訓状況と一致する。

重複語彙を除き、図書寮本の巻二十二と巻二十四における古訓の形容詞の異なり語数は 52 語であり、延べ語数は 68 語である。そして、古訓の形容詞の内訳をみると、「カナシ(悲)、カタシ(固) 、チカシ(近)」のような語を除き、他は「アマネシ、イササケシ、イサヲシ、カヘカヘシ、カタマシ」など、上代の形容詞がほとんどである。次に示すのは図書寮本巻二十二、巻二十四に共通する語彙及びそれぞれの独自語彙である。

二巻の共通語彙(6 語)

1 アシ(惡)2 オ(ヲ)ソシ(晩、晏) 3 サカシ(賢、哲) 4 トシ(利、疾)

5 ワカシ(少幼、幼) 6 ヰヤナシ(不礼、無禮)

巻二十二の独自語彙(29 語)

1 アツシ(篤、就) 2 アマネシ(周)3 アヤフシ(危)4 イササケシ(少)5 イサヲシ(忠)

6 イツクシ(憲)7 イトナシ(摩監) 8 カシコシ(畏)9 カタマシ(釵、俟)10 カナシ(悲)

11 カヘカヘシ(反覆)12 キラキラシ(端麗) 13 サカナシ(不良)14 スクナシ(鮮)

15 タハヤスシ(輒)16 チヒサシ(少)17 ツタナシ(不忠)18 トオクチカシ(遐邇)

19 トモシ(乏) 20 ナシ(無) 21 ニヒシ(新)22 ムツマシ(斷金)23 ムナシ(空)

24 メクシ(愛)25 ヤスシ(安)26 ヨシ(好)27 ワカシ(稚)28 ヲサナシ(不賢)

29 ヲサヲサシ(軏制)

巻二十四の独自語彙(19 語)

1 アシ(暴)2 アシ(毒)3 アラシ(暴)4 アヤシ(奇) 5 イノチナカシ(壽)6 ウツナシ(定)

7 ウツムマシ(決)8 ウルハシ(善)9 オモシロシ(伎) 10 カウハシ(氣)11 カタシ(固)

12 キヨシ(赤)13 クサシ(臭) 14 タタシ(正、匡)15 チカシ(近) 16 ツハヒラケシ(曲)

17 ナシ(不在)18 フカシ(幽))19 ニヒシ(新)

上記の用例のようにほとんどの場合で、二巻の共通する古訓形容詞と対応する原文の漢字が異なるが、漢字の意味は共通する面がある。そして、上記下線を引いた用例のように 2 回以上用いた和訓と対応する漢字も同じ状況であり、意味的には近い漢字である。したがって、図書寮本では同じ漢文の語彙が再出する箇所に対し基本的には再度附訓はしないという附訓の態度が知られる。

4.3 卜部家系統『日本書紀』における古訓形容詞

4.3.1 調査資料

石塚は卜部家系統に属する兼方本を中心とする論考において、卜部家系日本書紀古訓の特徴を指摘している。石塚(1983A)は「訓点資料としての日本書紀古訓は、鎌倉中期の卜部家系加点本より前と以降では、その性格を異にする。平安時代加点諸本の訓み方は概して師資相承に基づく均質的なものであるが、卜部家系加点

本の訓み方は年代的にも位相的にも異質なものを含んでいる」と述べている[42]。本論では、古訓の形容詞について卜部家系の訓点と古写本系統の岩崎本及び図書寮本の訓点との相違を考察する。

卜部家系統『日本書紀』の写本は、卜部兼方本(巻一・二)、卜部兼夏本(巻一・二)及び卜部兼右本(巻二～三十)などにより、全三十巻が揃っている。本論では、巻二十二と巻二十四を有する兼右本を調査資料とする。利用するテキストは次のようである。

兼右本：天理図書館善本叢書和書之部編修委員会編 1983『日本書紀：兼右本』八木書店

4.3.2 兼右本の古訓形容詞

古写本系統の岩崎本と図書寮本の附訓は漢字の左右両側にそれぞれ訓を付ける箇所はわずかである。それに対し、兼右本の形容詞で附訓するのは巻二十二 99 箇所、巻二十四 38 箇所ある中で、左右二訓があるのは巻二十二 24 箇所、巻二十四 11 箇所であり、二巻とも二訓併記の箇所はいずれも少なくはない。兼右本の巻三十の奥書に「尤可謂第一之証本矣」と記してあり、附訓の正確さの証拠かと思われる。以下では古写本系統の伝本と同じような調査を通して、兼右本の附訓状況、異なり語数、用例数、使用語彙などを見ていく。

表 3　兼右本の附訓状況

兼右本	全附訓	部分附訓	左右二訓	異なり語数	用例数
巻二十二	96	11	24	63	107
巻二十四	40	5	11	33	45

附訓の状況から見ると巻二十二、二四の二巻ともに 9 割以上の附訓箇所は省略がなく全附訓である。一方、部分附訓のものは前節で調査した岩崎本、図書寮本と同じ省略の方法が見られる。すなわち形容詞の語尾のみを付ける方法或いは最初の仮名を示す方法である。岩崎本、図書寮本と異なり、例(7)のように形容詞の最初の仮名と語尾を併記する方法も見られる。

(7)**大_小**魚臭如夏爛死「チ(ヒサ)キ」　　(巻二十四十オ－2)

[42]石塚（1983A：2）

漢字両側に二訓以上を併記した箇所について、その用例を収集し整理した結果は、下記五種の状況が見られ、その具体例を(8) - (12)のように示す。

①全附訓と部分附訓
②左右二訓の品詞が不一致
③両方とも形容詞、用いた語が異なるが、意味が共通する
④両方とも形容詞、用いた語は異なり、意味も不一致な面がある
⑤語法が異なり、形容詞語幹+名詞(古い語法)、形容詞連体形+名詞

(8)**乏_者**之訴似水投石　「右訓：トモシキモノ　左訓：（トモシキ）ヒト」
(巻二十二九オ－5)
(9)爲絶人－民之**鋒_劒**　「右：スクレタルツルキ　左：トキツルキ」
(巻二十二九ウ－1)
(10)其**賢－哲**任官頌音則　「右：サカシヒト　左：カシコキヒト」
(巻二十二九ウ－4)
(11)入鹿極甚愚癡專行**_暴_惡**「右：アライワサオコナフ　左：アシキワサス」
(巻二十四十三ウ－6)
(12)**陳_酒陳_菜**六畜於路側　「左：フルサケフルナ　左：フルキ」
(巻二十四十八オ－8)

例(8)は漢文と和訓の両方とも形容詞が名詞を修飾するという連体修飾用法であり、右訓は「トモシキモノ」の全附訓、左訓は修飾語としての形容詞を略している。さらに、漢字「者」につけた訓はそれぞれ「ヒト、モノ」であり、左右で異なる。「者」字を「ヒト」と読む例は、漢籍の訓点資料には多く見られるものである。門前(1959)は「者」字を「ヒト」と読むのは平安初期の古訓法であり、「モノ」と読むのはそれ以降の新しい訓法と述べている。これより、兼右本には平安時代の古訓法の残存と加点当時の訓法とが共存することが分かった。

例(9)の右訓「スクレタル」は動詞であり、左訓「トキ」は形容詞の連体形である。例(10)は左右二訓の両方とも形容詞であり、異なる語であるが意味上共通する部分がある例である。例(11)右訓の「アラシ」と左訓の「アシ」の二語は意味が不一致の例である。例(12)の左訓は上代の形容詞ではよく見られる形容詞語幹が体言を修飾するという古い用法であり、右訓は形容詞の連体形のみを記した。

以上のことから兼右本の特色を概観すると、二訓以上を併記した箇所があり、

再出語に対する附訓もあり、加えて附訓した箇所も古写本系統のものより多い、異なり語数は 60 以上を上回るといったことがわかる。語彙の内訳を見ると、古い語が多いが、現代でも多用される形容詞も少なくない。そして、一条殿之御本等により校訂を加えて作り上げた本であるためか、使用した語彙は岩崎本と相当の量で一致することが窺える。

4.4　近世刊本『日本書紀』における古訓形容詞

本節で以下の資料を調査する。

寛文九年版本：八尾甚太郎 1669『日本書紀(寛文九年版本)』北海道大学札幌農学校文庫

八尾甚太郎 1669『日本書紀(寛文九年版本)』石塚晴通が所蔵する複製本

寛文九年(1669)に刊行された寛文九年版本は全三十巻が揃っている。その中から採集した古訓形容詞を統計し、附訓状況・異なり語数・用例数などを、表 4 に示す。

表 4　寛文九年版本の附訓状況

寛文九年版本	全附訓	部分附訓	左右二訓	異なり語数	用例数
巻二十二	67	8	15	50	75
巻二十四	31	2	5	26	33

寛文九年版本における古訓形容詞の附訓状況について部分附訓のものはわずかであり、部分附訓の用例では兼右本と同一省略の方法を用いる。すなわち、形容詞の語尾のみ、最初の仮名を記した用例以外は、形容詞の部分的表記もある。兼右本には「コト」をすべて合字「ㇳ」で記すが、寛文九年版本には次の例のように、「コト」と「ㇳ」の両方を用い、表記上の不統一が見える。

(13) 遲朝不逮于急「右：スミヤカナルㇳ　左：トキコト」(巻二十二八ウ－3)

二訓以上を併記した箇所は兼右本と同じく全附訓と部分附訓したもの、語法が異なるものが見える。しかし、左右二訓の品詞が異なるものは 3 例しか見えず、両方とも古訓の形容詞であっても、異なる語を用いたものは見えない。語の使用

度数をみると、2 回以上使用する語が多い。これは兼右本の状況と一致する。語の内訳をみると、現代語でも多用される「タカシ(高)、チカシ(近)、ハヤシ(早)、ヤスシ(安)」の 4 語を除き、ほとんど古い語の使用と言える。

4.5　諸本の比較

『日本書紀』の諸本間の相違について詳しく比較をしたのは石塚晴通と杉浦克己の論考である。石塚(1978)は岩崎本の三種の訓点について、院政期点の依拠したものは平安中期末点であり、室町時代点は中世における『日本書紀』の訓読史上の変遷を考慮して見るべきものであると述べている。

石塚(1983)は兼右本の性格を知るために、岩崎本平安中期末点と図書寮本永治二年頃点とともに存してお互いに語彙の異なるもの、巻二十四の 171 例について兼右本で確認した。そのうえで兼右本の訓み方は、『日本書紀』の訓点の系統の面でも年代性の面でも、入り交じった複雑なものであると指摘する。

さらに石塚(1984)は岩崎本平安中期末点と大江家の訓点を伝える図書寮本永治二年(1142)頃点とを、両本がともに存する巻二十二と巻二十四について徹底比較し、その相違を示した。岩崎本平安中期点と図書寮本との訓点は、訓点資料としての年代的相違とともに訓の系統的相違を示していると指摘している。

一方、杉浦(1995)は『日本書紀』神代巻の二巻について諸本間に見える訓読の差異を比較し、その実態を提示した。杉浦(1991)、(1992)、(1997)は仮名の表記、助字・再読文字の扱い、語彙、敬語表現などいくつかの面から諸本を比較し、これまでの研究ではあまり触れてない『日本書紀』の訓点本について、それぞれの訓読の特色を明らかにした。

本論では、『日本書紀』の諸本に見える訓点の全体ではなく、下記①－⑤より古訓の形容詞を中心に調査し、諸本におけるその異同を検討する。そして、岩崎本には異なる時期の加点があるため、岩崎本における三種の加点の相違についての比較も触れておく。

①附訓の状況
②仮名と漢字の表記
③使用語彙および語の古さと新しさ
④訓の変遷
⑤合符

4.5.1　岩崎本における古訓形容詞の相異

まずは、岩崎本三期の訓点に見える古訓の形容詞について比較する。

① 附訓状況

岩崎本から収集した古訓形容詞の附訓状況について前節でも述べたが、岩崎本全体の加点は二訓以上併記した箇所はわずかであり、各時期の附訓は確定した一訓のみが付される場合が多い。巻二十二では三種の訓点はいずれも全附訓が多く、巻二十四ではⓒ室町時代の訓点のみが部分附訓の箇所が多くなっている。ⓒ室町時代の附訓はⒶ平安中期末点Ⓑ院政期点に比し、相当な相違が見られる。ⓒ室町時代の加点では基本的にはⒶ平安中期末点Ⓑ院政期点において附訓のない漢文箇所に訓を付するという態度の一端が窺える。一方Ⓐ平安中期末点の附訓をⒷ院政期点と比べると、巻二十二ではⒷ院政期点の附訓はⒶ平安中期末点の附訓より数が少なく、附訓の方法にも相違が見える。ところが巻二十四では、Ⓐ平安中期末点とⒷ院政期点の附訓箇所は完全に一致し、訓の表記はやや相違のあるものは 4 箇所あり、それ以外は完全に一致する。したがって、Ⓐ平安中期末点とⒷ院政期点において、巻二十二と巻二十四の附訓方法にはやや相違があることが知られる。

語数については、ⓒ室町時代に加点したものが多いが、語の使用度数は三期の訓点は一致し、いずれも一度しか使われない語がほとんどである。

② 仮名と漢字の表記

岩崎本には同一漢文に対する異なる時期の加点があるが、形容詞で読む箇所の漢字表記には相違が見られない。仮名表記では「トオシ、トヲシ」の区別のみ見られ、Ⓐ平安中期末点とⒷ院政期点は「オ」を用い、ⓒ室町時代点は「ヲ」を用いる。踊り字の使用にも相違があり、普通二字以上の仮名、あるいは漢字と仮名を繰り返す場合は「／＼[43] 」を用いるが、Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点は「ゝ」を用いる。例えば、次の例(14)の「辨才」はⒶ平安中期末点Ⓑ院政期点「ワイゝシコト」、ⓒ室町時代点「ワイくシキコト」、ⒶとⒷ点は一致し、ⓒ点はⒶⒷとは一致しない。例(15)では「反復」の訓においてⒷ点とⓒ点の踊り字は一致するが、Ⓐ点は違う表記を用いた。それぞれの和訓はⒶ点「カへゝシキ」Ⓑ点「カへ／＼シキ」ⓒ点「カへ／＼シ」である。

(14)有武略亦有**辨才**　　(巻二十二－475)

(15)百濟是多**反－覆**之國　　(巻二十二－405)

[43]「く」の踊り字、本論は横書のため、「／＼」とする

③ 使用語彙および語の古さと新しさ

Ⓐ平安中期末点から収集した古訓の形容詞はⒷ院政期点より異なり語数が多いが、異なる訓が見られない。「ハヤシ(早)」の一語を除き、他の語は現代語では使われないもの、対応する原文の漢字が慣用の漢字表記ではないかのどちらかである。Ⓒ室町時代点の訓は、Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点点に見えず、独自の語が32 語がある。そのうち「アカシ(赤)、 アツシ(厚)、オモシ(重)、カタシ(難)、クヤシ(悔)、シロシ(白)、スクナシ(少)、タカシ(達、高)、チカシ(近)、フカシ(深)」の 10 語が現代語ではよく使われるものである。

Ⓐ平安中期末点とⒷ院政期点の訓読はⒸ室町時代点の訓読より古い語が多い。例(16)の如く、「曲」字の和訓としてⒶ平安中期末点とⒷ院政期点の「(ツ)バビラ」が見える一方、Ⓒ室町時代点では「ツマビラケニ」が用いられている。

（16）中大兄聞而大悦曲従所議　　（巻二十四－227）

この語は平安時代においては「ツバビラケシ」であるが、「ツマビラケシ」に変化するのは鎌倉時代中期からとされている[44]。すなわちⒶ平安中期末点とⒷ院政期点の和訓は鎌倉時代以前の古形であり、Ⓒ室町時代点の和訓は鎌倉時代以降の新しい訓み方である。

築島(1963)は日本書紀古訓には上代語が相当に多く存していると指摘し、形容詞「メグシ」がその例として挙げられる。この語は『万葉集』には用例があるが、平安時代には日本書記古訓のみのように見られるとされる。さらに日本書紀古訓だけに存する特異な表現として、形容詞「ウツムナシ」、「ニヒシ」の 2 語を挙げる[45]。この 3 語を岩崎本で確認すると、「メグシ」「ウツムナシ」という訓がそれぞれ 1 箇所あり、「ニヒシ」は 4 箇所がある。このような例でも、Ⓒ室町時代点の訓はⒶ平安中期末点Ⓑ院政期点点とは一致しないことが分かった。

メグシ：(17) 如失**愛**_兒而鹽酢之味在口不嘗。　　（巻二十二－373）
「ⒶメクキⒷメクキⒸ(メク)ミノ」

ニヒシ：(18)爲唐客更造**新**_館於難波…　　（巻二十二－203）
「ⒶニヒシキⒷニヒシキ」

(19)ニヒシ:迎客等于江口安置**新**館　「Ⓒニハシキ」　（巻二十二－206）

ウツムナシ：(20) 吾起兵伐入鹿者其勝**定**之　　（巻二十四－189）
「ⒶウツムナシⒷウツムナシⒸウツムナ/タシ」

[44]西崎(1999：340)
[45]築島(1963：164、178－179)

例(17)はⒸ室町時代点とⒶ平安中期末点Ⓑ院政期点の訓と品詞が異なる。「ニヒシ」で読む例は(18)(19)の 2 箇所があり、例(18)では、Ⓒ室町時代点の訓は見えない。一方、例(19)ではⒸ室町時代点のみであり、訓は例（18）とは不一致である。例(20)の「ウツムナシ」はⒸ室町時代点には「ウツムナシ、ウツムタシ」といった二つの訓が見える。

④ 訓の変遷

岩崎本において同一漢文に三つの時期に附訓がある箇所は巻二十二には 12 箇所があり、巻二十四には 15 箇所がある。この 27 箇所に付した異なる時期の訓を比較すると、訓が変化したものは、巻二十二には 9 箇所、巻二十四には 10 箇所がある。7 割以上は変遷したのである。訓が変遷のあるものには語法が異なるもの、品詞が変わるもの、異なる形容詞を用いたものなどが見られる。次にその例を示す。

(20)**奸**_者有官禍亂則繁「ⒶカタマキⒷカタマシⒸ(カタマ)キヒト」
（巻二十二－125）
(21)是**非**之理詎能可定「ⒶアシキⒷアシキⒸアシサノ」　（巻二十二－135）
(22)我雖異國心在**斷－金**…「ⒶウルハシキⒷウルハシキⒸムツマシキ」
（巻二十二－383）

例(20)はⒶ平安中期末点の訓は形容詞の連体形であり、Ⓒ室町時代点の訓も連体形かつ部分附訓である。Ⓑ院政期点の訓は語幹が名詞を修飾する古い語法である。例(21)は品詞が変わった例の一つであり、Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点の訓は形容詞の連体形であるが、Ⓒ室町時代点の訓は名詞になっている。例(22)はⒶ平安中期末点Ⓑ院政期点の訓は一致しているが、Ⓒ室町時代点の訓は異なる形容詞を用いた。ただし、この 2 語の意味はほぼ同じと認められる。

⑤合符

合符というのは、漢文訓読における符号の一種であって、漢字二字又は三字以上連結が一纏まりであることを示す働きを持っているものである。二字の纏まりの場合には熟語であることが多い[46]。

石塚(1985)は岩崎本の平安中期末点の合符のある全用例を整理し、二つの形が見えると指摘している。すなわち、一つは「断－金　ウルハシキ)」（岩崎本巻二

[46]小林（1979：62）

十二－383）のように、漢字二字間の中央の線を和語一語または一まとまりにして訓読することであり、もう一つは、「釵__者　カタマキヒト」（岩崎本巻二十二－125）のように、漢字二字間の左側の線を和語二語または一字ずつ訓読することである。

本論では岩崎本の院政期と室町時代に加点した合符を含め、形容詞の訓で合符のある用例を整理しておく。

巻二十二Ⓐ平安中期末点（Ⓑ院政期点の用例が 3 例）の合符（9）

賢－哲「サカシヒト」　不－良「サカナシ」　少－幼「ワカイⒶⒷ」
斷－金「ウルハシキ、ムツマシキ」　靡－盬「イトナシ」　反－覆「カヘカヘシ」
賢－哲「サカシⒶⒷ」　深－氣「フカキ」　不－賢「ヲサナキⒶⒷ」

巻二十二Ⓒ室町時代点の合符（Ⓐ平安中期末点の用例が 2 例、
Ⓑ院政期点院の用例が 1 例）（21）

憲_法「イツクシキノリ」　乏_者「トモシキヒト（モノ）　良_典「ヨキノリ」
利_器「トキ（ウツハ）　俟_媚「ⒶカタミコフⒸカタマシク」
釵_者「カタマキヒト」　大_少「イササケキ」　急_緩「トキヲソキ」
我_非「ⒶⒷアシムⒸアシ」　彼_非「アシンス、アシ」　賢_愚「カシコク」
少_事「イササケキ」　新_館「ニヒシキ」　遐_邇「トホクチカキ」
久_憶「ヒサシキ」　季－秋－薄－冷「ヤウヤウスズシ」　愛_兒「メグキ」
小_幡「チヒサキハタ」　珎－國「メツラシキ」　小_國「チヒサキ」
惡－逆「アシキワサ」

巻二十四Ⓐ平安中期末点（Ⓑ院政期点の用例が六つ）の合符（9）

作－惡「アシキワサ」　行－無－禮「キヤナキワサⒶⒷ」　煩－勞「ワツラハⒶⒷ」
伎－樂「オモシロキヲト」行－暴－惡「アシキワサスⒶⒷ」　忠－正「タダシク」
長－幼「ヲイタルワカキ」　婚－姻「ムツマシキⒶⒷ」　不－在「ナシⒶⒷ」

巻二十四Ⓒ室町時代点の合符（8）

高_名「タカキナ」　大_小「チヒサキ」　高_逸「タカク」
哲－主「サカシキキミ」　氣_味「カウハシキ」　陳_酒陳_菜「フルサケフルナ」
奇_術「アヤシキ」　性_順「ヒトトナリユルシク」

以上のように、漢文箇所に合符を付けたうえで、形容詞を含む訓をつけた語は、Ⓐ平安中期末Ⓑ院政期には 18 語があり、Ⓒ室町時代には 29 語ある。延べ語数ではⒸ室町時代の用例が最も多く、Ⓑ院政期の用例は最も少ない。さらに、Ⓐ平安中期末とⒷ院政期のすべての和訓は漢字二字間の中央につけた合符の用例であるが、Ⓒ室町時代の和訓は漢字二字間の中央につけた合符と漢字二字間の横側につけた合符の用例の両方が見える。

Ⓐ平安中期末とⒷ院政期の用例では漢字二字間の中央に合符が付けられ、深ー氣「フカキ」、伎ー樂「オモシロキヲト」、行ー無ー禮「ヰヤナキワサⒶⒷ」、作ー惡「アシキワサ」の如く、和語二語で読む用例が見られる。このような用例を見ると、漢文では「作ー惡」の語構成は「動詞＋名詞」であるが、この語を除き他の用例はすべて「形容詞＋名詞」の語構成である。訓を見ると、すべての用例は「形容詞連体形＋名詞」の構造である。それに対し、和語一語で読む用例は、語構成は異なり「形容詞＋名詞」ではない。同じ漢字二字間の中央につけた合符であるが、読み方が一致しない理由は漢文の語構成が異なるためではないかと思われる。

Ⓒ室町時代の用例の少_事「イササケキ」、新_館「ニヒシキ」の場合はⒶ平安中期末とⒷ院政期の訓が見えず、合符と訓がⒸ室町時代に付けられたのである。それは和語二語で読むため、漢字二字間の横側に合符を付けたと考えられる。そして、大_少「イササケキ」、急_緩「トキヲソキ」、我_非「ⒶⒷアシムⒸアシ」、陳_酒陳_菜「フルサケフルナ」などの例の如く、漢字二字間の横側に付けた合符の場合も、和語一語で読む用例も見える。それと対応する漢文の語構成は和語二語で読む用例と異なり、「形容詞＋名詞」の構成ではなく、「形容詞＋形容詞」か「代名詞＋形容詞」などである。上記の用例を見ると、合符の付く位置及び和訓の読み方(和語一語で読むか、和語二語で読むか)は漢文の語構成と緊密な関係があるのではないかと考えられる。

4.5.2　諸本における古訓形容詞の相違

この節では、今回調査した巻二十二と巻二十四がともに存する『日本書紀』四種の伝本における古訓の形容詞の相違を見てみる。

① 附訓の状況と使用語彙

各写本の附訓状況について前節では詳しく考察したため、ここでは纏めると、岩崎本の各時期の附訓方法には相違があり、特にⒸ室町時代の附訓は前の時代に

比してかなり異なる箇所が見える。しかしながら、各時期の附訓はいずれも二訓以上を併記した箇所は少なく、確定した一訓のみを記したものが基本である。

次に図書寮本の部分附訓の箇所はわずかであり、二訓以上を併記した箇所は一例しか見えず、他の写本より岩崎本巻二十四のⒶ平安中期末点Ⓑ院政期の附訓状況に近似している。

兼右本の附訓箇所は四種の伝本の中でももっと多い。部分附訓は少なく、左右二訓のある箇所が多く、前の時代の古写本の読み方と加点当時の読み方の入り交じったものがあるといった付訓の特徴は、寛文九年版本にも見られ、両者は附訓の状況では近似している。

使用語彙については、兼右本の附訓箇所は他の諸本より多く、再出語への附訓もするため、語数は比較的多い。

語数に関して、前節でも統計したが、ここでは纏めて表 5 に示す。表 5 は岩崎本、図書寮本、兼右本、寛文九年版本から収集した古訓形容詞について計数した結果である。

表 5

巻	語数	岩崎本			図書寮本	兼右本	寛文九年本
		Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ			
二十二	異なり語数	34	25	44	35	63	50
	用例数	43	28	64	41	107	75
二十四	異なり語数	24	14	17	25	33	26
	用例数	28	28	17	27	45	33

② 仮名と漢字の表記

兼右本と寛文九年版本には合字「ㄱ（こと)」の使用が見られる。古写本系統の岩崎本と図書寮本には見えない。そして四種の訓点本に共通して、同一漢文箇所に対し、附訓のあるのは巻二十二には 45 箇所があり、巻二十四には 26 箇所がある。このような箇所に対する諸本ごとの訓を比較し、仮名・漢字の表記がそれぞれ一致するかを見ておく。

あ　仮名表記が不一致の例：

(23) 群卿百寮、**早**朝**晏**退。

例(23)は十七条憲法の内容であり、「晏」に充てられた訓は四種の諸本で一致するが、仮名遣いは異なり、岩崎本と兼右本の和訓は「オソク」であり、図書寮本

と寛文九年版本の訓は「ヲソク」である。そして兼右本のみ「晏退」の間に合符が付いている。

そして、上記の例で「早」に対し、岩崎本と兼右本には訓として「ハヤク」が見え、一方、寛文九年版本には「トク」の訓が見られる。

(24)愛育之情、無隔遐邇。

例(24)の「遐邇」の訓は岩崎本Ⓒ室町時代点と兼右本には「トヲクチカキ」、それに対し、図書寮本と寛文九年版本には「トホクチカキ」である。

い　漢字表記が不一致の例：

(25)敦禮神祇、周祠山川、幽通乾坤。

例(25)の「敦禮」の「敦」字の古訓は形容詞の連用形「アツク」である。漢字表記について確認すると、図書寮本を除き、他の三種の伝本には「敦」字である。図書寮本には「就」字を用い、「就」字の左側に「見せ消ち」の符号が見え、右側に「孰」字とあるため、漢字の誤用だと分かる。そして、漢字「禮」について、兼右本では「礼」を用いるが、「禮」と「礼」は通用するため誤写ではない。

また、次の例（26）のような諸本によって左右の附訓が逆になるものが見られる。

(26)大臣亦於今日明日、立俟其誅**決**矣。

例(26)の「決」に岩崎本のⒶ平安中期末点には「ウツムナシ」、Ⓑ院政期点には「ウツムマシ」の訓が見え、Ⓒ室町時代点は「ウタカハシ」である。兼右本と寛文九年版本には、左訓と右訓両方あり、兼右本左訓「ウツムマシ」、右訓「ウタカハシ」、寛文九年版本はそれとは反対であり、左訓「ウタカハシ」、右訓「ウツムマシ」である。

上記の例を除き、ほかの状況も見られるが、本論では一一列挙しないことにした。

③語の古さと新しさ

具体的に使用語彙を見ると、四種の諸本はいずれも上代形容詞、すなわち古い語の使用が多いが、岩崎本のⒸ室町時代点、兼右本、寛文九年版本では新しい読み方が見られる。したがって、四種の諸本ではいずれも古い語と新しい語の併存が見られる。

③ 読み方の変遷

四種の伝本に見える古訓の形容詞には変化したものも少なくない。次はその例をいくつか挙げてみる。

(27)其諂詐者則爲覆國家之利器、爲絶人民之**鋒釼**。

「利器」の「利」は四種の伝本には同じ訓が見え、「トキ」である。「利」字は『説文解字』に「《刀部》利：銛也。从刀。和然後利，从和省。《易》曰：「利者，義之和也。」とあり、「銛」は「するどい」の意味である。なお、字義の説明は白川静 1996『字通』によったが、他の漢和辞書の説明もほぼ同様である。

利：刀を以て禾穀を刈るので鋭利の意があり、収穫を得るので利得の意がある。

岩崎本のⒶ平安中期点には同じ形容詞で訓で「鋒釼」という用例が見られる。

鋒：木の秀（ほ）つ枝に神霊の降下する意であり、その鋒杉の穂の形を、兵器に及ぼして鋒という。

「利」と「鋒」の二字の意味が近似しているため、どちらも「トキ」と訓読されたわけである。しかし、岩崎本室町時代点、図書寮本、兼右本の右訓、寛文九年版本の訓では動詞「スクレタル」を用いるようになった。

(28)于時、五色幡蓋、種々**伎楽**、照灼於空、臨垂於寺。

例(28)の「伎樂」、岩崎本には「伎－樂」のように漢字の間の中央に合符があり、岩崎本の訓はⒶ平安中期末点「オモシロキオト」と訓んで、Ⓑ院政期点には仮名遣いが異なり「オモシロキヲト」であり、Ⓒ室町時代点では「（オモシロキ）コエ」という読み方になったのである。兼右本では合符が二字の左側にあり、訓は「オモシロキコエ」である。寛文九年版本では合符なく、訓は兼右本と一致する。図書寮本の訓には合符がない。

④ 合符

古訓の形容詞の合符について、岩崎本の場合前節で述べたが、漢語の語構成と関係があるのではないかと推測する。図書寮本で合符の付いた例は 6 箇所しか見えず、漢字二字間の中央と二字間の横側の両方があるが、合符の位置に基づき和語一語で訓む、あるいは和語二語で訓むと区別はしない。兼右本と寛文九年版本は同じ状況であり、合符による訓み方いった区別はない。ただし、兼右本には合符の付いた箇所は少なくはない。次の例は諸本における同一漢文箇所に付けた合

符の異なる用例の一つである。

(29)爲唐客更造新館於難波高麗館之上。

「新館」の「新」は形容詞「ニヒシキ」で読んで、「形容詞＋名詞」の構造である。岩崎本と図書寮本の訓は合符なし、兼右本と寛文九年版本の訓の左側に合符が見える。

4.6　まとめ

本章では巻二十二、巻二十四を共有する『日本書紀』の訓点本四種を調査資料とし、それぞれの巻二十二、巻二十四から収集した古訓形容詞について考察した。検討した結果は、およそ次のような三点にまとめることができる。

①四種の伝本において形容詞で読む漢文箇所、古訓の形容詞の附訓状況、仮名の表記、符号の使用には相当な相違が見られる。岩崎本のⒶ平安中期末点とⒷ院政期点とはかなり一致することはすでに先行研究により指摘されているが、古訓形容詞だけを見ると、附訓の態度ではやや相違が見られる。Ⓒ室町時代点の訓はそれ以前の訓に比して、訓み方が変化したものが多い。四種の諸本を比較すると、兼右本と寛文九年版の訓はほぼ同じであり、以前の写本の訓と加点当時の新しい訓が交じっている。

②使用語彙の語数は図書寮本、寛文九年版本、岩崎本、兼右本の順で多くなっている。四種の諸本はいずれも上代形容詞、すなわち古い語の使用が多いが、岩崎本のⒸ室町時代点、兼右本、寛文九年版本では新しい読み方が見られる。したがって日本書紀の古訓形容詞はすべて上代形容詞と見なすことはできないと考えられる。上代形容詞の残存は見られるが、それ以降の時代の新要素も含んでいる。このように特殊性を有する日本書紀古訓の形容詞を、一時代の代表的なものと見なすことはできないと思われる。

③今回収集した合符のある箇所、すなわち二字漢語或いは稀ではあるが二字以上漢語の訓み方について和語一語で訓むか、和語二語(一語ずつ)で訓むかについては、それと対応する漢語の語構成と緊密な関係があるではないかと推測する。そして、音読みの用例は一例も見えず、これは先行研究でも指摘されたように、日本書紀古訓の加点者がなるべく古い時代の大和言葉で訓もうとしたことの証明である。そして、この点は『日本書紀』が日本の正史であるという意識に裏打ちされた結果かもしれない。

また、今回調査した内容以外にも問題とすべき所は多く、次の三点が挙げられ、今後の課題とする。

①日本書紀古訓の形容詞の語法についての調査、例としては、形容詞及び形容詞型活用の助動詞の未然形相当の古形「ケ」が、助動詞「む」につづいた「ケム」が、後世訓読語に伝えられたことは指摘されるところであるが、このような現象について検討する必要がある。

②古訓の形容詞と漢文の関連性についての考察、つまり訓を漢文の原文と対照しその訓は一対一的な対応して固定される直訳か、意味的の融通のある意訳か、その訓法を考察する。日本語とは系統が異なる漢語・漢文をどのように受け入れたのか、それに充てられた日本語の訓はどのように適合させたのかを分析検討する。

③日本書紀古訓の形容詞と漢籍訓点資料に見える形容詞、仮名文学の形容詞との比較し、日本書紀古訓の形容詞の性格を明らかにする。

5　漢字・漢語との対応から見る日本書紀古訓の形容詞語彙

『日本書紀』は上代の重要な文献資料として、従来さまざまな方面から関心が持たれ、その本文および訓点に関して多くの先学の研究が積み重ねられてきた。例えば『日本書紀』の原文について、その編纂の過程、内容をめぐる区分論、語句の出典・潤色、語彙、語法の倭習[47]などの研究がある。訓点については、その加点の時期・系統・年代性・特異性・異本間の比較などの研究があげられる。『日本書紀』の原文及び訓点本における語彙について、付属詞(中国語の「虚詞」)に関する研究は多く見られるが、自立詞(中国語の「実詞」)、特に形容詞に関する研究はほとんどなされていないようである。本章では『日本書紀』最古の訓点本である「岩崎本」を主要な調査資料とし、原文における形容詞およびその古訓における形容詞を取り上げ、次の二点をめぐって考察を行う。

原文について、まず原文(漢文)における形容詞の判定基準を明確にし、『日本書紀』の原文から形容詞語彙を取り出す。収集した原文の形容詞語彙について、附訓の状況を統計する。附訓のある箇所についてその訓は形容詞であるかどうかを調べる。また、原文の形容詞は古代の中国語と比べて意味用法が異なる点があるかどうかを確認し、意味的派生と意味的転換などの現象について調査する。

訓点について、まず岩崎本から収集した日本書紀古訓の形容詞を漢字一字と対応するものと、漢字二字と対応するもの、二種に分類する。そのうえで形容詞で附訓する漢文箇所が原文においても形容詞と認められるかどうかを確認し、古訓の形容詞と原文の漢字及び語彙の意味とはどうかかわるかを検討する。すなわち原文の形容詞はどのように日本語として受容されたのかを検証するために、語法構造・意味の対応関係から漢字・漢語と古訓形容詞の結びつきを分析する。

さらに漢字二字と対応する古訓形容詞について、合符のある用例を中心に検討する。集めた合符のある用例は加点の時期及び合符の付いている位置によって分類する。合符は漢語に基づいて加点されたものではなく、和語の単語意識に基づいて加点し分類されているものと考えられるため、合符の位置によって古訓が和語一語であるか二語であるかを判断できる一方、漢字については熟語であるかないか不明であるため、辞書にある記述や漢籍にその用例があるかによって確認する。

さらに、熟語と認められるものについて、訓詁学[48]の方法を用いて、漢語と古

[47]日本語の発想に基づく漢字・漢文の誤用や奇用（特殊な用法）を「倭習（和習・和臭)」と言う。森(2011：20)の定義による。
[48]訓詁とは漢字・漢語の意義を探究する学問である。訓詁学は古典の言葉を読むための科学であり、古典の思想や内容を理解するために、その語義を正確に理解する方法を研究するものである。洪(2003:2)の定義による。

訓の意味を確認したうえで、その対応関係を検討する。

5.1　『日本書紀』の原文における形容詞

5.1.1　原文における形容詞の判定について

形容詞について検討するには、その判定基準を明確しなければならない。中国語は日本語のような語彙の形態的特徴や語形変化はないため、品詞の判断は難しい。中国語の品詞分類標準に関して、意味・形態・構文、または意味と構文を総合的に考えるなどいくつかの観点が挙げられる。中国文法学の定礎の著作である『馬氏文通』には意味によって語彙を分類しうると主張し、形容詞を「象静字」と言い、「象静字」は「静字の一つで、物事の形態を描写するものである」と言う。そして、近代以降欧米の文法理論の影響によって、陸・**俞**(1954)は中国語の語彙にも形態的特徴が多く存在し、中国語の品詞分類は語彙の形態的特徴を標準とすると主張している。しかし、中国語は英語などの言語のような明確な形態的特徴がなく普遍性もないため、形態的標準によって品詞を判断するのは認可されてない。朱(1982)は中国語は欧米の言語のような豊富な形態的特徴を持ってないため、中国語の品詞判定は語彙の意味及び構文的機能によって判定するとする。王(1985)は中国語の品詞について判定する際に、語義・形態と文法機能を総合的に考えて判断するべきと主張する。**吕**(1990)は語彙の意味と機能の二つの角度から品詞を判断すると主張する。

以上のように中国語の品詞分類に関する理論を見てきたが、古代中国語の形容詞はどのような文法的機能があるのか、それについての確認も必要である。次は古代語形容詞の文法的機能について見ていく。

聂他(1997)は形容詞とは人や物の状態、性質を表す語彙であり、古代語において形容詞の文法的機能は現代語とはほぼ一致すると述べている[49]。形容詞は連体修飾語・連用修飾語・述語・補語として用いられている。ただし、現代語の形容詞と異なり、古代語の形容詞は文中において主語と目的語(名詞化)として用いられ、目的語をとる(動詞化)場合も見られ、いわゆる形容詞の活用であると言える。このほかに、形容詞の使役化と意動用法も古文にはよく見られる。形容詞の使役化について、太田(1958)は「古代中国語において、語彙体系がまだ豊富ではなかったため、現代中国語と異なり単音節述語が多く、言葉の形態を変えることなく使役化がしばしば起こった」と述べている[50]。形容詞の動詞化も同じ理由によっ

[49]**聂**・簡・張(1997：34－44)
[50]太田(2013：204－209)

て起こったと考えられる。次のように使役化と意動用法の具体例を示す。

(1)王請**大**之。　『孟子・梁恵王下』　（使役化）
　現代語訳：王よどうか**これを大きくして**ください
(2)吾妻之**美**我者、私我也。　『戦国策・斉策』　（意動用法）
　現代語訳：妻が私を**美しいと思う**のは私をひいきにするから

例(1)の「大」はこの文では「大きくする」という意味として使われ、形容詞の使役化である。例(2)の形容詞「美」は「美しいと思う」の意味として使われ、形容詞の意動用法である。

李(2004)は古代語の形容詞に以下のような特徴を持っているとする。これは、形容詞の認定基準として有効であると指摘している[51]。

①使役化及び動詞化
②「於」を用いる比較文に使う
③程度副詞と共起する
④よく連体修飾語として名詞を修飾する

本研究では、以上の先行研究を参考にし、『日本書紀』原文の文脈に基づいて語義・語彙間の関係・文中における文法的機能という三つの方面から考えて、岩崎本巻二十二と巻二十四の原文において判断し、形容詞を収集する。

5.1.2　原文に見える形容詞

前節で述べた基準を基にして原文から収集した形容詞を単音節と二音節に分類し、次のようにしめす。

(一)、単音節の形容詞
巻二十二(54 語)
異、白、惶、急、悲、恭、和、睦、貴、多、少、篤、鮮、惡、直、順、齊、明、乏、貧、良、利、鋒、大、小、賢、妍、繁、緩、寛、危、早、晏、難、善、愚、優、獨、輕、重、深、遠、久、安、凡、眞、赤、珎、晩、老、幼、稚、太、厚

[51]李(2004：136－137)

巻二十四(39 語)

大、小、獨、高、善、惡、良、黑、白、藍、赤、緑、暖、專、多、青、周、悉、寒、厚、速、臭、殆、深、難、淨、新、幽、奇、怪、晩、壽、長、富、清、枯、近、空、順

(二)、二音節の形容詞

巻二十二(12 語)

佞媚、永久、和諧、安樂、融和、薄冷、長老、少幼、反覆、愕然、惡逆、愚癡

巻二十四 (8 語)

入微、欠少、愚癡、暴惡、高逸、忠正、匡濟、長幼

太田(1958)は中国語の古代語において「翩翩(ヒラヒラと飛ぶさま)」という語のような形容詞の重複形式が非常に発達しているとする。だが、『日本書紀』岩崎本巻二十二、巻二十四で収集した形容詞語彙は単音節及び二音節の形容詞語彙しか見られない。それは、『日本書紀』が歴史書である性質とは関係があると考えられる。歴史を記述書籍であるため、文学作品に用いられる語彙と異なる様相があるのは当然である。

附訓の状況について確認すると、巻二十二には形容詞語彙は 133 語あり、訓が付いているのは 99 語であり、そのうち古訓の形容詞と判断できるのは 68 語である。巻二十四には形容詞語彙は 73 語あり、訓が付いているのは 30 語であり、そのうち古訓の形容詞と判断できるのは 21 語である。原文の文意に沿って訓を付けるのは基本的な原則だと思うが、以上の統計した結果を次の表 1 にまとめると、原文と附訓の品詞上の一致度は 7 割程度である。漢文(中国語の古文)と日本語は性質の異なる言語であるため、意味が対応しても、品詞が違う言葉が存するのは当然であると考えられる。

表 1　原文における形容詞とその附訓状況

巻	原文形容詞	附訓箇所	古訓形容詞	原文と附訓の品詞一致度
二十二	133	99	68	68.7%
二十四	73	30	21	70%

また、附訓のない箇所について確認すると、第二十二巻にある「越國獻白鹿一頭(シロキ)」のように、文章最初の部分ですでに「白」に「シロキ」という訓を付け、それ以降の内容に出る同じ用法の「白」に一一附訓する必要はないという附訓の態度によるかと考えられる。

そして、原文と和訓の品詞が一致しないことについて、すなわち原文における形容詞は、それに対応する和訓は形容詞ではないこと、次のような理由が考えられ、具体例を用いて説明する。

ⅰ、漢文の形容詞の名詞化、動詞化により、訓もそれに応じるもの

(3)原文：時人大**異**之曰…(ア(ヤシヒ)て)　　(巻二十二－331)
現代語訳：時の人はたいそう不思議がって…と言う[52]。

例(3)の「異」はもともと形容詞であり、「異之」という形式は形容詞の動詞化であり、つまり「それが不思議と思う」の意味を表すようになっている。例(3)の文脈において「異」は動詞として使われるようになったため、それに合わせて和訓も動詞を用いた。

ⅱ、訓合符あり、和語一語として訓読するもの

(4)原文：我必非聖、彼必非愚、共是凡夫耳。（タタヒト（巻二十二―135)
現代語訳：自分は聖人ではなく、相手が愚人でもない。ともに凡夫なのである。

「凡夫」は漢文において、「凡＋夫」という構造で、すなわち形容詞である「凡」は連体修飾語として名詞である「夫」を修飾する語法構造である。ただし、岩崎本の原文において「凡－夫」のように、訓合符がある。漢字二字の中央に付けているため和語一語で訓読することを示す。

当然、原文と和訓の品詞が一致しない理由には上記以外にもあると考えられ、さらに考察する必要がある。

5.1.3　原文の形容詞に関する考察

[52]本稿にある例文の現代語訳は『新編日本古典文学全集日本書紀』による。

岩崎本原文から収集した形容詞の用法を確認すると、古代中国語の形容詞とほぼ同じく連体修飾語として名詞を修飾する用法と、連用修飾語として動詞を修飾する用法がある。そして、動詞化、名詞化などして形容詞の活用が見られる。ただし、補語としての用法が見られない。また、次に示す例文のように漢字の使用に疑問のある用例も見られる。

(5)原文：本非**輒**言、恆之所重。故、汝愼以察之、不可**輕**言。
（巻二十二－488,489）
現代語訳:もとより安易にいうことではない。重大なことである。それゆえ、お前は慎重に考え、軽々しいことを言ってはならない。

岩崎本には「輒言」という言葉に対して「輒、軽」の二つの漢字が用いられ、図書寮本で確認すると、どちらも「輒」字である。「輒」字について、『康熙字典』には「輒」の俗字とする。「輒」字の意味を、現代通行の漢和辞典『新漢語林』で確認すると、次のような記述がある。

①もっぱら。もっぱらにする。
②動かないさま。
③車の左右のもたれる板。

平安時代の古辞書である『類聚名義抄』(観智院本)を見ると、「タヤスク」の和訓も見える。上記例(5)の文脈から見ると、二箇所の「輒言」はどちらも「軽」字がふさわしいと思われるが、「輒」字も古辞書に根拠のあるものである。
また、この二箇所は「輒 - 輒」「輒 - 軽」「軽 - 軽」のいずれが本来のものであったのか、さらに検討する必要があると考えるものである。

(6)原文：比年五穀不登、百姓**太**飢。（巻二十二－497）
現代語訳：近年、五穀が実らず、人民はたいそう飢えている。

古代語では「大」を用いて「程度がひどい」という意味表すのは一般的であり、図書寮本にも「太」字が用いられている。中国の漢籍文献で確認すると、「大飢」が見られるが、「太飢」は見られない。ただし、『康熙字典』には「太」の古字は「大」と同じだとある。したがって、例(6)の「太」字は誤用とは言えない。

5.2　日本書紀古訓における形容詞

5.2.1　漢字一字と対応する古訓形容詞

岩崎本における漢字一字と対応する古訓形容詞を加点の時期ごとに分類すると、次に示したごとくである。平安中期に加点したものと院政期のものとは下線を引いた箇所以外、かなり一致する。漢字と古訓一対一で対応する例がほとんどであるが、同訓異字の例も少なくない。

Ⓐ平安中期末点(21)

アシ:非、悪、毒	アマネシ:周、傳、洽	アヤウシ:殆	アラシ:暴	イノチナガシ:壽
ウツムナシ:定	ウルハシ:善	オソシ: 晏	カシコシ:畏	カナシ:悲
キヨキ:赤	クサシ:臭	スミヤケシ:急	タケシ:武	チヒサシ:小、少
トシ: 鋒、疾	ナシ:不	ニヒシ:新	ハヤシ:早	ムナシ:空
ヨシ:是、好				

Ⓑ院政期点(19)

アシ:非、悪、毒	アマネシ:周、傳、洽	アヤウシ:殆	アラシ:暴	イノチナガシ:壽
ウツムナシ:定、決	ウツムマシ:決	ウルハシ:善	オソシ: 晏	カナシ:悲
キヨキ:赤	クサシ:臭	スミヤケシ:急	タケシ:武	チヒサシ:小、少
トシ: 疾	ニヒシ:新	ムナシ:空	ヨシ:是、好	

Ⓒ室町時代点(29)

アシ:悪	アツシ:厚、敦	アマネシ:周	アヤウシ:殆、危	ウタカハシ:疑
ウツムタシ:定	ウツムナシ:定	ウタカハシ:決	オソシ: 晩	オモシ:重
カタシ:難	カルカルシ: 輕	シケシ:繁	シロシ:白	スクナシ:少
タカシ: 高	タフトシ:貴	タヤスシ: 輒	チヒサシ:小	ツマヒラケシ:曲
トホシ:遠	ナシ:不、無、无、非	ニヒシ:新	ハヤシ:早	マツシ:貧
ムナシ:空	ヤスシ:安	ヨシ:良、剋	ワカシ:稚	

5.2.2　漢字二字と対応する古訓形容詞

収集した漢字二字と対応する古訓の形容詞について、前節と同じく加点の時期によって分類し、次のように示す。

Ⓐ平安中期末点(29)

アシキワサ:暴－悪	アヤシキハケ:奇－術	イササケキ:大_小、小_事	イツクシキノリ:憲_法
イトナシ: 靡－鹽	ウルハシキ:断－金	オモシロキオト: 伎－樂	カウハシキ(アチハヒ):氣_味
カタマシキ(モノ): 奸_者	サカシク: 賢－哲	サカシキキミ:哲－主	サカシヒト:賢－哲
サカナシ: 不－良	タタシク:忠－正	ツタナク: 不忠	トキ(ウツハ):利_器
ト(ホクチカキ): 遐_邇	ナシ:不－在	ニヒシキ:新_館	(ヒサシ)キ:久_憶
フカキ: 幽－抱	フルキ(サケ):陳_酒	メグキ:愛_児	ユルクシ:性_順
ヨクモアラシ:不可	ワイワイシ: 辨才	ワカイ:少－幼	ヰヤナキ:無－禮
ヲサナキ:不－賢			

Ⓑ院政期点(23)

アシキワサス:暴－悪	アヤシキハケ:奇－術	イササケキ:大_小	イササケキ:小_国
ウルハシキ:断－金	オモシロキオト: 伎－樂	カウハシキ(アチハヒ):氣_味	カタマシキ(モノ): 奸_者
サカシク: 賢－哲	サカシキ:哲－主	タタシク:忠－正	ツタナク: 不忠
トキ(ウツハ):利_器	ナシ:不－在	ニヒシキ:新_館	フカキ: 幽－抱
フルキ(サケ):陳_酒	メグキ:愛_児	ユルクシ:性_順	ヨクモアラシ:不可
ワイワイシ: 辨才	ヰヤナキ:無－禮	ヲサナキ:不－賢	

Ⓒ室町時代点(26)

アシキワサ:悪－逆	アシキワサ:悪逆	アシキナ:悪_名	アライワサ:暴－悪
イササケキ:大_小	イツクシキノリ:憲_法	イトマナシ: 靡－鹽	ムツマシキ:断－金
トキヲソキ: 急_緩	オモシロキコヱ: 伎－樂	カウハシキアチハヒ:氣_味	カシコクナルコと:賢_愚
カタマシク: 佞_媚	カタマシキ(モノ): 奸_者	スズシ: 季－秋－薄－冷	タカキナ:高_名
タカク: 高_逸	トヲクチカキ: 遐_邇	トモシキ(モノ):乏_者	(フカ)キ:深_氣
フルサケ:陳_酒	ムツマシキ:婚－姻	メツラシキ: 珎－國	ヨキ:良_典
ワイワイシ: 辨才	ワカキ:長_幼		

5.3 考察

5.3.1 品詞から見る漢字と古訓の対応関係

今回集めた形容詞で附訓された用例数は 135 であり、前節で説明した方法によって漢字・漢語の品詞を確認すると、「靡鹽」のような品詞の不明の語例を除き、135 例のうち 88 例は形容詞と認定され、全用例数の 65.2%を占める。即ち、前節で確認した結果のごとく、六割以上の古訓と漢字は品詞上一致する。『日本書紀』の訓読は、外国の固有名詞や仏教の概念など、やむを得ないもの以外はできるだ

け和語をもって読み下すことを目指していたとされる。品詞の一致しないものを確認すると、この訓読の意識によるものは少なくはない。次に品詞の一致しない用例を示す。

ⅰ漢字一字と対応するもの

(7)原文：懲**惡**勸善、古之良_典「アシキコト」　　(巻二十二－120)

現代語訳：**悪**を懲らし善を勧めよというのは、古の良い教訓である。

(8)原文：高麗国知得志欲歸之意、與**毒**殺之「アシキモノ」(巻二十四－297)

現代語訳：高麗国は得志の帰国したいという気持ちを知り、**毒**を与えて殺しました。

例(7)の「悪」、例(8)の「毒」は名詞であり、書記古訓は音読みの「アク」、「ドク」を用いず、それぞれの文脈における字義にふさわしい和語として「形容詞連体形＋名詞」という構造の「アシキコト」、「アシキモノ」を用いた。

ⅱ漢字二字と対応するもの

(9) 原文：今時、以僧尼未習法律、輒犯**惡－逆**「アシキワサ」

(巻二十二－450)

現代語訳：今この時にあたって、僧尼がまだ法律に習熟していないために、軽率にも**悪逆な罪**を犯したわけで…

(10)原文：忽逢**暴**風、漂蕩海中「アラキ(カセ)」　　(巻二十二－249)

現代語訳：たちまち**暴風**に逢って、海を漂流したいました。

例(9)の「悪逆」、例(10)の「暴風」は両方とも名詞である。「悪逆」は律の用語で、『唐律疏議・名例』に十悪の第四を「悪逆」とある。「祖父母・父母を殴り殺さんと謀り、伯叔父母・姑兄姉・外祖父母・夫・夫の祖父母・父母を殺す者を言う」とある。日本の「養老律」は八虐の第四を「悪逆」とし、大同小異であるとされる[53]。

「暴風」は漢文において熟語として使われ、「悪逆」、「暴風」は「形容詞＋名詞」の構造の漢字熟語である。それに対応する日本書記古訓の「アシキワサ」、「アラキカゼ」は「形容詞連体形＋名詞」の構造であり、逐字的な訓読である。

[53]小島(1996:585)

さらに、「暴風」に対し、室町時代加点の名詞である「アカラシマカセ」が見られる。

5.3.2　語法構造から見る漢字と古訓の対応関係

本節では漢字二字に対し加点され、合符のある古訓の語法構造について中心に検討する。前章で述べたように『日本書紀』の諸本の訓点には片仮名による傍訓以外に、漢字二字の字間に、そして語例は少ないが漢字三字ないしは四字の字間に合符を付けた場合が見られ、このような合符はさらに正確に『日本書紀』を読み解く働きをすると考えられる。『日本書紀』最古の訓点本である岩崎本では漢字二字あるいは二字以上に合符が附されている例は 500 以上ある。岩崎本は現存二巻であるが、前章で同じ巻を有する図書寮本、兼右本と比較した結果、岩崎本は合符の附される箇所がかなり多いことが分かる。

また岩崎本を含め、訓点を有する『日本書紀』の古写本の合符の付けられた位置には、漢字字間の中央と左側の二種がある。これは一般の訓点資料に見える合符の付け方と一致する。小林（1979）は合符の歴史的変遷に関する論考であり、時代による合符使用の異なる実態を明らかにした。それによると平安初期の合符は漢字と漢字との中央に付ける方式のみであり、平安中期以降、合符を付けた位置によって、音読みと訓読みを区別するようになったということである。漢字二字の中央にある合符は音読みの連合を表し、漢字と漢字との間に左寄りの合符は訓読みの連合を表す[54]。日本書紀の訓読は、外国の固有名詞や仏教の概念など、やむを得ないもの以外にはできる限り和語をもって読み下すことを目指していたとされる。このような訓読の原則があるためか、岩崎本には合符の位置による音読みと訓読みの区別が見られない。これについて、石塚(1985A)は岩崎本初点の合符は加点当時の単語意識を反映すると指摘した。一方、石塚(1985B)は合符のある古訓語彙について、体言 229 語彙、動詞 185 語彙の語構成を分析し、体言・動詞の場合共に語構成の型によって真中と左側といづれかに合符の定まっているものもあるが、語構成の型は同じでも語彙により異なることが多いと述べている。そして、嫉-妬「ネタム」(巻二十二-147)、嫉_妬「ウラヤミネタム」(巻二十二-145)のような同じ漢語に対し、合符の揺れのある語例を指摘し、合符は漢語に基づいて加点されたものではなく和語の単語意識に基づいて加点し分けられていることを述べた。

石塚(1985A・B)は岩崎本に見える合符のある用例について、平安中期末点のみ

[54]小林(1979：126－130)

を対象に整理した。よって本節では、岩崎本に存するほかの二種の加点におけるの合符のある用例を収集し、これらの漢字二字の連合は熟語と認められるかを確認する。その上で、漢字熟語と認められるものについて、古訓と漢語の対応関係を中心に検討を行う。

集めた用例を見ると、同じ漢字二字に対し、三期の訓点に同じ古訓で加点されたものが多い。そして、加点された同じ漢字の間の合符の位置は時期による揺れはない。漢字二字の中央にある合符の用例には次の 10 語ある。

1 イトナシⒶⒷイトマナシⒸ: 靡ー鹽　2 ウルハシキⒶⒷムツマシキⒸ:斷ー金
3 カヘカヘシキ: 反-覆　4 サカナシ: 不ー良　5 サカシクマシマス: 賢ー哲
6 タタシク:忠ー正　7 ナシ:不ー在　8 ムツマシキ:婚ー姻　9 ワカイ:少ー幼
10 ヲサナキ:不ー賢」

これらの古訓のほとんどがは現代においても一語と認識されており、漢語は「靡鹽、斷金」のような辞書で確認しなければ意味が不明なものがあるが、いずれも熟語(一語)と認められる。それ以外のものについて、以下のように漢字と古訓の語法構造を確認する。

ⅰ漢字字間の中央に合符のある用例：
①ア(ヤシキ)ハケ(連体修飾):奇ー術(連体修飾)
②オモシロキオト/コエ(連体修飾): 伎ー樂(連体修飾)
③サカシキキミ(連体修飾):哲ー主(連体修飾)
④フカキオモヒ(連体修飾): 幽ー抱(連体修飾)、
⑤アシキワサ(連体修飾):悪ー逆(名+名構造の熟語)
⑥アライワサ(形容詞+名):暴ー悪(連体修飾)
⑦メツラシキ(クニ)（連体修飾): 珎ー國(連体修飾)

下線を引いた例⑤以外、漢字連合の文法構造と古訓の語構成は一致し、いずれも連体修飾の関係である。⑤の「悪逆」は律の用語で、「名+名」の名詞熟語である。『唐律疏議・名例』に十悪の第四を「悪逆」とある。古訓の「アシキワサ」の「アシキ」は形容詞「アシ(悪)」の連体形、「ワサ」は名詞であり、「しわざ、行為」の意味を表す。古訓は漢語「悪逆」の構成各漢字の字義と対応し、一字ずつの訓読である。

ⅱ 漢字字間の左側に合符のある用例

①アシキナ(連体修飾):悪_名(連体修飾)

②ヲホイナリイササケキ(形動+形):大_少(形+形構造の熟語)

③イササケキ(コト)(連体修飾):少_事(連体修飾)

④イササケキ(クニ)(連体修飾):小_国(連体修飾)

⑤イツクシキ(ノリ)(連体修飾):憲_法(名+名・熟語)

⑥カウハシキ(アチハヒ)(連体修飾):氣_味(名+名)

⑦カシコク(オロカナルコと)(形+形動):賢_愚(形+形)

⑧カタマシキ(モノ)(連体修飾): 奸_者(連体修飾)

⑨カタマシク(コフル)(連用修飾): 佞_媚(形+動)

⑩タカキナ(連体修飾):高_名(連体修飾)

⑪タ(カ)ク(スクレテ)(連用修飾): 高_逸(形+動)

⑫トキヲソキ(形+形): 急_緩(形+形)

⑬ト(キウツハ)(連体修飾):利_器(連体修飾)

⑭ト(ホクチカキ)(形+形): 遐_邇(形+形)

⑮トモシキ(モノ)(連体修飾):乏_者(連体修飾)

⑯ニヒシキムロツミ(連体修飾):新_館(連体修飾)

⑰(ヒサシ)キ(オモ)ヒ(連用修飾):久_憶(形+動)

⑱ヒトナリユルクシ(テ)(名+形):性_順(名+形)

⑲フルキ(サケ)(連体修飾):陳_酒(連体修飾)

⑳メグキ(コ)(連体修飾):愛_児(連体修飾)

㉑(フカ)キ(連体修飾):深_氣(連体修飾)

㉒ヨキ(ノリ)(連体修飾):良_典(連体修飾)

㉓ヲイタルワカキ(動+形):長_幼(形+形)

上記 23 の用例のうち、下線を引いた用例以外は、漢字連語の文法構造と古訓の語構成は一致する。一致するものは「形容詞＋名詞」の連体修飾の構成が最も多い。一致しないものについて確認すると、次の二種に分けられる。

ア、漢字の字義と一致し、かつ品詞が一致する和語はない

②ヲホイナリイササケキ(形動+形):大_少(形+形構造の熟語)

⑦カシコク(オロカ)ナルコト(形+形動):賢_愚(形+形)

㉓ヲイタルワカキ(動+形):長_幼(形+形)

例②の古訓を見ると、「ヲホイナリ」は「大」、「イササケキ」は「少」にあてた和訓である。すなわち、一字ずつ訓読したものである。現代語の形容詞「大きい」は形容動詞「おほきなり」の形容詞化であり、室町時代以降に使われたとされる[55]。したがって、原文の漢字の字義に一致するが、品詞が違うものを用いたことになる。例⑦、㉑も同じ状況であると言える。

イ、原文の文意に沿う訓読

⑤イツクシキノリ（連体修飾）:憲_法(名+名・熟語)

原文：皇太子親肇作**憲_法**十七條。

「イツクシキ(ノリ）ⒶⒷ(イツクシキ)ノリⒸ」（巻二十二-104)

現代語訳:皇太子はご自分で初めて憲法十七条をお作りになった。

例⑤の「憲法」の各構成漢字は両方とも「法則」を意味し、漢字熟語である。古訓「イツクシキ」は形容詞「イツクシ」の連体形、荘厳を意味して天皇および仏などに関していうときに使われる語[56] である。「ノリ」は「法令」を意味し、漢語の語義と同じであるが、さらに「イツクシキ」を附訓した理由は、聖徳太子にかかわる内容のためと考えられる。

⑤ カウハシキ(アチハヒ）（連体修飾）:氣_味(名+名)

原文:於是押坂直与童子煮而食之、大有**氣**_味「カウハシキ(アチワヒ）ⒶⒷⒸ」

(巻二十四-240)

現代語訳：そこで押坂直と子供が煮て食べてみたところ、大そう**香ばしい**味がありました。

例⑥は巻二十四の「芝草(霊芝)」についての話であり、押坂直という人がある日、雪山に偶然に紫色の菌を取って、「芝草(霊芝)」であることを知らなかったが、子供と食べてみたところ、香りのよい味がした。そして、その後押坂直と子供がずっと病気にかからず長く生きた。この内容から見て「氣味」は「たいへんよい味」の意味を表すことが分かる。

一方で「気味」は「名+名」の構成の漢字熟語であり、「物のにおい＋味」の意味を表し、「味がいい」という意味を含でいないが、古訓は文脈に基づいて附したものであり、意訳的な訓法と言える。

55日本国語大辞典(第二版)「大きい」の項目。

56日本国語大辞典(第二版)「いつくし」の項目。

5.3.3　意味から見る漢字と古訓の対応関係

5.3.3.1　漢字一字と対応する古訓形容詞

この節は漢字一字と対応する具体例を用い、漢字と古訓の対応関係を見る。

(11)奉以赤心、更無所忌。「キヨキ」

『日本書紀』の編纂に際して、その編者が、数多くの漢籍を利用したことはすでに先行研究によって、明らかにされている。小島(1962)は日本書紀の編者が文章を潤色するために、『芸文類聚』という類書を利用したとする。そして『日本書紀』が史書であることから、編者は中国の史書『史記』、『漢書』、『後漢書』にも目を向けたとも述べている。

『後漢書』などの漢籍には「赤心」の用例が見られるので、漢籍から引用された言葉ではないかと思われる。「赤」の訓について『訓点語彙集成』で確認すると、「キヨシ」と読むのは『日本書紀』のみである。「赤心」は「嘘いつわりのない、ありのままの心」を意味し、「キヨシ」は「心によこしまな、濁ったところのないさま。公明正大なさま。二心のないさま。忠義なさま」を意味する。「キヨキ」は原文の文脈に基づいて当てられた古訓である[57]。

5.3.3.2　漢字二字と対応する古訓形容詞

(一)　同じ古訓を持つ「婚姻」と「斷金」

(12)ムツマシキ:婚-姻

原文：請、納蘇我倉-山-田麻呂長_女爲妃、而成**婚ー姻**之昵

「ムコシフトⒶⒷムツマシキⒸ」　(巻二十四-225)

現代語訳：どうか蘇我倉山田麻呂の長女を召し入れて妃とし、**姻戚**関係を結んでください。

漢語「婚姻」に対し、三つの時期に加点された古訓が見える。Ⓐ平安中期末とⒷ院政期に加点されたのは「ムコシフト」であり、Ⓒ室町時代に加点されたのは和語一語で、形容詞「ムツマシ」である。まず「婚姻」の語義を確認すると、『爾雅』釈親に「壻之父為姻，婦之父為婚……婦之父母、壻之父母相謂為婚姻」とある。和訓について、ムコは娘の夫、『和名抄』に「爾雅云、女子の夫ヲ婿と為ス。和名、無古」とあり、シフトは夫の父、また妻の父である。『新撰字鏡』に「婦

57「赤心」は文学研究、思想研究において重要な表現であるが、本論では古訓の議論にとどめる。

翁、志比止」とある[58]。以上の内容を見ると「ムコシフト」では少し漢字の字義とは差があるが、「婚姻」を構成する各漢字と対応する訓を付したと思われる。

次に形容詞「ムツマシ」の意味について確認すると、『日本国語大辞典(第二版)』には三つの意味記述があり、意味(2)「夫婦または恋人同士の男女の仲がよい。愛情が濃密である」は「婚姻」の語義と対応する。しかし、字面通りの意味ではなく、内蔵された意味を表す附訓であり、意訳的な訓法と言える。

(13) ウルハシキ、ムツマシキ:斷-金

原文：我雖異-國、心在**斷－金**。

「ウルハシキⒶⒷムツマシキⒸ」　　(巻二十二-383)

現代語訳：私は異国の地にあっても、**心は太子と堅く結ばれている**。

「斷金」の古訓はⒶ平安中期末とⒷ院政期のものは「ウルハシキ」であり、Ⓒ室町時代のものは「婚姻」の古訓と同じ、「ムツマシキ」である。

まず「斷金」の語義を確認すると、「斷金」は『周易』出自の語であり、『周易』(繫辭上)には「二人同心、其利**斷金**」とある。「斷金」の意味について、『中国語大辞典』で確認すると、「金を断つ；どんな堅い物でも断ち切ることのできる喩えである」とある。この意味から転じて、「心を一つにして、協力する力の大きいことの喩え、友情の極めて堅いこと」を表す。次に古訓「ウルハシ」と「ムツマシ」の意味を確認する。「ウルハシ」は「人と人との間柄がきちんとしている。仲がよい」の意味を持つ。この意味の初出例は『日本書紀』（神代巻下）の「友善」の古訓である。「ウルハシ」は本来人や風景の端正な美しさを表現する形容詞であり、この用例は日本書紀古訓の独自の意味であるといえる。「ムツマシ」の「間柄、気持ちのつながり、交わりなどが、隔てなく親密」の意味は「斷金」の意味と対応する[59]。

(二)　意味が難解な「靡盬」とその古訓

(14) 原文：公_事**靡－盬**、終日難盡。

「イトナシⒶイトマナシⒸ」　　(巻二十二－129)

現代語訳：公務は**ゆるがせにできず**、終日やってもやり尽せない。

「靡盬」の古訓についてすでに神田(1949)、小島(1962)の論考がある。神田(1949)は「靡盬」の古訓「イトマナシ」は「魯詩遺説」によると指摘、小島(1962)

[58]小島(1998:67)

[59]『日本国語大辞典（第二版)』による。

は「イトマナシ」は毛詩にある「靡盬」と隣接関連語句によって附されたと述べている。「靡盬」の語義を確認すると、「靡」は『説文解字』には「披靡也」とあり、「披靡」は「風になびくことを意味し、転じて軽やかで美しいこと」を意味する。「盬」は『経義述聞・毛詩上』に「盬者、息也」とある。『毛詩』には「王事靡盬」の用例が多く、『左氏伝』などにはその用例の引用が多く見られ、「王事やむことなし」の意味である。

次は古訓「イトナシ」、「イトマナシ」について『日本国語大辞典(第二版)』を用いて確認する。「イトナシ」は「ひまがない。絶え間がない。いそがしい。あわただしい」の意味であり、初出例は上記の岩崎本の古訓である。これに対し、『古今集』にもその用例があるため、初出とはいえないと思う。「イトマナシ」には三つの意味があり、上記例文の「靡盬」と対応するのは意味 3 の「物事を成しとげるには必要な時間が足りない。時間のゆとりがない。余裕がない。いとまあらず」である。この意味の初出は『今昔物語』(1120 年頃)にある用例である。

そして、『時代別国語大辞典上代編』には「イトナシ」「イトマナシ」のいずれも見出し語として取り上げられていない。「イトマ」という語が収録され、「イトマ」の「イト」は「休みのとき」、「マ」は「間」の意味を持つとされる。

(三)　漢語の語義の基づいて新しく作った語

カヘカヘシキ:反覆

(15)原文：百濟是多**反－覆**之國、道-路之間尚詐之。

「カヘカヘシキ(クニ) ⒶⒷⒸ」　(巻二十二-405)

現代語訳：百済はよく**言を翻す**国です。道路の距離さえも簡単に欺きます。

上記の例文は巻二十二推古紀にある新羅征討の前、大臣が天皇の諮問に対して答えた内容である。この文脈では「よく約束を破って、信用できない」の意味を表す。古訓「カヘカヘシ」は『日本国語大辞典(第二版)』、『古語大辞典』などの辞書には取り上げられていない。『時代別国語大辞典上代編』「カヘス(反・返・還)」の項目に「日本書紀に見える『カヘカヘシ(形)』は『カヘス』に関係する語であろう」と記述している。

漢語「反覆」の語義を確認すると、『説文解字』には「反：覆也。从又、厂反形」とあり、慧琳の『一切経音義』には「覆」の解釈が見当たらないが、「復」には「乎福反鄭玄箋毛詩曰復謂反覆也、珠叢曰復謂重審察也。字又作覆也」とある。すなわち、熟語「反覆」を構成する「反」と「覆」は同義字である。そして、『類聚名義抄』(観智院本)で確認すると、「反」と「覆」のいずれも「カヘス」

という和訓が見られる。以上の辞書記述を踏まえて古訓「カヘカヘシ」について検討した結果、「反覆」に対応する適切な和語がないため、字義に基づいて新しい和語を合成したことが示唆される。

5.4　まとめ

本章では岩崎本の原文と訓点における形容詞について考察を行った。まず原文における形容詞を採集する基準を明確にし､原文の形容詞を取り出した｡さらに、原文は形容詞である箇所の附訓状況を統計し、原文と古訓の品詞上において 7 割程度が一致することが分かる。そのうえで、原文と和訓の品詞が一致しない理由について検討した。

古訓について、それが漢字・漢語との対応を中心に品詞・語法構造・意味の対応などの方面から考察した。品詞からみると、集めた用例の半分以上の古訓と原文の漢字・漢語と一致する。一致しない理由について分析すると、『日本書紀』の訓読意識とかなりの関係があると言える。

語法構造からみると、合符の位置にかかわらず、和訓の語構成は漢字連合の文法構造とほぼ一致する。ここから、漢字・漢語の字義・語義だけでなく、その文法構造を考慮し、可能な限りそれと一致させるという岩崎本『日本書紀』の附訓態度が窺える。

意味の対応について､今回は漢字熟語と古訓の対応関係を中心に分析した｡「婚姻」「斷金」「靡盬」のような熟語に対して和語一語で訓読して漢語の内蔵的な意味を解釈する形容詞が用いられている。これは、これらの漢語を構成する各漢字の字義と対応する和訓を用いて一字ずつ訓読するより、さらに漢語の語義を正確に解釈すためと思われる。特に、「斷金」「靡盬」の 2 語は字面の意味から転じた意味を使うため、意訳的な訓読のほうが適切であると思われる。

古訓について「カヘカヘシ」は前述のように､漢語の意味に基く新造語であり、『日本書紀』古訓にしか見えず、特有語と言える。それ以外の「イツクシ、イトナシ、イトマナシ、ウルハシ」などは現代において一般的に使われる語ではないが、「ムツマシ」は現代語の「睦まじい」につながる。『現代形容詞用法辞典』で確認すると「睦まじい」は「夫婦・子供・恋人など近い関係に有る人について用いられ、友人など一般的に親密な人間同士について用いられず、「したしい」を用いる。」とある。『日本書紀』岩崎本室町時代点において、「ムツマシ」は「非常に厚い友情」の意味を持つ「斷金」の和訓として使われた。ここから、「ムツマシ」の意味が変化したことが分かる。

6 日本書紀古訓形容詞「カシコシ、サカシ、オサナシ」の意味記述

6.1 問題提起

『日本書紀』の岩崎本、前田本、図書寮本などの古写本においては形容詞「カシコシ」が一般に「畏、懼」に、「サカシ」が「賢、哲」などの漢字に附される訓として用いられている。漢字の字義から考えると、『日本書紀』における「カシコシ」は主に「畏怖」の意味、「サカシ」は「賢明」という意味を表すと推測される。一方、兼右本における「賢哲（才智のある）」の訓には「左訓：カシコキヒト　右訓：サカシヒト」の二種が見られる。この例をみると、兼右本『日本書紀』における「サカシ」と「カシコシ」の意味用法には重なる部分があるのではないかと思われる。つまり兼右本『日本書紀』古訓の「カシコシ」には「畏怖」の意味以外に、「才智のある」という意味を持つことが分かる。また、「賢明、才能のある」の意味に関わる用法として、「①賢愚－カシコクオロカナルコト(岩崎本)、②智謀－カシコキ(北野本)、③英才賢徳－カシコクサカシクマシマス(図書寮本)」などの例が挙げられる。

一方で、『日本書紀』の諸本では「愚、不賢、不叡」に対して「ヲサナシ」という訓として用いられている。このうち、「不賢―ヲサナシ、不叡－ヲサナシ」の漢字と和訓の対応関係を見ると、「不賢、不叡」は漢字「賢、叡」の否定表現であるが、それに対して和訓のほうが少なくとも表面的には否定表現ではなく、漢文と和訓には語法的な対応関係が見えない。このような用例は一種の意訳的な訓法と言えるだろう。漢字の字面から離れた意訳的な訓法をすることは日本書紀古訓の特徴としてすでに指摘されている。

本章では、『日本書紀』における漢字「賢」にかかわる古訓形容詞「カシコシ、サカシ、ヲサナシ」を取り上げ、原文においてこの三語の訓を持つ漢文の用例を収集し、原文の文脈に基づき分析したうえで、それぞれの意味用法を明らかにする。また、『日本書紀』における意味が重なる「カシコシ、サカシ」の 2 語は現代になって、「カシコシ」は依然としてプラス的意味で用いられるが、「サカシ」はあまり用いられず、「コザカシイ」というマイナスの意味を持つ形がよく使われるようになった。本章では、この 2 語について考察を加える。最後に、先行研究で指摘された「意訳的な訓法」に関して、和訓と漢字が持つ意味との関係に着目し、上記の「智謀－カシコキ、不賢―ヲサナシ」のような用例を検証する。

6.2　国語辞書における記述

本章で取り上げた古訓形容詞の意味について、『日本国語大辞典(第二版)』及び小学館『古語大辞典』の記述によって確かめる。そして、この三語についての記述は大きく下表のように分類される。

形容詞	意味	初出
カシコシ	①霊力や威力のあるものに対する、畏怖の念を表す。恐ろしい。	日本書記
	②尊貴なものに対する、畏敬の念を表す。尊貴な相手の言動に感謝する気持ち。 尊敬な相手にかかわる自己の言動について恐縮する気持ちを含むことがある。恐れ多い。	古事記 源氏物語
	③あがめ敬うべきだ。 国柄、血筋、身分、人柄などがすぐれている。 才能、知能、思慮、分別の点ですぐれている。 物の品質、性能などがすぐれている。	 日本書記 日本書記 竹取物語
	④人または事柄が尊重すべく、重要、重大であるさま。	枕草子
	⑤物事が望ましい状態であるさま。	落窪物語
	⑥自身に好都合なように計らうことの巧みなさま。巧妙だ。	源氏物語
	⑥(副詞的に用いて)程度のはなはだしいさま。非常に。	竹取物語
サカシ	①優れている。賢明だ。 知徳が衆にぬきんでて優れている。 理性的ですきがない。 判断力がしっかりしていて、心がまどわない。 気がきいていて、とりえがある。	 万葉集 日本霊異記 竹取物語 土佐日記
	②分別くさい。利口ぶって差し出がましい。こざかしい。	落窪物語
	③健康だ。丈夫だ。	蜻蛉日記
ヲサナシ	①(考えが)未熟だ。愚かだ。	日本書紀
	②子供っぽい、幼稚だ。	土佐日記
	③(年齢的に)幼少だ。	竹取物語

6.3 『日本書紀』における「カシコシ、サカシ、ヲサナシ」

『日本書紀』古写本[60]を利用し、「カシコシ、サカシ、ヲサナシ」の訓を持つ漢字・漢語を収集し、次のように示す。

一、カシコシ
畏、懼、威、稜威、賢、智謀、英才、貴、重

上記「カシコシ」の訓を持つ漢字・漢語を見ると、「畏、懼」の二字は意味的には近いと推測される。このように上記の漢字はきく①「畏、懼」、②「威、稜威」、③「賢、智謀、英才」、④「貴、重」の四組に分類できる。これから原文において、文脈に基づき各用例の意味用法を確認する。ここでは、用例の一部を示す。

①「畏、懼」

(1) 原文：仍奏表之曰「天上有神、地有天皇。除是二神、何亦有**畏**(カシコキコト)恋乎。」（岩崎本）

現代語訳：そして、上表文を奉って、「天上に神がおいでになり、地には天皇がおいでになります。この二神のほかに、どこに**畏敬する**ものがありましょうか。…」

(2)原文： 於是天皇詔之曰「是陵自本空、故、欲除其陵守而甫差役丁。今視是怪者、甚**懼**(カシコシ)之。無動陵守者。」則且、授土師連等。（前田本）

現代語訳：そこで天皇は詔して、「この陵はもともと空である。そのため陵守を廃止しようと思って、初めて役丁に徴発したのだ。今この不吉な前兆を見ると、はなはだおそれ**恐れ多い**。陵守を廃止してはならない」と仰せられ、すぐにまた陵守を土師連らの管掌下に置かれた。

[60]古写本の岩崎本、圖書寮本、前田本を利用した。兼右本と寛文九年版本について筆者が以前収集した巻二十二と巻二十四のデータも利用した。神代巻に関して、『六種対照日本書紀神代巻和訓研究索引』を利用した。また、『訓点語彙集成』も参照した。

②「威、稜威」

(3)原文：則謂夫曰「汝祖等、渡蒼海跨萬里平水表政、以**威**武(カシコクタケキ）傳於後葉…」　（図書寮本）

現代語訳：そこで夫に語って、「あなたの先祖たちは、蒼海原を渡り万里を超えて、**畏敬すべき**武力をもって後世に名を伝えてきました。…」

③「賢、智謀、英才」

(4)原文：相共**賢**(カシコク)愚、如鐶无端。　（岩崎本）

現代語訳：お互いが**賢**であり愚でもあって、鐶に端がないようなもので区別はつかない。

(5)原文:億計王曰「弟**英才**(カシコク)賢徳(サカシクマシマス)、爰無以過。」　（図書寮本）

現代語訳：億計王は、「弟は**才能があって**賢く徳もある。これに勝る人はいない」と仰せられた。

(6)原文：既而天皇謂高市皇子曰「其近江朝左右大臣及**智謀**(カシコキ)群臣共定義…　（北野本）

現代語訳：やがて天皇は高市皇子に語って、「いったい近江朝では、左右大臣と**智謀にたけた**群臣が協議して事を決定している…」

④「貴、重」

(7)原文：額搶地叩頭曰「臣之罪實當萬死。然當其日、不知**貴者**(カシコキヒト)。」　（図書寮本）

現代語訳：額を地面につけて叩頭して、「私の罪は実に死に当たります。しかしながら、あの日は、**貴い人**だとは存じあげませんでした」と申し上げた。

(8)原文：「愛之叔父、勞思、非一介之使遣**重臣**(カシコキマチキムタチ)等而教覺、是大恩也。　（北野本訓）

現代語訳：「親愛なる親父は私を労わって、使者一人だけではなく**重臣**たちを遣わして教え諭された。これは大いなる恩愛である。

例文(1)は神、天皇のような権威のある者に対する恐れ敬うことを表す意味であり、『古事記』にも同じ用法が見られる。例(2)は霊力のあるものに対する恐れる気持ちである。例(3)は威力があり、すぐれた畏敬の気持ちを表す。例(4)(5)(6)は訓と対応する漢字が異なるが、意味的には共通する部分がある。いずれも才能があること、思慮の深いことを意味している。例(7)(8)は身分が高い意味を表す。従って、『日本書紀』における訓「カシコシ」には①霊力、権威に対する恐れる気持ち、②才能のある、身分の高い者をおそれる。敬うべきだ」などの意味が示している。そのうち、①の意味を表す用例が最も多い。

『訓点語彙集成』において「カシコシ」の訓を持つ漢字を確認すると、「尊、貴、賢」以外、ほかは全部「畏怖」の意味を持つ漢字である。「**英**才、**貴**者、**貴**国」に附される訓として、「才能のある。身分・国が優れる。あがめ敬うべきだ」という意味用法は『日本書紀』の訓しか見えない。

二　サカシ

「サカシ」の訓を持つ漢字・漢語は「賢、賢哲、賢徳、賢聖、哲、明哲、師、叡智」などが挙げられ、次にその用例を示す。

(9)原文：所寶惟**賢**「(サカ)シク、サカシキヒト」、爲善最樂。　　(前田本)

現代語訳：宝とすべきは**賢人**であり、善を行うことを最大の喜びとする。

(10)原文：及乎繼體之君、欲立中興之功者、曷嘗不頼**賢哲**「(サカシ)ク」之謨謀乎。　　(前田本)

現代語訳：皇位継承の君主として、中興の功を立てようとすれば、昔からどうしても**賢哲**の策謀に頼らなければならない。

(11)原文：天皇、以心爲**師**(サカシ)、誤殺人衆、天下誹謗言「太惡天皇也。」　　(前田本)

現代語訳：天皇はご**自分の判断をただしい**とされたため、誤って人を殺すことが多かった。天下の人々は誹謗して、「大悪の天皇である」と言った。

(12)原文：天皇、幼而聰明**叡智**(サカシクマシマス)、貌容美麗、及壯仁寛慈惠。（前田本）

現代語訳：天皇は幼少の頃から聡明で**叡智**があり、容貌も美麗でいらっしゃった。成年に及んでは、大そう思いやりがあり情け深くていらっしゃった。

上記「サカシ」の用例をみると、『日本書紀』においては、「サカシ」は漢字「賢」、「賢」字で構成する漢字熟語、「賢」と近似的意味を持つ「哲、叡智」などの訓として使われている。これらの漢字・漢語は、いずれもプラスの評価を持つものである。当然それと対応する訓としての「サカシ」には、マイナスの意味用法が見られない。

三　ヲサナシ

「ヲサナシ」は漢字・漢語の「愚、不賢、不叡、不敏」などと対応する。意味は例(13)、(14)のように「才能がない、考えが未熟だ」などである。

(13)原文：夫天下者大器也、帝位者鴻業也、且民之父母斯則聖賢之職、豈下**愚**（ヲサナイヒト）之任乎。（図書寮本）

現代語訳：そもそも天下は大器であり、帝位に即くことは大業である。また人民の父母たることは、聖人や賢人の職であり、**愚者**の任であろうはずはない。

(14)原文：豈獨朕**不賢**(ヲサナキノミナラム)耶、大臣亦不忠。是、後葉之惡名。（岩崎本）

現代語訳：決して私一人の**愚行**では済まず、大臣も不忠とされ、後世に悪名を残すことになろう。

「愚」の訓には「オロカ」も見られる。ほかの訓点資料においては、「ヲサナシ」が対応する漢字は「小、幼、稚、童」などである。これらの漢字の訓は『日本書紀』では、次に示した例のように、「イトキナシ、ワカシ」である。

肝**稚**之－ワカシ、少幼―ワカイ（岩崎本）

幼年－ワカクシテ、存孺－イトキナイトキ（図書寮本）

6.4　古訓形容詞「カシコシ」と「サカシ」

前節では、日本書紀古訓おける「カシコシ、サカシ」の意味を確認した。『日本書紀』の古訓において「カシコシ」は主に「畏怖、畏敬」、「サカシ」は「賢明、才能がある」の意味として使われているが、二つの訓は意味的に共通する面があることが分かった。一方「サカシ」は「賢」、あるいは「賢」字で構成する漢字熟語、「賢」と近似的意味を持つ「哲、叡智」などの訓として使われている。これらの漢字・漢語は、いずれもプラスの評価を持つものである。当然それと対応する訓としての「サカシ」には、マイナスの意味用法が見られない。

現代語の「かしこい、さかしい」の意味用法について国語辞書を用いて調べると、「カシコイ」は主に「頭がいい、利口だ」の意味として使われている。「さかしい」は現代語において方言として生き残っている言葉[61]であり、「かしこい、利口だ」の意味を持つが、現代においてほとんど用いられず、「こざかしい」といった形でマイナスの意味で用いられる[62]。また、「さかしい」の使用状況について、「web データに基づく形容詞用例データベース」を用いて調査すると、一例も見つからないが、「こざかしい」は 1,366,461 件の用例がヒットされた。このように、「カシコシ、サカシ」の意味用法が変遷したことが分かった。この 2 語について現代語に至るまでどのような変遷を経てきたのか、どのような理由によって意味変化が生じたのか、取り組むべき課題が多くある。本章ではこれらの問題を解決するための考察一階梯として、まず上代、中古における「カシコシ、サカシ」の意味用法を確認し、意味的特徴を明らかにする。そして、この 2 語の上代以降の歴史的な意味変遷の実態を記述する。

6.4.1　先行研究

「カシコシ、サカシ」の「語誌」について、松浦(1983)は次のように説いている[63]。

> 「カシコシ」は記紀、万葉の時代から多く用いられたが、畏怖、畏敬の念を表す心情表現の語であった。その意味は現代語の「頭がよい、利口だ」といった、知恵、才覚についてのものではなかった。
>
> 「サカシ」は上代において、知恵や才覚の優れた意味を持つ語として使われ、高い評価を伴う語であった。平安時代から意味が変遷し、現代語の「コザカシイ」に

[61]『新明解国語辞典(第 7 版)』
[62]『現代形容詞用法辞典』
[63]佐藤(1983：199－203)

通じる低い評価を与えられている語になった。

上記二語について、上代から中世までの意味用法を『時代別国語大辞典』を確認すると、次のように語義が記述されている。

『時代別国語大辞典上代編』

■　カシコシ【恐・畏】(形ク)

①恐ろしい。②恐れ多い。③驚くべきである。ただごとではない。

■　サカシ【賢】(形シク)

賢明である。

『時代別国語大辞典室町時代編』

■　カシコシ【畏し・賢し】(形ク)

㈠すぐれた絶対的な力に対して、おそれ、敬う気持ちである。(畏敬の対象：①神仏などの霊力、②天皇などの権威、③卓越のもの)

㈡人のすぐれた知的能力が、感心させられるほど適切に機能するさまである。(①知恵、適切な判断力、②優れた能力、③適切な対処、④思いもよらずめはしが利く)

■　サカシ【賢し】(形シク)

①才気をたのみ、ぬけめなく、すばやい判断を下すさまである。

②丈夫で、無病息災である。

この記述内容をみると、上代以降この二語の意味用法が拡大し、「カシコシ」は「才知、能力がある」という意味を持ち、「サカシ」と共通する意味を持つようになったことが分かる。「サカシ」の「丈夫で、無病だ」という意味は上代では見えない。そして、松浦説が述べるように低い評価の用法が中世までは見えない。

「カシコシ」について、『源氏物語』における用例を分析し、論考したのは東辻(1967)である。山崎(1977)は「サカシ・サガシ」といった二つの形容詞についての論考である。そして、土居(2001)は『土佐日記』にある「さかしきもなかるべし」」をめぐって、平安時代和文における「サカシ」の意味用法を論述した。本章では、以上のことをふまえて、上代・中古の文学作品に使用された「カシコシ、サカシ」の意味用法を分析し、意味的特徴を明らかにする。

6.4.2 平安時代文学作品における「カシコシ、サカシ」

「カシコシ、サカシ」の中古における意味用法について、国立国語研究所が開発した「日本語歴史コーパス」の平安時代編を利用して用例を収集した。平安時代編には『古今和歌集』、『土佐日記』、『竹取物語』、『源氏物語』、『枕草子』のように和歌、日記、物語、随筆の各ジャンル全 14 の作品が収録された。検索された用例数からみると、「カシコシ」は『源氏物語』が最も多く、136 例があり、その次は『枕草子』の 34 例である。「カシコシ」に対し、「サカシ」の用例は少ない。同じく用例数が最も多いのは『源氏物語』で、30 例あり、『枕草子』は５例ある。本論では、『源氏物語』及び「枕草子」の用例を中心に検討する。

◆ カシコシ

『萬葉集』、『古事記』、『日本書紀』では「カシコシ」は主に「畏怖、畏敬」の意味を表す。『日本書紀』において、「カシコシ」は「才能あり、能力がすぐれている」の意味を持つ「英才」などの漢語の訓として使われる用例も見られる。これに対し、平安仮名文学の『源氏物語』、『枕草子』の用例を見ると、上記の意味以外に、独特の意味用法が見られる。

平安仮名文学では、次に示す用例のように、「カシコシ」が表す「畏敬」の意味が軽くなった。また、大切にする、慎重の意味を持つようになった。

(15)などてか、それをもおろかにはもてなしはべらん。**かしこけれど**、御ありさまどもにてもおしはからせ給へ。 『源氏物語・夕霧』

(16)とみのもの縫ふに、**かしこう**縫ひつと思ふに、針を引抜きつれば、はやく後をむすばざりけり。 『枕草子 91 段』

◆ サカシ

前節で述べたように、「サカシ」の意味にはプラス評価とマイナス評価の両方ある。上代の文学作品の用例や『日本書紀』古訓としての意味はプラス評価である。平安時代の「サカシ」は、判断がしっかりしていて物に動じないことをいった。自分自身の内に蔵する力、判断力によって事を決めて、その結果に自信をもっていることを表す[64]。『枕草子』の「さかしきもの」の段は短い内容であるが、「サカシ」は四回使われ、そのうちの三例が「身分の卑しい者の小ざかしいこと」

[64]土居(2001：36)

についてのマイナス評価である。同じ意味用法は『源氏物語』にも見られる。

6.5 「不賢」の古訓「オサナシ」

『日本書紀』の古訓には字音語が極めて少なく、できるだけ和語を以ってなされる傾向があるとされる。このような特徴を持つ日本書紀古訓の中に、「賢王－サカシキキミ(図書寮本)」のように漢字一字一字逐字的に訓じ、いわゆる直訳的な訓読と言えるものがある一方、「智謀―カシコキ(北野本)」のように漢字熟語の意味を全体的に解釈して意訳的な訓読と言えるものもある。これ以外、意訳的な訓読と言える用例は、漢字熟語「賢哲、叡智」には「サカシ」、「英才」には「カシコシ」、「不賢－ヲサナシ」が当てられる箇所が挙げられる。ここでは、否定表現の「不賢―ヲサナシ」について検討する。『日本書紀』では、一般に「賢」に対応する訓は「サカシ」であり、普通の訓読なら、本文の否定表現に対し、和訓も否定表現を以ってするのが一般的である。すなわち、「不賢」の和訓は「サカシカラズ、サカラザルコト」などが考えられる。しかし、『日本書紀』ではこのような訓法をせずに、「ヲサナシ」の訓を用いるのは一般訓点資料とは異なり、日本書紀古訓の特徴だと言えるだろう。

『日本書紀』各古写本において、原文の否定表現に与えられる和訓は表面的には否定でない用例は少なくない。「不賢」と近似的な意味がある漢字表現の「不敏、不叡」の訓も「ヲサナシ」である。これ以外、「不可－アシキコト」、「不善－アシキコト」、「不幸―イノチミシカクシテ」、「不良―サカナシ」、「無色―ミニクシ」、「無事－ツツカナシ」などが見られる。

内田(2005)は日本書紀古訓の否定表現の意訳について詳しい論考がある。原文の漢文の否定表現に対し、語法的にも、語源的にも否定の様相をもたない訓を与えられる訓法は、本文で否定されている概念の対極性においてその否定表現を捉えて訳す方法である。この訓法をする理由はより日本語文らしくすることにある。このような訓は意味的には限定である。言い換えれば、特定の文脈において、そこに固有な、的確な解釈が得られることである[65]。即ち、「賢」に対応する訓「サカシ」の否定形である「サカシカラズ」は「サカシ」以外の、それではない領域のすべてを覆う。しかし、その意味自体はその領域全体に広がっていることにおいて不定である。「サカシカラズ」は「サカシ」ということを除いて何であるかは特定されないのである。それに対し、「不賢－ヲサナシ」はその不定であったものが特定のことに限定されていると述べている。

[65]内田(2005：329 - 333)

「不賢」の訓「ヲサナシ」は「才能がない」の意味を持つ。この意味用法は『日本書紀』では初出である。いわば「不賢」の解釈である「ヲサナシ」について具体的に調べるには、まず「賢」の意味を確かめる。「賢」について『説文解字(巻六)』には「賢：多才也。从貝臤聲。胡田切」とある。つまり、「才能ある、優れる」という意味を持つ漢字である。『日本書紀』における「賢哲、賢臣」などの表現は『論語』、『三國志』にも見られる。「才智のある人、賢明の人」の意味を表す。そして、『類聚名義抄』においては「賢」字には「カシコシ・サカシ・マサレリ・イタハル・ヨシ・タカシ・ヒジリ・ミル・マサル・タダス」などの訓が見られる。

「ヲサナシ」は「ヲサヲサシカラヌの義」を持ち、その対極にあるものは「ヲサヲサシ」である。[66]『新撰字鏡』には「了事－乎佐乎佐志」とある。「了事」とは「道理を明らかにさとる」の意味を表す。『色葉字類抄（黒川本）』には「不肖(ヲサナシ)不了＜同＞」とある。「不了」は「了事」と対極するものであり、「道理を明らかにしない、理解しない」の意味である。

「ヲサヲサシ」は「すぐれている。しっかりしている」の意味を表す語である(『日本国語大辞典(第二版)』による)。このことから、「ヲサナシ」は「事柄の道理を明らかにさとらない、すぐれていない」を表すものであると考えられる。以上により、「才能がない、優れていない」の意味を表す「不賢」という漢字表現に対し、「ヲサナシ」を以って解釈したのである。

6.6　まとめ

本章では、『日本書紀』の訓点本及び平安時代文学作品における「カシコシ、サカシ、オサナシ」の意味用法について、収集した用例を用いてその意味用法を確認した。

まずは意味が変遷した「カシコシ、サカシ」の２語について、上代、中古における「カシコシ、サカシ」の意味用法を確認した。平安時代以降「カシコシ、サカシ」の意味用法は拡大し、上代や現代よりはるかに意味用法が広い。「カシコシ、サカシ」の中世以降の意味用法の実態と、それがどのように現代語の意味用法に移行していったのかについて、更に考察する必要がある。

最後、「不賢」の古訓「ヲサナシ」について調査し、その附訓の根拠及び理由について検討した。

[66]小学館『日本語源大辞典』

7　おわりに

本論文は、『日本書紀』の訓点本に存する古訓語彙の中で、特に形容詞語彙について量的構造、意味的構造など幾つかの方面から考察と分析を行ったものである。以下、各章の考察内容及び考察によって明らかにしたことを総括して本論文の結論としたい。

第 1 章では、日本書紀古訓及びその成立の経緯、『日本書紀』の諸本、本研究の調査資料について簡単に紹介し、日本書紀古訓に関連する先行研究を概観した。そして、本論文の研究対象と研究目的を明らかにした。

第 2 章では、古写本系統に属する三種の資料を用い収集した古訓形容詞について調査した結果を、村田(2005)、(2010)の調査結果と比較し、次のような結論が得た。

まず異なり語数から見ると、三つの写本はいずれも形容詞の附訓が多いとは言えない。次に、活用形の構成について比較した結果は、岩崎本の平安時代に加点したものは中古の訓点資料の形容詞の比率にかなり類似していることが分かる。一方で、岩崎本の他の二期の訓点、前田本、図書寮本における古訓形容詞は上代語形容詞より中古散文に見る形容詞の性質に近似している。

最後に語の階層構造からみると、三種の古写本における古訓形容詞は上代形容詞の性質に近似していることが分かる。また、語の新旧について、三種の古写本において、中古に造語された「新出の語」より上代からすでに存在する「既存の語」のほうが多用されていることも明らかになった。

以上の結果より、活用形の構成の比率に諸本がそれぞれ異なる様相を呈するが、ク活用形容詞の比率が高い点に一致する。これについて、前節で述べたように、歴史書である本書の性質にかかわると考えられる。また、『日本書紀』の古写本は加点時期の日本語資料であるため、語の階層構造、語の新旧の調査結果からみると、諸本の形容詞は上代語形容詞の性質に近似しているが、そのまま上代語形容詞といえるかについてはさらに検証する必要がある。

第 3 章では、本章『日本書紀』神代巻古写本の二種から収集した古訓形容詞について、意味的構造、史的変遷の様相を調査した。

結果について、意味分野からみると、神代巻の古訓形容詞語彙にかなり多くの意味分野の語が使用され、30 以上にわたる。史的変遷についての調査結果は、収集した古訓形容詞がかなりの史的変遷と意味変化が発生したことが分かった。しかし、『日本書紀』に使用されている古訓形容詞はどのように現代語の意味用法に移行していったのかについて、本論ではほとんど触れていないが、今後の課題とする。

第 4 章では、巻二十二、巻二十四を共有する『日本書紀』の訓点本四種を調査資料とし、それぞれの巻二十二、巻二十四から収集した古訓形容詞について考察した結果は、およそ次のような三点にまとめることができる。

①四種の伝本において形容詞で読む漢文箇所、古訓の形容詞の附訓状況、仮名の表記、符号の使用には相当な相違が見られる。四種の諸本を比較すると、兼右本と寛文九年版本の訓はほぼ同じであり、以前の写本の訓と加点当時の新しい訓が交じっている。

②使用語彙の語数は図書寮本、寛文九年版本、岩崎本、兼右本の順で多くなっている。四種の伝本はいずれも上代形容詞、すなわち古い語の使用が多いが、岩崎本のⒸ室町時代点、兼右本、寛文九年版本では新しい読み方が見られる。したがって日本書紀古訓の形容詞はすべて上代形容詞と見なすことはできないと考えられる。上代形容詞の残存は見られるが、それ以降の時代の新要素も含んでいる。

③今回収集した合符のある箇所、すなわち二字漢語或いは稀ではあるが二字以上漢語の訓み方について和語一語で訓むか、和語二語(一語ずつ)で訓むかについては、それと対応する漢語の語構成と緊密な関係があるではないかと推測できる。

第 5 章では、日本書紀古訓形容詞と原文の漢字・漢語の対応について、原文の形容詞、古訓の形容詞をめぐって考察を行った。

原文の形容詞の附訓状況を統計し、原文と古訓の品詞上において 7 割程度が一致することが分かった。また古訓についての検討した結果は、集めた用例の半分以上は、古訓と原文の漢字・漢語と品詞が一致する。一致しない理由については分析すると、『日本書紀』の訓読意識とかなりの関係があると言える。

さらに語法構造からみると、合符の位置にかかわらず、訓の語構成は漢字連合の文法構造とほぼ一致する。ここから、漢字・漢語の字義・語義だけでなく、その文法構造を考慮し、可能な限りそれと一致させるという岩崎本日本書紀の附訓態度が窺える。

意味の対応について、今回は漢字熟語と古訓の対応関係を中心に分析した。「婚姻」「斷金」「靡盬」のような漢語に和語一語で訓読して漢語の内蔵的な意味を解釈する形容詞を用いられていた。これは、漢語を構成する各漢字の字義と対応する訓を用いて一字ずつ訓読するより、さらに漢語の語義を正確に解釈するためと思われる。その中で「反覆」の古訓である「カヘカヘシ」は前述のように、漢語の意味に基く新造語であり、『日本書紀』古訓にしか見えず、古訓の特有語と言える。

第 6 章では、日本書紀古訓形容詞語彙の中、漢字「賢」にかかわる古訓形容詞「カシコシ、サカシ、ヲサナシ」の 3 語を取り上げ、この 3 語の古訓を持つ原文

の用例を収集し、文脈に基づき分析したうえで、3 語それぞれの意味用法を記述した。さらに意味が変遷した「カシコシ、サカシ」の 2 語について、上代、中古における「カシコシ、サカシ」の意味用法を確認した。平安時代以降「カシコシ、サカシ」の意味用法は拡大し、上代や現代よりはるかに意味用法が広いことが分かった。

最後に本論の研究課題の意義は次の 2 点だといえる。

①日本書紀古訓に関して、古くから盛んに研究が行われ、優れた研究成果が積み重ねられてきた。しかしながら、これまでの研究は日本書紀古訓の系統・訓法・諸本間の訓法の異同・古訓の根拠などに集中する。日本書紀古訓の語彙を全体に検討するものはほとんどなされていないようである。本論では、『日本書紀』の各時代の古写本や版本を利用し、日本書紀古訓の形容詞語彙を中心に調査し、諸本におけるその量的構造、意味的構造、史的変遷、諸本の異同を明らかにしている。さらに、古訓形容詞語彙を原文とどのように対応させるかについて、語法構造などの方面から検討し、明らかにした。

②これまで訓点資料の形容詞語彙に関する論究は盛んに行われていない。しかしながら、訓点資料は国語研究における重要な資料の一つであり、日本語の形容詞語彙の全体像を明らかにするには、訓点資料の形容詞語彙についての研究が欠かせないと思う。本論は訓点資料の形容詞語彙に関する一研究として『日本書紀』の訓点資料における形容詞語彙を考察し、諸本における様相を明らかにした。

参考資料１：古訓形容詞語彙の階層構造

	見出し語	漢字	活用	階層構造	上代	中古	岩崎本			前田本	図書寮本
							A	B	C		
1	あかし	赤	ク	第一次		○			○		
2	あきらけし	明	ク	第一次	○					○	
3	あざらけし	鮮	ク	第一次	○					○	
4	あし	悪、毒	シク	第一次	○		○	○	○	○	○
5	あつし	厚	ク	第一次	○				○		○
6	あつし	篤、敦	シク	第一次		○			○	○	○
7	あつし	熱	ク	第一次	○				○		
8	あまねし	周、傅	ク	第一次	○		○	○	○		○
9	あやし	奇、異	シク	第一次	○		○	○		○	○
10	あやふし	危	ク	第一次		○	○	○	○	○	○
11	あらし	荒、暴	ク	第一次	○		○		○	○	○
12	いかし	嚴	シク	第一次	○						○
13	いさぎよし	清	ク	第二次	○					○	○
14	いささけし	小、少	ク	第一次	○	○	○	○	○	○	○
15	いさをし	功	シク	第一次		○				○	○
16	いすかし	俄	シク	第一次	○					○	○
17	いそし	勤	シク	第一次	○					○	
18	いたし	痛	ク	第一次	○					○	
19	いたはし	功	シク	第一次	○						○
20	いつくし	嚴、肅	シク	第一次	○					○	○
21	いとなし	暇無	ク	第二次		○	○				○
22	いときなし	幼	ク	第一次		○				○	○
23	いのちながし	命長	ク	第二次		○	○	○			
24	いやし	鄙、微	シク	第一次	○					○	
25	うたがはし	疑	シク	第一次	○			○			
26	うつなし	定	ク	第一次	○						○
27	うつむなし	定	ク	第一次	○		○	○	○		

	見出し語	漢字	活用	階層構造	上代	中古	岩崎本			前田本	図書寮本
							A	B	C		
28	うまし	食美	ク	第一次	○						○
29	うやなし	無禮	ク	第一次		○					○
30	うるはし	麗、善	シク	第一次	○		○	○		○	○
31	うれたし	慷	ク	第二次	○						○
32	おそし	遅	ク	第一次	○		○	○	○	○	○
33	おほし	多	ク	第一次	○					○	○
34	おむおむし	重重	シク	第一次		○				○	
35	おもし	重	ク	第一次	○				○	○	○
36	おもしろし	伎	ク	第二次	○		○	○			○
37	おもなし	悪	ク	第二次		○				○	
38	かうばし	気	シク	第二次		○	○	○			
39	かぐはし	気	シク	第二次		○					○
40	かしこし	畏、賢	ク	第一次	○		○	○	○	○	○
41	かたし	固、堅	ク	第一次	○					○	○
42	かたし	難	ク	第一次	○				○	○	○
43	かたじけなし	辱	ク	第一次	○						○
44	かだまし	奸	シク	第一次		○	○	○	○	○	○
45	かなし	悲	シク	第一次	○		○	○		○	○
46	かへがへし	反	ク	第一次		○					○
47	かほよし	麗	ク	第二次	○					○	○
48	かまびすし	継業	ク	第二次		○					○
49	からし	烈、酷	ク	第一次	○					○	○
50	かるし	軽	ク	第一次		○					○
51	かるがるし	軽軽	シク	第一次		○			○		
52	きたなし	黒	ク	第一次	○						○
53	きよし	清、赤	ク	第一次	○		○	○		○	○
54	きらきらし	端麗	シク	第一次	○					○	○
55	くさし	臭	ク	第一次		○	○	○			○
56	くだくだし	摧	シク	第一次		○					○

	見出し語	漢字	活用	階層構造	上代	中古	岩崎本			前田本	図書寮本
							A	B	C		
57	くはし	細	シク	第一次	○					○	○
58	くやし	苦	シク	第一次	○		○	○			○
59	くらし	蔽	ク	第一次	○					○	○
60	くるし	塗炭	シク	第一次	○					○	○
61	こはし	強	ク	第一次	○						○
62	さかし	賢	シク	第一次	○		○	○	○	○	○
63	さがし	険、阻	シク	第一次	○					○	○
64	さがなし	不良	ク	第一次	○		○			○	○
65	さとし	聡	ク	第一次	○					○	○
66	さむし	寒	く	第一次		○					○
67	しげし	繁	ク	第一次	○				○		
68	しろし	白	ク	第一次	○				○	○	○
69	すくなし	鮮、少	ク	第一次	○				○		○
70	すずし	冷、陰	シク	第一次	○				○	○	
71	すみやけし	急	ク	第一次	○		○	○			
72	たかし	聳、高	ク	第一次	○				○	○	○
73	たくまし	伉健	シク	第一次		○				○	○
74	たけし	猛	ク	第一次	○					○	○
75	たしなし	窮	ク	第二次		○				○	
76	ただし	正、忠	シク	第一次		○			○	○	○
77	たはし	戯	ク	第一次		○					○
78	たふとし	貴	ク	第二次	○				○		
79	たやすし	輒	ク	第二次	○				○	○	○
80	ちかし	近、隣	ク	第一次	○				○	○	○
81	ちひさし	細、少	ク	第一次	○		○	○	○	○	○
82	つたなし	忠、拙	ク	第一次	○		○	○		○	○
83	つばひらけし	縦	ク	第一次	○						○
84	つよし	強	ク	第一次	○					○	
85	とし	利、疾	ク	第一次	○		○	○	○	○	○

	見出し語	漢字	活用	階層構造	上代	中古	岩崎本			前田本	図書寮本
							A	B	C		
86	とほし	遠	ク	第一次	○		○		○	○	
87	ともし	乏	シク	第一次	○				○		○
88	ながし	長、寿	ク	第一次	○		○	○		○	○
89	なし	無、勿	ク	第一次	○		○	○	○	○	○
90	なめし	軽	ク	第一次	○					○	○
91	なやまし	迯遁	シク	第一次		○					○
92	にひし	新	シク	第一次	○		○	○	○		○
93	ねがはし	願	シク	第一次		○					○
94	はげし	烈	シク	第一次		○					○
95	はづかし	慙	シク	第一次	○					○	○
96	はなはだし	甚	シク	第一次		○					○
97	はやし	早	ク	第一次	○		○		○		
98	ひさし	久、曠	シク	第一次	○		○			○	○
99	ひとし	齋	シク	第一次		○				○	○
100	ひろし	長、曠	ク	第一次	○					○	○
101	ふかし	深、幽	ク	第一次	○		○	○	○		○
102	ふるし	耆	ク	第一次	○		○	○			○
103	またし	全	ク	第一次	○					○	○
104	まづし	貧	シク	第一次	○				○		
105	みじかし	夭	ク	第一次	○					○	○
106	みづなし	才無	ク	第一次	○					○	○
107	みにくし	无危	ク	第一次	○					○	
108	むなし	空	シク	第一次	○		○	○	○	○	○
109	めぐし	愛	ク	第二次	○		○	○			○
110	めづらし	希有	シク	第一次	○				○	○	○
111	もし	茂	ク	第一次	○						○
112	やすし	易	ク	第一次	○					○	○
113	やすし	安	ク	第一次	○				○	○	○

	見出し語	漢字	活用	階層構造	上代	中古	岩崎本			前田本	図書寮本
							A	B	C		
114	ゆるし	順	ク	第一次		○	○	○			○
115	よし	良、可	ク	第一次	○		○	○	○	○	○
116	よわし	弱	ク	第一次	○					○	○
117	わいわいし	辨才	シク	第一次		○	○	○	○		
118	わかし	幼、若	ク	第一次	○			○	○	○	○
119	ゐやなし	禮無	ク	第二次	○		○	○		○	○
120	ゐやゐやし	禮禮	シク	第一次		○				○	○
121	をさなし	愚	ク	第二次		○		○		○	○
122	をさをさし	長々	シク	第一次		○					○
123	をぢなし	懦	ク	第二次	○						○
124	をし	惜	シク	第一次	○					○	
125	ををし	雄雄	シク	第一次	○						○

参考資料 2：神代巻の古訓形容詞語彙(60 語)

ア：アカシ、アシ、アヂキナシ、アツシ、アヤシ、アラシ

イ：イサギヨシ、イタシ、イツクシ、イヤシ

ウ：ウシ、ウスシ、ウタガハシ、ウツクシ、ウツシ、ウトシ、ウマシ、ウラメシ
ウルハシ、ウレシ

オ：オソシ、オホシ

カ：カカシ、カシコシ、カタシ、カホヨシ

キ：キヨシ、キラキラシ

ク：クラシ、クロシ

ケ：ケガラハシ

サ：サガナシ、サハシ

シ：シコメシ

タ：カカナシ、タケシ、タノシ、タフトシ

チ：チヒサシ

ツ：ツラシ

ト：トホシ、トホシロシ

ナ：ナシ

ニ：ニコシ、ニヒシ

ヌ：ヌルシ

ハ：ハゲシ、ハヤシ

ヒ：ヒサシ、ヒトシ、ヒロシ

フ：フカシ

マ：マグハシ

ミ：ミニクシ

ム：ムツマジ、ムナシ

ユ：ユルシ

ヨ：ヨシ

ロ：ロヨシ

ワ：ワカシ

参考資料 3：四種の伝本における日本書紀古訓の形容詞

注：①形容詞は片仮名で示し、仮名遣いは原書に従い、五十音順に排列する。（　）に訓と対応する漢文を示す。

②訓が一致し、対応する漢字の意味が一致すれば一語と認める。漢字の意味が一致しない場合、二語とする。

一　岩崎本古訓の形容詞

巻二十二Ⓐ平安中期末点(34 語)

1 アシ(惡)2 アシ(非)3 アマネシ(周)4 アラシ(暴)5 イササケシ(少、小)

6イツクシ(憲)7イトナシ(靡盬)　8ウルハシ(斷金)　9オソシ(晏)　10カシコシ(畏)

11 カタマシ(釬)12 カナシ(悲)13 カヘカヘシ(反覆)14 カルカルシ(軽)

15 サカシ(賢)16 サカナシ(不良) 17 スミヤケシ(急) 18 タケシ(武)

19 チヒサシ(少)20 ツタナシ(不忠)21 トシ(利、鋒)22 トモシ(乏)23 トヲシ(遐)

24 ハヤシ(早)25 ヒサシ(久)26 ニヒシ(新)27 ムナシ(空)28 メグシ(愛)

29 ヨシ(是)30(好・良)31 ワカシ(少幼)32 ワイワイシ(辨才)33 ヰヤナシ(不禮)

34 ヲサナシ(不賢)

巻二十二Ⓑ院政期(25 語)

1 アシ(惡)2 アシ(非) 3 アマネシ(周)4 イササケシ(少、小) 5 ウルハシ(斷金)

6 オソシ(晏)7 カシコシ(畏)8 カタマシ(釬) 9 カナシ(悲)10 カヘカヘシ(反覆)

11 サカシ(賢)12 スミヤケシ(急) 13 タケシ(武) 14 チヒサシ(少) 15 ツタナシ(不忠)

16 トシ(利)17 ニヒシ(新) 18 ムナシ(空) 19 メグシ(愛) 20 ヨシ(是)21 ヨシ(好・良)

22 ワカシ(少幼)23 ワイワイシ(辨才) 24 ヰヤナシ(不禮) 25 ヲサナシ(不賢)
上記の 25 語はⒶ平安中期末点の古訓の形容詞と一致する

巻二十二Ⓒ室町時代(44 語)
Ⓐ平安中期末点、Ⓑ院政期点になく、Ⓒ室町時代のみにある語に下線を引く
1 アカシ(赤) 2 アシ(惡)3 アシ(非) 4 アツシ(敦、厚) 5 アマネシ(周) 6 アヤフシ(危)
7 イササケシ(少、小) 8 イトマナシ(靡盬) 9 ウタカハシ(疑) 10 オソシ(晩)
11 オモシ(重)12 カシコシ(賢愚) 13 カタシ(難) 14 カタマシ(釬、佞)
15 カヘカヘシ(反覆)16 カルカルシ(軽) 17 クヤシ(悔) 18 サカシ(賢) 19 シケシ(繁)
20 シロシ(白) 21 スクナシ(少) 22 ススシ(冷) 23 スミヤケシ(急) 24 タカシ(高)
25 タフトシ(貴)26 タヤスシ(輙)27 チヒサシ(小) 28 トモシ(乏) 29 トオシ(達)
30 トヲキヲソシ(急緩、遐邇)31 ハヤシ(早)32 フカシ(深)33 ナシ(無) 34 ニハシ(新)
35 マツシ(貧)36 ムツマシ(斷金)37 ムナシ(空)38 メツラシ(珎)39 ヨシ(是)
40 ヨシ(好・良)41 ワカシ(稚) 42 ワイワイシ(辨才) 43 ヤスシ(安)44 ヰヤナシ(不禮)

巻二十四Ⓐ平安中期末点(24 語)
1 アシ(惡)2 アシ(暴)3 アシ(毒)4 アマネシ(溥)5 アヤフシ(殆)6 アヤシ(奇)
7 イノチナカシ(壽)8 ウツムナシ(定、決)9 ウルハシ(善)10 オモシロシ(伎)
11 カウハシ(氣) 12 キヨシ(赤)13 クサシ(臭)14 サカシ(賢、哲)15 タタシ(正)
16 チヒサシ(小)17 トシ(疾)18 ナシ(不在)19 フカシ(幽) 20 フルシ(陳)21 ニヒシ(新)
22 ワツラハシ(煩労)23 ヰヤナシ(無禮)24 ユルシ(順)

巻二十四Ⓑ院政期(24 語)
1 アシ(惡)2 アシ(暴)3 アシ(毒)4 アマネシ(溥) 5 アヤフシ(殆) 6 アヤシ(奇)
7 イノチナカシ(壽)8 ウツムナシ(定、決)9 ウルハシ(善)10 オモシロシ(伎)
11 カウハシ(氣) 12 キヨシ(赤)13 クサシ(臭)14 サカシ(賢、哲)15 タタシ(正)
16 チヒサシ(小)17 トシ(疾)18 ナシ(不在)19 フカシ(幽)20 フルシ(陳)
21 ニヒシ(新)22 ワツラハシ(煩労)23 ヰヤナシ(無禮)24 ユルシ(順)

巻二十四Ⓒ室町時代(17 語)
1 アラシ(暴) 2 アヤフシ(殆) 3 アヤシ(奇) 4 イノチナカシ(壽) 5 ウツムナ(タ)シ(定)
6 ウタカハシ(決) 7 ウルハシ(善) 8 オモシロシ(伎) 9 サカシ(賢) 10 タカシ(高)
11 チカシ(近) 12 チヒサシ(小)13 ツハヒラケシ(曲)14 フルシ(陳)15 ムツマシ(婚姻)16 ワツラハシ(煩労) 17 ワカシ(幼)

二　図書寮本古訓の形容詞

巻二十二(35 語)

1 アシ(惡) 2 アツシ(篤、就) 3 アマネシ(周) 4 アヤフシ(危) 5 イササケシ(少)
6 イサヲシ(忠) 7 イツクシ(憲) 8 イトナシ(摩監) 9 オ(ヲ)ソシ(晩、晏)
10 カシコシ(畏)11 カタマシ(釬、佞)12 カナシ(悲)13 カヘカヘシ(反覆)
14 キラキラシ(端麗) 15 サカシ(賢)16 サカナシ(不良)17 スクナシ(鮮
)18 タハヤスシ(輒)19 チヒサシ(少)20 ツタナシ(不忠)21 トシ(利) 22 トオクチカシ
(遐邇) 23 トモシ(乏) 24 ナシ(無) 25 ニヒシ(新)26 ムツマシ(斷金)27 ムナシ(空)
28 メクシ(愛)29 ヤスシ(安)30 ヨシ(好)31 ワカシ(稚)32 ワカシ(少幼)
33 ヰヤナシ(不礼)34 ヲサナシ(不賢) 35 ヲサヲサシ(軏制)

巻二十四(25 語)

1 アシ(惡)2 アシ(暴)3 アシ(毒) 4 アラシ(暴)5 アヤシ(奇) 6 イノチナカシ(壽)
7 ウツナシ(定)8 ウツムマシ(決)9 ウルハシ(善)10 オソシ(晩)11 オモシロシ(伎)
12 カウハシ(氣)13 カタシ(固)14 キヨシ(赤)15 クサシ(臭)16 サカシ(賢、哲)
17 タタシ(正、匡)18 チカシ(近) 19 ツハヒラケシ(曲)20 トシ(疾)21 ナシ(不在)
22 フカシ(幽))23 ニヒシ(新)24 ワカシ(幼) 25 ヰヤナシ(無禮)

三　兼右本古訓の形容詞

巻二十二(63 語)

1 アカシ(赤)2 アシ(惡)3 アシ(非)4 アツシ(篤、敦、厚)5 アヤフシ(危)6 アマネシ(周)
7 イサヲシ(忠)8 イササケシ(少)9 イツクシ(憲)10 イトマナシ(靡盬)
11 イヤナシ(不礼)12 ウタカハシ(疑)13 ウツクシ(慈)14 ウルハシ(斷金)
15 オ(ヲ)ソシ(晏、晩)16 オモシ(重)17 カシコシ(畏)18 カシコシ(賢愚、賢哲)
19 カタシ(難)20 カタマシ(釬、佞)21 カナシ(悲)22 カヘカハシ(反覆)
23 カルカルシ(軽)24 カロカロシ(軽)25 キラキラシ(端麗)26 サカシ(賢、賢哲)
27 サカナシ(不良) 28 サムシ(薄)29 シケシ(繁)30 シロシ(白)31 スクナシ(少)
32 スコシ(小)33 スサマシ(冷)34 タフトシ(貴)35 タカシ(高、達)36 タケシ(武)
37 タヤスシ(輒) 38 チヒサシ(少、小)39 ツタナシ(不忠)40 トキオソキ(急緩)
41 トヲクチカシ(遐迩)42 トシ(利、鋒)43 トモシ(乏)44 マツシ(貧)45 ムツマシ(斷金)
46 メツラシ(珎)47 ムナシ(空)48 メクシ(愛)49 ナシ(無、无)50 ニヒシ(新)
51 ニハシ(新)52 ハヤシ(早)53 ヒサシ(久)54 フカシ(深)55 ヤスシ(安)
56 ユルシ(緩)57 ヨシ(良、好)58 ヨシ(是)59 ワカシ(幼、少幼)
60 ワイワイシ(辨才)61 ワカシ(稚)62 ヲサナシ(不賢)63 ヲサヲサシ(軏制)

巻二十四(33 語)

1 アシ(惡)2 アシ(暴)3 アシ(毒)4 アマネシ(溥、浹)5 アラシ(暴) 6 アヤフシ(殆)
7 イノチナカシ(壽)8 イヤナシ(无礼)9 ウタカハシ(決)10 ウツムナ(タ)シ(定)
11 ウツムマシ(決)12 ウルハシ(善)13 オモシロシ(伎)14 カウハシ(氣)15 カタシ(固)
16 キヨシ(赤)17 クサシ(臭)18 サカシ(哲)19 タカシ(高)20 タタシ(正)21 チカシ(近)
22 チヒサシ(小)23 トシ(疾)24 ツハヒラケシ(曲)25 フカシ(幽)26 フルシ(陳)
27 ムツマシ(婚姻)28 ナシ(無)29 ナシ(不在)30 ニヒシ(新)31 ユルシ(順)
32 ワカシ(幼)33 ワツラハシ(煩労)

四　寛文九年版本古訓の形容詞

巻二十二(50 語)

1 アシ(惡)2 アツシ(篤、敦)3 アマネシ(周)4 イサヲシ(忠)5 イササケシ(少)6 イツクシ(憲)7 イトマナシ(靡盬)8 ウタカハシ(疑)9 ウツクシ(愛)10 カシコシ(畏)11 カシコシ(賢愚)12 カタシ(難)13 カタマシ(釿、俟)14 カナシ(悲)15 カヘカハシ(反覆)
16 カルカルシ(軽)17 キラキラシ(端麗)18 サカシ(賢、賢哲)19 サカ(シ)ナシ(不良)
20 サムシ(薄)21 シケシ(繁)22 スクナシ(少、鮮)23 スコシ(小)24 スサマシ(冷)
25 タケシ(武)26 タヤスシ(輙) 27 タハヤスシ(輙)28 ツタナシ(不忠)
29 トキオソキ(急緩)30 トホクチカシ(遐迩)31 トシ(利)32 トシ(急)33 トモシ(乏)
34 マツシ(貧)35 ムツマシ(斷金) 36 メツラシ(珎)37 ムナシ(空)38 モロシ(危)
39 ナシ(無)40 ニヒシ(新)41 ハヤシ(早)42 ヒサシ(久)43 ヤスシ(安)44 ヨシ(良、好)
45 ワカシ(幼)46 ワイワイシ(辨才)47 ワカシ(稚)48 ヲサナシ(不賢)
49 ヲサヲサシ(軋制)50 ヲソシ(晏、晩)

巻二十四(26 語)

1 アシ(毒)2 アマネシ(溥)3 アラシ(暴)4 アヤフシ(殆)5 イノチナカシ(壽)
6 ウタカハシ(決)7 ウツクシ(恩澤)8 ウツ(ム)ナシ(定)9 ウツムマシ(決)10 ウルハシ(善)11 オモシロシ(伎)12 カウハシ(氣)13 カタシ(固)14 キヨシ(赤)15 クサシ(臭)
16 サカシ(哲)17 タカシ(高)18 タタシ(正)19 チカシ(近)20 トシ(疾) 21 フカシ(幽)
22 ナシ(無)23 ナシ(不在)24 ニヒシ(新) 25 ワカシ(幼)26 ワツラハシ(煩労)

参考資料 4：四種の伝本における形容詞にて附訓した漢文箇所

岩崎本『日本書紀』巻二十二

注：①岩崎本古訓形容詞の収集は、築島・石塚(1978)の移点本を利用し、岩崎本の複製本を合わせて参照した。

②漢文原文及びそれと対応する和訓の行数はアラビア数字で示す。

③形容詞で読む漢字に下線を引く。

④漢文同一箇所に対し、三種の加点を比較するために、形容詞和訓ではないものを表に示す。

番号	所在	原文	和訓			その他
			Ⓐ平安中期	Ⓑ院政期	Ⓒ室町時代	
1	42	越國獻白鹿一頭			シロキ	合符無
2	58	除是二神何亦有畏乎	カシコ	カシコキ		
3	85	其臨大事而不遂矣甚悲乎	シ	シキカナ		
4	104	皇太子親肇作憲_法十七條	イツクシキ		ノリ	合符Ⓒ
5	104	以和爲貴無忤爲宗			タフトシ	
6	105	人皆有黨亦少達者			シ	
7	108	人鮮尤惡能教從之	モノ			補読アシキ
8	113	上不禮而下非齊	ナイ	トキ	ナキ	補読
9	118	乏_者之訴似水投石	ヒト		トモシキモノ	合符Ⓒ
10	119	貧民則不知所由			マツシキ	
11	120	懲惡勸善古之良典			アシキ	
12	120	懲惡勸善古之良_典	ノリ	ノリ	ヨキ	合符Ⓒ
13	121	其諂詐者則爲覆國ー家之利_器	ト	トキ		合符Ⓒ
14	122	爲絶人ー民之鋒劒	トキ		スクレタルツルキ	合符無
15	122	佞_媚者對上則好說下過	カタミコフ		カタマシク	合符Ⓒ
16	125	其賢ー哲任官頌音則起	サカシヒト			合符Ⓐ
17	125	奸_者有官禍亂則繁	カタマキ	カタマシ	キヒト	合符Ⓒ
18	125	奸者有官禍亂則繁			シ	
19	126	世少生知剋念作聖			スクナシ	

番号	所在	原文	和訓			その他
			Ⓐ平安中期	Ⓑ院政期	Ⓒ室町時代	
20	126	事無大少得人必治			ク	
21	126	事無大_少得人必治	イサヽケキ	サヽケキ	イサヽケト	合符Ⓒ
22	127	時無急緩遇賢自寛			ク	
23	127	時無急_緩遇賢自寛			トキヲソキ	合符Ⓒ
24	127	時無急緩遇賢自寛			サカシヒト	
25	127	因此國家永久社稷勿危			アヤウカラ	
26	129	群卿百寮早朝晏退	ハ			
27	129	群卿百寮早朝晏退	オ	オ		
28	129	公事靡－鹽終日難盡	イトナシ		イトマナシ	合符Ⓐ
29	129	公事靡鹽終日難盡			シ	
30	130	是以遲朝不逮于**急**	スミヤ	スミヤケキ	ナルニ	
31	130	早退必事不盡			ヤク	
32	131	其善惡成敗要在于信	サ		アシキ	
33	134	彼是則我_非我是則彼非	アシム	アシム	アシ	合符Ⓒ
34	134	彼是則我非我是則彼_非			右：アシンス 左：アシ	合符Ⓒ
35	135	是非之理詎能可定	ヨク	ヨク	ヨサ	
36	135	是非之理詎能可定	アシキ	アシキ	アシサノ	
37	136	相共賢_愚如鐶无端			カシコク	合符Ⓒ
38	140	國非二君民無兩主			シ	
39	147	五百之乃今遇賢	サカシヒト			
40	148	其不得賢聖何以治國			サカシキ人	
41	152	使民以時古之良典			ヨキ	
42	155	少_事是輕不可必衆	イサヽケキ			合符Ⓒ
43	156	少事是輕不可必衆			カルくシク	
44	156	唯逮論大事若疑有失			ウタカハシキトキ	
45	179	今朕爲造丈六佛以求好佛像	ヨ	キ		
46	191	敦禮神祇周祠山川			アツク	
47	191	敦禮神祇周祠山川	ア	ア	マ	
48	203	爲唐客更造新_館於難波…	ニヒシキ	ニヒシキ		合符Ⓒ
49	206	迎客等于江口安置新館			ニハシキ	合符無
50	212	雖有失書之罪輒不可罪			タヤスク	

番号	所在	原文	和訓			その他
			Ⓐ平安中期	Ⓑ院政期	Ⓒ室町時代	
51	213	其大國客等聞之亦不－良	サカナシ			合符Ⓐ
52	223	愛育之情無隔遐邇			シ	
53	223	愛育之情無隔遐_邇	ト		トヲクチカキ	合符Ⓒ
54	224	深－氣至誠達脩朝貢			キ	合符Ⓐ
55	224	深氣至誠達脩朝貢			ク	
56	237	裴世清等至久_憶方解	キ			合符Ⓒ
57	237	季－秋－薄－冷尊何如	薄：ヤウヤウ		冷：ス	合符Ⓒ 四字引合
58	249	忽逢暴風漂蕩海中	アラキ		アカラシマカセ	
59	319	覆飢者而言安臥也	ヤスラ	ヤスラ	ヤスク	Ⓒ形容詞
60	330	開以見屍骨既空	ムナシクナリ	ムナシクナリタリ	ムナシ	
61	357	卽化少魚以挾樹枝	チヒサイ	チヒサキ		
62	366	時倭漢坂上直樹柱勝之太高			シ	
63	367	十二月庚寅朔天有赤氣			アカ	
64	373	如失愛_兒而鹽酢之味在口不嘗	メクキ	メクキ	ミノ	合符Ⓒ
65	374	少－幼如亡慈父母…	ワカイ	ワカイ		合符Ⓐ
66	383	我雖異國心在斷－金…	ウルハシキ	ウルハシキ	ムツマシキ	合符Ⓐ
67	392	且大觀頂幡一具小_幡十二條			チヒサキハタ	合符Ⓒ
68	398	大唐國者法式備定之珎－國也			メツラシキ	合符Ⓒ
69	401	後擊之不晩也	シ		ヲソカラ	
70	405	百濟是多反－覆之國	カヘヽヽシキ	カへくシキ	カへくシ	合符Ⓐ
71	410	任那小_國天皇附庸	キ	キ	トモ	合符Ⓒ
72	431	悔乎早遣師矣			クヤシキ	
73	431	悔乎早遣師矣			ク	
74	436	曷無任那之迎船			キ	
75	442	何無讖忌輒犯惡－逆			アシキワサ（サカ）	
76	444	若事實者重罪之			オモク	

番号	所在	原文	和訓			その他
			Ⓐ平安中期	Ⓑ院政期	Ⓒ室町時代	
77	445	則惡－逆僧及諸僧尼並將罪	アシキワサセル	ワシキル	アシキワサノ	合符Ⓐ
78	448	然我王聞日本天皇之賢－哲	サカシクマシマス	サカシクマシマスコト		合符Ⓐ
79	450	以僧尼未習法律輒犯惡－逆			アシキワサ	合符Ⓒ
80	451	仰願其除惡逆者以外僧尼	ワサセル	ワサキル	アシキ	合符無
81	468	豈獨朕不－賢耶大臣亦不忠	ヲササキノミナラム	ヲササキノミナラム		合符Ⓐ
82	468	豈獨朕不－賢耶大臣亦不忠	ツタナクナリナ	ツタナクナリナ		合符無
83	474	性有武畧亦有辨才	タ	タケキ		合符無
84	475	性有武略亦有辨才	ワイヽヽシコト	ワイヽヽシコト	ワイくシキカト	合符無
85	488	本非輒言恆之所重			タヤスク	
86	489	故汝愼以察之不可輕言	カロカロ		シク	
87	490	汝肝稚之若雖心望而勿諠言			ワカシ	
88	497	其爲朕興陵以勿厚葬			ク	

岩崎本『日本書紀』巻二十四

番号	所在	原文	和訓			その他
			Ⓐ平安中期	Ⓑ院政期	Ⓒ室町時代	
1	20	塞上恆作－惡之	アシキワサ	アシキワサス		合符Ⓐ
2	24	有高_名之人卌餘			キ	合符Ⓒ
3	69	遂雨五日溥潤天下	アマネク	アマネク		
4	110	蘇我臣專擅國政多行－無－禮	ヰヤナキワサ	ヰヤナキワサス		合符ⒶⒷ
5	137	小蟲覆水其蟲口黑而身白	キ	キ		合符無
6	139	大_小魚臭如夏爛死			チキ	合符Ⓒ
7	148	亦無臭氣	クサ	クサキ		合符無
8	176	以一身之故豈煩－勞万民	ワツラハ	ワツラハ	シ	合符ⒶⒷ

番号	所在	原文	和訓			その他
			Ⓐ平安中期	Ⓑ院政期	Ⓒ室町時代	
9	189	吾起兵伐入鹿者其勝定之	ウツムナシ	ウツムナシ	ウツムナ/タシ	
10	191	五色幡蓋種種伎－樂	オモシロキオト	オモシロキヲト	コエ	合符Ⓐ
11	196	入鹿極甚愚癡專行－暴－惡	アシキワサ	アシキワサス	アライワサオコナフ	合符ⒶⒷ
12	196	儞之身命不亦殆乎	ア	ア	ラ	
13	206	中臣鎌子連曾善於輕皇子	ウルハシ	ウルハシ		
14	208	深識中臣鎌子連之意氣高_逸	スクレ	スクレ	タク	合符Ⓒ
15	209	淨掃別殿高鋪新蓐	ニヒシキ	ニヒシキ		
16	213	中臣鎌子連爲人忠－正	タヽシク	タヽシク		合符Ⓐ
17	214	失君臣長－幼之序…	コノカミコトヽ	コノカミオトヽ	ヲイタルワカキ	合符Ⓐ
18	216	而求可立功－名哲－主	サカシキ	サカシキ	キミ	合符Ⓒ
19	217	踈然未獲展其幽－抱	フカキオモヒ	フカキオモ		合符ⒶⒷ
20	225	而成婚－姻之眤	ムロシフト	ムロシフトノ	ムツマシキ	合符ⒶⒷ
21	227	中大兄聞而大悅曲從所議	ツハヒラ	ツハヒラ	ツマヒラケニ	
22	232	奉以赤心更無所忌	キヨキ	キヨキ		
23	239	總言不知且疑毒物	アシキ	アシキ		
24	240	煮而食之大有氣_味	カウハシキ	カウハシキ	アチハヒ	合符Ⓒ
25	240	明日往見都不－在焉	ナシ	ナシ		合符ⒶⒷ
26	241	由喫菌羹無病而壽	シ	シ		
27	267	陳_酒陳_菜六畜於路側	フルキ	フルキ	フルサケフルナ	合符Ⓒ
28	267	而使呼曰新富入來	ニヒシキ	ニヒシキ	トミ	合符無
29	293	種々奇_術不可殫究	ア	ア		合符Ⓒ
30	297	知得志欲歸之意與毒殺之	アシキモノ	アシキモノ	アシモノ	
31	313	而子麻呂等不來流汗浹身	アマネク	アマネク	ウル	
32	314	恐近天皇不覺流汗	ツケル	ツケル	チカクハヘル	
33	335	立俟其誅決矣	ウツムナシ	ウツムマシ	ウタカハシ	
34	338	船史惠尺卽疾取所燒國記	トク	トク		

番号	所在	原文	和訓			その他
			Ⓐ平安中期	Ⓑ院政期	Ⓒ室町時代	
35	347	此卽上宮王等性_順	ヒトヽナリユルクシ	ヒトヽナリユルクシ		合符Ⓒ

図書寮本『日本書紀』巻二十二

注：形容詞和訓の収集は、『宮内庁書陵部影印集成・日本書紀』を利用し、頁数及び行数は原書に従い、アラビア数字で示す。

番号	所在	原文	和訓	その他
1	15 ウ－6	恣_色端麗…	キラくシク	踊り字
2	15 ウ－6	進_止軏_制	ヲサくシ	
3	19 オ－7	除是二神何亦有畏乎	カシコキ	
4	21 オ－6	其臨大事而不遂矣甚悲乎	シ	略訓
5	22 オ－5	皇太子親肇作憲法十七條	イツクシキ	左訓
6	22 オ－8	篤敬三寶	ア	略訓
7	22 ウ－2	人鮮尤惡能教從之	仍クナシ	
8	22 ウ－2	人鮮尤惡能教從之	アシキモノ	
9	22 ウ－8	上不礼而下非齊	ナイトキ	合符無、略訓
10	23 オ－4	乏者之訴似水投石	トモシキヒト	合符無
11	23 オ－8	其諂詐者則爲覆國家之利器	トキ	
12	23 オ－8	亦佞媚者對上則好說下過	カタマシク	
13	23 ウ－2	其如此人皆无忠於君	イサヲシキ	
14	23 ウ－3	其賢哲任官頌音則	サカシキヒト	
15	23 ウ－4	奸者有官禍亂則繁	カタマシキ人	漢字訓
16	23 ウ－5	事無大少得人必治	イサヽケト	
17	23 ウ－5	時無急緩過賢自寬	ナク	過：誤字
18	23 ウ－6	因此國－家永久社－稷勿危	カラ仍	
19	23 ウ－7	群卿百寮早朝晏退	ヲソク	
20	23 ウ－8	公事摩鎖終日難盡	イトナシ	摩：誤字
21	25 オ－2	五百之乃今遇賢	サカシヒト	
22	25 ウ－2	少事是輕不可必衆	イサヽケク	

番号	所在	原文	和訓	その他
23	27オ－2	以求好佛像	ヨキ	
24	27ウ－6	就禮神祇周祠山川	アツク	就：誤字
25	27ウ－6	就禮神祇周祠山川	アマ子ク	
26	28ウ－3	爲唐客更造新館於難波…	ニヒシキ	
27	29オ－4	雖有失書之罪輒不可罪	タハヤスク	
28	29オ－5	其大國客等聞之亦不良	サカナシ	合符無
29	29ウ－7	愛育之情無隔遐迩	トホクチカキ	合符無
30	35ウ－8	覆飢者而言安臥也	ヤスク	
31	36ウ－3	乃開以見屍骨既空	ムナシクナリタリ	
32	38オ－7	卽化少魚以挾樹枝	チヒサイイヲ	
33	39オ－7	如失愛兒而鹽酢之味在口不嘗	メクイ	
34	39オ－8	少－幼如亡慈父母…	ワカイ	
35	40オ－2	我雖異國心在斷金…	ムツマシキ	合符無
36	41オ－5	後擊之不晩也	オソカラ	
37	41オ－8	百濟是多反覆之國	かへヽ	合符無
38	44オ－4	然我王聞日本天皇之賢哲…	サカシキ	
39	45ウ－1	豈獨朕不賢耶大臣亦不忠	右：ヲサナカラ　左：ヲサナ	合符無
40	45ウ－2	豈獨朕不賢耶大臣亦不忠	ツタナカラム	合符無
41	46ウ－7	汝肝稚之	ワカシ	

図書寮本『日本書紀』巻二十四

番号	所在	原文	和訓	その他
1	12オ－3	百濟國主謂臣言塞上恆作惡之	アシキワサス	
2	17ウ－3	蘇我臣專擅國政多行無禮	ヰヤナキワサ	
3	19ウ－7	亦無臭氣	クサキ	
4	21ウ－5	夫損身固國不亦丈夫者歟	カタクセム	
5	22オ－8	吾起兵伐入鹿者其勝定之	ウツナシ	
6	22ウ－2	五色幡蓋種々伎樂	オモシロイコヱ	合符無
7	22ウ－7	入鹿極甚愚癡專行暴惡	アライワサ	合符無
8	23ウ－1	中臣鎌子連曾善於輕皇子	ウルハシ	

番号	所在	原文	和訓	その他
9	23 ウ－4	淨掃別殿高鋪新蘘(褥)	ニヒシキ	蘘：誤字
10	23 ウ－8	中臣鎌子連爲人恵正	タタシ	恵：忠
11	23 ウ－8	爲人恵正有匡濟心	タタシ	
12	24 オ－1	失君臣長幼之序…	オイタルワカキ	合符無
13	24 オ－3	而求可立功－名哲－主	サカシキヽミ	
14	24 オ－4	踈然未獲展其幽抱	ワカイココロ	合符無
15	24 ウ－5	中大兄聞而大悦曲從所議	ツハヒラケ	
16	25 オ－1	以我奉進亦復不晩	オソカラ	
17	25 オ－2	奉以赤心更無所忌	キヨキ	
18	25 ウ－1	總言不知且疑毒物	アシキ	
19	25 ウ－2	煮而食之大有氣味	カウハシキハヒ	合符無
20	25 ウ－3	明日往見都不－在焉	ナシ	
21	25 ウ－4	由喫菌羹無病而壽	イノチナカ	
22	27 オ－6	而使呼曰新富入來	ニヒシキ	
23	28 ウ－7	種々奇術不可殫究	ア	
24	29 オ－3	知得志欲歸之意與毒殺之	アシキモノ	
25	30 オ－4	恐近天皇不覺流汗	チカクハヘル	
26	31 ウ－1	立俟其誅決矣	ウツムマシ	
27	31 ウ－4	船史惠尺卽疾取所燒國記	トク	

兼右本『日本書紀』巻二十二

注：形容詞和訓の収集は、天理図書館所蔵する複製本を利用し、頁数及び行数は原書に従い、頁数を漢数字で行数をアラビア数字で示す。

番号	所在	原文	和訓	その他
1	一オ－4	幼曰額田部皇女…	ワカクマシマストキ	
2	一オ－5	恣－色端－麗…	キラくシク	
3	一オ－5	進－止軏－制	ヲサくシ	
4	三ウ－8	越國獻白_鹿一頭。	シロキカセキ	
5	五オ－2	除是二神何亦有畏乎	カシコキ乁	
6	六ウ－7	其臨大事而不遂矣甚悲乎	シキ	
7	八オ－4	皇太子親肇作憲_法十七條	イツクシキノリ	
8	八オ－4	以和爲貴無忤爲宗	タフトシ	

番号	所在	原文	和訓	その他
9	八オ－5	人皆有黨亦少達_者	スクナシ	
10	八オ－7	篤敬三－寶	アツク	
11	八ウ－1	人鮮尤_惡能教從之	右：ハナハタアシキモノ 左：ケヤケレトモ	
12	八ウ－7	上不礼而下非齊	イヤナヰトキ	
13	九オ－5	乏_者之訴似水投石	右：トモシキモノ 左：ヒト	
14	九オ－5	貧_民則不知所由	マツシキヲホンタカラ	
15	九オ－6	懲惡勸善古之良典	右：アシキ　　左：アシキ𠆢	
16	九オ－7	懲惡勸善古之良_典	右：ヨキノリ　左：ノリナリ	
17	九オ－8	其諂詐者則爲覆國家之利_器	トキウツハモノ	
18	九ウ－1	爲絶人－民之鋒_劒	右：スクレタルツルキ　左：トキツルキ	
19	九ウ－1	亦佞_媚者對上則好說下過	右：カタマシクコフル　左：カタミ	
20	九ウ－2	其如此人皆无忠於君	右：イサヲシサ　左：イサヲシキ𠆢	
21	九ウ－4	其賢－哲任官頌音則	右：サカシヒト　左：カシコキヒト	
22	九ウ－5	奸_者有官禍亂則繁	カタマシキヒト	
23	九ウ－5	奸_者有官禍亂則繁	シケシ	
24	九ウ－5	世少生知剋念作聖	スクナシ	
25	九ウ－6	事無大_少得人必治	右：ヲホイナリイサヽケ 左：イサヽケト	
26	九ウ－6	事無大_少得人必治	ク	
27	九ウ－6	時無急_緩過賢自寬	右：トキヲソキ 左：スミヤカニユルイ𠆢	
28	九ウ－6	時無急_緩過賢自寬	サカシヒト	
29	九ウ－7	因此國－家永_久社_稷勿危	アヤウカラ	
30	十オ－1	群卿百寮早_朝晏退	ハヤクマイリ	
31	十オ－1	群卿百寮早朝晏_退	オソクマカチヨ	
32	十オ－1	公_事靡盬終日難盡	イトマナシ	合符無
33	十オ－1	公_事靡盬終日難盡	カタシ	
34	十オ－2	是以遲_朝不逮于急	ヲソクマイルトキ	
35	十オ－2	早_退必事不盡	ハヤクマカツルトキ	
36	十オ－6	彼是則我_非我是則彼非	右：アシンス　左：アシ	

番号	所在	原文	和訓	その他
37	十オ－7	彼是則我非我是則彼_非	右：アシンス　左：アシ	
38	十オ－8	是非之理詎能可定	右：ヨク　　左：ヨサ	
39	十オ－8	是非之理詎能可定	右：アシキ　左：アシサ	
40	十オ－8	相共賢_愚如鐶无端	カシコクオロカナル	
41	十オ－8	相共賢_愚如鐶无端	ナキ	
42	十ウ－5	國非二君民無兩主	シ	
43	十一オ－4	五百之乃今遇賢	サカシヒト	
44	十一オ－5	千載以難待一聖	シ	
45	十一オ－5	其不得賢聖何以治國	サカシキ人	
46	十一ウ－1	使民以時古之良_典	ヨキノリナリ	
47	十一ウ－5	少_事是輕不可必衆	イサヽケキ乁	
48	十一ウ－5	少_事是輕不可必衆	カルくシク	
49	十一ウ－5	唯逮論大事若疑有失	ウタカハシキトキ	
50	十三オ－6	以求好佛像	ヨキ	
51	十四オ－2	敦禮神祇周祠山川	アツク	
52	十四オ－2	敦禮神祇周祠山川	アマ子ク	
53	十四ウ－8	爲唐客更造新_館於難波…	ニヒシキムロツキ	
54	十五オ－3	迎客等于江口安置新館	ニハシキ	合符無
55	十五ウ－2	雖有失書之罪輒不可罪	タヤスク	
56	十五ウ－3	其大國客等聞之亦不－良	サカナシ	
57	十六オ－5	愛育之情無隔遐_迩	シ	
58	十六オ－5	愛育之情無隔遐_迩	トヲクチカキ	
59	十六オ－6	深_氣至誠達脩朝貢	キ	
60	十六オ－7	深氣至誠達脩朝貢	ク	
61	十七オ－4	裴世清等至久_憶方解	ヒサシクヲモイ	
62	一七オ－4	季－秋－薄－冷尊何如	右：コノコロ 左：ナカツキサムクスサマシ	四字引合
63	二二ウ－3	覆飢者而言安_臥也	右：ヤスラカフセレ　左：ヤスク	
64	二三オ－7	乃開以見屍骨既空	右：ムナシ　左：ムナシクナリタリ	
65	二五オ－3	卽化少_魚以挾樹枝	チヒサキイヲ	
66	二五ウ－4	時倭漢坂上直樹柱勝之太高	シ	
67	二五ウ－6	十二月庚寅朔天有赤_氣	アカシルシ	
68	二六オ－4	如失愛_兒而鹽酢之味在口不嘗	愛：メクミ	

番号	所在	原文	和訓	その他
69	二六オ－5	少－幼如亡慈父母…	ワカイ	
70	二六オ－5	少－幼如亡慈_父_母…	ウツクシミカソイロハ	
71	二六ウ－7	我雖異國心在斷－金…	右：ムツマシキ　左：ウルハシキ	
72	二七ウ－2	且大觀頂幡一具小_幡十二條	チヒサキハタ	
73	二七ウ－8	大唐國者法式備定之珎_國也	珎：メツラシキ	
74	二八オ－3	後擊之不晩也。	ヲソカラ	
75	二八オ－8	百濟是多反_覆之國	カヘクシキ	
76	二八ウ－4	任那小_國天皇附庸	スコシキクニナレトモ	
77	三十オ－3	悔乎早遣師矣	クヤシキ	
78	三十オ－4	悔乎早遣師矣	ク	
79	三十ウ－1	曷無任那之迎船	キ	
80	三十ウ－8	何無讖忌輒犯惡_逆	アシキワサ	
81	三一オ－1	若事實者重罪之	オモク	
82	三一オ－2	則惡_逆僧及諸僧尼並將罪	アシキワサ	
83	三一オ－6	然我王聞日本天皇之賢_哲…	右：サカシクマシマス　左：サカシキ	
84	三一オ－8	以僧尼未習法律輒犯惡_逆	アシキワサ	
85	三一ウ－1	仰願其除惡－逆者以外	右：アシキモノ 左：アシキワサセル/ワサナラン	
86	三二ウ－3	豈獨朕不－賢耶大臣亦不忠	右：ヲサナキノミナランヤ 左：ヲサナカラス	
87	三二ウ－4	豈獨朕不－賢耶大臣亦不－忠	ツタナカラン	
88	三二ウ－4	是後葉之惡_名	アシキナラントノタマイ	
89	三三オ－2	性有武略亦有辨才	右：タケキハサ　左：略タハカリ	合符無
90	三三オ－2	性有武略亦有辨_才	右：ワイくシキカト　左：ワイマヘ	
91	三三ウ－8	本非輒言恆之所重	タヤスク	
92	三四オ－1	故汝愼以察之不可輕_言	右：カロくシクイフ　右：輒タヤスク	
93	三四オ－2	汝肝稚之若雖心望而勿諠言	ワカシ	
94	三四ウ－1	其爲朕興陵以勿厚_葬	ク	

兼右本『日本書紀』巻二十四

番号	所在	原文	和訓	その他
1	二オ－3	百濟國主謂臣言塞上恆作_惡之	アシキワサ	
2	ニオ－8	有高_名之人卌餘	タカキナ	
3	五オ－7	遂雨五日溥潤天下	アマ子ク	
4	八オ－3	蘇我臣專擅國政多行－无－礼	イヤナキワサス	
5	九オ－3	丁未自權宮移幸飛鳥板蓋新_宮	ニヒ	略訓
6	十オ－2	大_小魚臭如夏爛死	チキ	略訓
7	十ウ－3	亦無臭_氣	クサキカ	
8	十二オ－8	以一身之故豈煩_勞万民	ワツラハシイタハランヤ	
9	十二ウ－2	夫損身固國不亦丈夫者歟	カタクセン	
10	十三オ－6	吾起兵伐入鹿者其勝定之	右：ウツムナシ　左：ウツムタシ	
11	十三ウ－1	五色幡蓋種種伎_樂	オモシロキコエ	
12	十三ウ－6	入鹿極甚愚癡專行_暴_惡	右：アライワサオコナフ 左：アシキワサス	
13	十三ウ－6	儞之身命不亦殆乎	アヤウカラ	
14	十四ウ－1	中臣鎌子連曾善於輕皇子	ウルハシ	
15	十四ウ－2	深識中臣鎌子連之意氣高_逸	タカクスクレ	
16	十四ウ－4	淨掃別殿高鋪新蓐	ニヒシキ	
17	十四ウ－5	殊奉恩_澤過前所望	ミウルクアシミ	
18	十四ウ－8	中臣鎌子連爲人忠－正	タヽシク	
19	十五オ－1	失君臣長_幼之序…	右：ヲイタルワカキ 左：コノカミオトヽ	右：形容詞
20	十五オ－3	而求可立功－名哲_主	サカシキキミ	
21	十五オ－4	踈然未獲展其幽_抱	右：フカキオモヒ　左：コヽロ	
22	十五ウ－4	而成婚－姻之眤	右：ムツマシキ　左：ムロシフトノ	右：形容詞
23	十五ウ－6	中大兄聞而大悅曲從所議	ツハヒラケ	
24	十六オ－4	奉以赤_心更無所忌	キヨキ	
25	十六オ－4	奉以赤心更無所忌	右：ナカン　　左：ナカラン	

番号	所在	原文	和訓	その他
26	十六ウ－3	還示隣家總言不知且疑毒_物	アシキナリ	
27	十六ウ－4	煮而食之大有氣味	カウハシキアチハヒ	合符無
28	十六ウ－4	明日往見都不－在焉	ナシ	
29	十六ウ－5	由喫菌羹無病而壽	イノチナカシ	
30	十八オ－8	陳_酒陳_菜六畜於路側	左：フルサケフルナ　左：フルキ	
31	十八ウ－1	而使呼曰新富入來	ニヒシキトミ	合符無
32	二十オ－5	種々奇－術不可殫究	ア	
33	二十ウ－1	知得志欲歸之意與毒殺之	右：アシモノ　左：アシキモノ	
34	二一ウ－2	而子麻呂等不來流汗沃身	右：ウル　左：アマ子ク	
35	二一ウ－4	恐近天皇不覺流汗	チカクハヘル	
36	二三オ－2	立俟其誅決矣	右：ウタカハシ　左：ウツムマシ	
37	二三オ－5	船史惠尺卽疾取所燒國記	トク	
38	二三ウ－7	此卽上宮王等性－順	右：ヒトヽナリ　左：ヒトユルクシ	

寛文九年版本『日本書紀』巻二十二

注：形容詞和訓の収集は、石塚晴通所蔵する複製本を利用し、頁数を漢字の数字、行数をアラビア数字で示す。

番号	所在	原文	和訓	その他
1	一オ－4	幼曰額田部皇女…	ワカクマシマストキ	
2	一オ－5	姿色端－麗…	キラくシク	く(踊り字)
3	一オ－5	進_止軏－制	ヲサくシ	く(踊り字)
4	四ウ－1	除是二神何亦有畏乎	カシコキコト	
5	六オ－1	其臨大事而不遂矣甚悲乎	シ	
6	七オ－2	皇太子親肇作憲_法十七條	憲法：イツクシキ	
7	七オ－5	篤敬三寶	ア	略訓
8	七オ－7	人鮮尤惡能教從之	スクナシ	
9	七オ－7	人鮮尤惡能教從之	アシキモノ	連体形＋名
10	七ウ－8	乏者之訴似水投石	トモシキヒト(右)/モノ(左)	「者」:二訓
11	八オ－1	貧民則不知所由…	マキ	略訓

番号	所在	原文	和訓	その他
12	八オ－2	懲惡勸善古之良典	右：アシキ┐左：アシキヲ	右訓合字
13	八オ－2	懲惡勸善古之良典	ヨキノリナリ	
14	八オ－3	其諂詐者則爲覆國家之利_器…	利：トキ	器：無訓
15	八オ－4	亦佞_媚_者…	佞：カタマシク	
16	八オ－5	其如此人皆无忠於君…	右：イサヲシキ┐　左：イサヲシ	左右二訓
17	八オ－7	其賢哲任官、頌音則起…	右：サカシキヒト　左：サカシヒト	二訓
18	八オ－7	釰者有官…	右：カタマシキヒト左：カタマシヒト	二訓
19	ハオ－7	禍亂則繁	シ	略訓
20	八オ－8	世少生知剋念作聖	レトモ	略訓
21	八オ－8	事無大少得人必治	イサヽケト	
22	八オ－8	時無急－緩	右：トク　左：トキオソキ	二訓
23	八ウ－1	遇賢自寬	サカシキヒト	
24	八ウ－1	因此國家永久社稷勿危	右：モロイコト　左：アヤウ	二訓
25	八ウ－2	群卿百寮早朝晏退	ヲソク	
26	八ウ－3	公事靡盬	イトマナシ	
27	八ウ－3	終日難盡	シ	略訓
28	八ウ－3	遲朝不逮于急	右：スミヤカナル┐　左：トキコト	
29	八ウ－3	早退必事不盡	ク	略訓
30	八ウ－5	群臣無信萬事悉敗	レハ	
31	九オ－1	相共賢－愚如鐶无端	カシコクヲロカナル┐	左訓
32	九ウ－3	五百之乃今遇賢	サカシヒト	
33	九ウ－7	使民以時古之良_典	ヨキノリナリ	合符左
34	十オ－2	少事是輕不可必衆	イサヽケノコト	左訓
35	十オ－2	少事是輕不可必衆	シ	略訓
36	十オ－2	唯逮論大事若疑有失	右：フ　左：ウタカハシキトキハ	右訓動詞
37	十一オ－7	以求好佛像	ヨキ	
38	十二オ－2	敦禮神祇	アツク	
39	十二オ－2	周祠山川	アマ子ク	
40	十二ウ－5	爲唐客更造新_館於難波…	ニヒシキムロツミ	
41	十三オ－5	雖有失書之罪輒不可罪	右：タハヤスク　左：タヤスク	二訓

番号	所在	原文	和訓	その他
42	十三オ－6	其大國客等聞之亦不良	右：サシナシ　　左：サカナシ	二訓
43	十三ウ－7	愛_育之情無隔遐邇	ウツクシクヤシナウ	育：動詞訓
44	十三ウ－7	愛育之情無隔遐_邇	トホクチカキ	
45	十四ウ－3	裴世清等至久－憶方解	ヒサシクオモヒ	左訓
46	十四ウ－4	季－秋－薄－冷尊何如	コノコロサムクスサマシ	左訓
47	十九オ－4	覆飢者而言安臥也	ヤスク	
48	十九ウ－6	乃開以見屍骨既空	ムナシクナリタリ	
49	二一オ－8	卽化少_魚以挾樹枝	チイサキ(ヒ)イヲ	
50	二二ウ－7	我雖異國心在斷_金	ムツマシキ	
51	二三ウ－5	大唐國者法式備定之珎國也、	メツラシキクニ	左訓
52	二三ウ－8	後擊之不晩也	ヲソカラシ	
53	二四オ－4	百濟是多反－覆之國	右：カヘ　左：カヘカヘシ	二訓
54	二四オ－8	任那小國天皇附庸	スコシキ	左訓
55	二六オ－5	何無讖忌輒犯惡逆	アシキ	左訓
56	二六ウ－3	然我王聞日本天皇之賢哲…	右：サカシキ左：サカシクマシマスㄱ	合字
57	二七ウ－4	豈獨朕不賢耶大臣亦不忠	右：ヲサナカラ 左：ヲサナイノミナラムヤ	二訓
58	二七ウ－5	豈獨朕不賢耶大臣亦不忠	ツタナラム	左訓
59	二八オ－2	性有武略亦有辨才	タケキワサ	左訓
60	二八オ－2	性有武略亦有辨才	右：ワイマヘ　左：ワイゝシキカト	
61	二八ウ－6	本非輒言恆之所重	タヤスク	
62	二八ウ－8	汝肝稚之	ワカシ	

寛文九年版本『日本書紀』巻二十四

番号	所在	原文	和訓	その他
1	二オ－5	有高_名之人卌餘	タカキナ	
2	四ウ－3	遂雨五日溥－潤天下	右：ウルホシツ 左：アマ子クウルホシツ	潤:動詞訓
3	九オ－2	亦無臭氣	クサキ	
4	十ウ－2	以一身之故豈煩_勞萬民	ワツラハシイタハラシメムヤ	

番号	所在	原文	和訓	その他
5	十ウ－4	夫損身固國不亦丈夫者歟	カタクセムハ	
6	十一オ－6	吾起兵伐入鹿者其勝定之	右：ウツナシ　左：ウツムナシ	
7	十一オ－8	五色幡蓋種種伎_樂	オモシコキコエ	
8	十一ウ－4	入鹿極甚愚癡專行暴_惡	アライワサ	
9	十一ウ－5	儞之身命不亦殆乎	アヤウカラ	左訓
10	十二オ－6	中臣鎌子連曾善於輕皇子	ウルハシ	左訓
11	十二オ－7	深識中臣鎌子連之意氣高逸	タカク	
12	十二ウ－1	淨掃別殿高鋪新蓐	ニヒシキ	
13	十二ウ－2	殊奉恩－澤過前所望	ウツクシミ	
14	十二ウ－4	中臣鎌子連爲人恵_正	タヽシ	
15	十二ウ－4	爲人恵正有匡_濟心	タヽシスクフ	
16	十二ウ－5	失君臣長幼之序…	ワカキ	
17	十二ウ－6	而求可立功－名哲主	サカシキヽミ	
18	十二ウ－7	踈然未獲展其幽_抱	右：フカイコヽロ　左：オモヒ	
19	十三オ－8	中大兄聞而大悦曲從所議	ルマヒラカニ	
20	十三ウ－4	奉以赤心更無所忌	キヨキ	
21	十三ウ－5	奉以赤心更無所忌	ナカラム	左訓
22	十四オ－2	還示隣家總言不知且疑毒物	アシキ	
23	十四オ－3	煮而食之大有氣味	右：カウハシキハヒ 左：カアチハヒ	合符無
24	十四オ－4	明日往見都不在焉	ナシ	左訓
25	十四オ－5	由喫菌糞無病而壽	イノチナカシ	
26	十五ウ－4	而使呼曰新富入來	ニヒシキ	
27	十七オ－7	知得志欲歸之意與毒殺之	アシキモノ	
28	十八オ－6	恐近天皇不覺流汗	チカクハヘル	
29	十九ウ－1	立俟其誅決矣	右：ウツムマシ　左：ウタカハシ	
30	十九ウ－4	船史惠尺卽疾取所燒國記	トク	

参考資料 5：同一漢文の古訓形容詞対照一覧表

注：①岩崎本の訓点はⒶ平安中期末の古い博士家点、Ⓑ院政期の博士家点（1086 年～1185 年）、Ⓒ室町時代宝徳 3 年（1451 年）点及び文明 6 年（1474 年）点、ともに一条兼良加点、三種類に分けられる。

②訓点がないところ、「×」で示す。

巻二十二

番号	原文	岩崎本	図書寮本	兼右本	寛文九年版本
1	**幼**曰	×	×	ワカクマシマストキ	ワカクマシマストキ
2	姿色**端麗**	×	キラキラシク(合符無)	キラキラシク(合符、中)	キラキラシク(合符、中)
3	**白**鹿	Ⓒシロキ	×	シロキ(合符、左)	×
4	有**畏**乎	Ⓐカシコ Ⓑカシコキコト	カシコキコト	カシコキコト(合字)	カシコキコト
5	甚**悲**乎	ⒶシⒷシキカナ	シ	シキ	シ
6	**憲**法	ⒶイツクシキⒸ（イツクシキ）ノリ(合符、左)	イツクシキ(合符無)	イツクシキノリ(合符、左)	イツクシキ(合符、左)
7	以和為**貴**	Ⓒタフトシ	×	タフトシ	×
8	亦**少**達者	Ⓒシ	×	スクナシ	×
9	**篤**敬	×	ア	アツク	ア
10	人**鮮**尤惡	×	スクナシ	×	スクナシ
11	人鮮尤**惡**	Ⓐモノ	アシキモノ	アシキモノ	アシキモノ
12	**不禮**	ⒶナイⒷトキⒸナキ	（イヤ）ナキトキ	イヤナキトキ(不礼)	ナキトキ
13	**乏**者	Ⓒトモシキモノ(合符、左)	トモシキヒト(合符無)	右：トモシキモノノ	右：トモシキヒト

				左：(トモシキ)ヒトノ	左：モノ
14	**貧**民	Ⓒマツシキ	×	マツシキ(合符、左)	マキ(合符無)
15	懲**惡**	Ⓒアシキ	×	右：アシキ 左：アシキコト(合字)	アシキコト
16	**良**典	Ⓒヨキ(合符、左)	×	右：ヨキノリ 左：(ヨキ)ノリナリ(合符、左)	ヨキノリナリ(合符無)
17	**利**器	ⒶトⒷトキⒸ（合符、左)	トキ	トキ(合符、左)	トキ(合符、左)
18	**鋒**釼	Ⓐトキ	スクレタル	右：スクレタル 左：トキ(合符、左)	スクレタル(合符、左)
19	**佞**媚者	Ⓒカタマシク(合符、左)	カタマシク	右：カタマシク(合符、左) 左：カタミ	カタマシク(合符、左)
20	**忠**於君	Ⓐイサヲシサ	イサヲシキ	右：イサヲシサ 左：イサヲシキコト(合字)	右：イサヲシキコト 左：イサヲシ
21	**賢**哲	Ⓐサカシヒト(合符、中)	サカシキヒト	右：サカシヒト(合符、中) 左：カシコキヒト	右：サカシキヒト 左：サカシヒト(合符無)
22	**姦**者	ⒶカタマキⒷカタマシⒸ(カタマシ)キヒト(合符、左)	カタマシキ人	カタマシキヒト(合符、左)	右：カタマシキヒト 左：カタマシヒト(合符無)
23	禍亂則**繁**	Ⓒシ	×	シケシ	シケシ
24	世**少**生	Ⓒスクナシ	×	スクナシ	レトモ
25	事**無**大少	Ⓒク	×	ク	×
26	事**無**大**少**	ⒶイササケキⒷササケキⒸイササ	イササケト	右：イササケ	イササケト(合符無)

		ケト(合符、左)		左：イササケト(合符、左)	
27	時**無**急緩	Ⓒク	ナク	×	×
28	時無**急緩**	ⓒヲソキトキ(合符、左)	×	右:ヲソキトキ(合符、左) 左：スミヤカニユルイコト(合字)	右：トク 左：トキヲソキ
29	遇**賢**自寛	ⓒサカシヒト	**過**賢自寛×	サカシヒト	サカシヒト
30	社稷勿**危**	ⓒアヤウカラ	カラス	アヤウカラ	右：モロイコト 左：アヤウ
31	**早**朝晏退	Ⓐハ	×	ハヤク(合符、左)	トク(左)
32	早朝**晏**退	ⒶオⒷオ	ヲソク	オソク(合符、左)	ヲソク
33	公事**靡鹽**	Ⓐイトナシ(合符、中)ⓒイトマナシ	摩監イトナシ(合符無)	靡監イトマナシ(合符無)	イトマナシ(合符無)
34	終日**難**盡	ⓒシ	×	カタシ	シ
35	**遅**朝不逮于急	×	×	オソク(合符、左)	×
36	遅朝不逮于**急**	ⒶスミヤⒷスミヤケキ	スミヤカナル	スミヤカナル	右：スミヤカナルコト 左：トキコト
37	**早**退	ⓒヤク	×	ハヤク(合符、左)	ク
38	**善**悪成敗	Ⓐサⓒヨサ(合符、無)	×	ヨサ(合符、左)	左：ヨサ
39	善**悪**成敗	Ⓐサⓒアシキ(合符、無)	×	アシキ(合符、左)	左：アシサ
40	則我**非**	ⓒアシ(合符、左) Ⓐ Ⓑアシム	×	右：アシンス 左：アシ(合符、左)	×
41	則彼**非**	ⓒ右：アシンス	×	右：アシンス	×

		左：アシ(合符、左)		左：アシ(合符、左)	
42	**是**非之理	Ⓐ Ⓑヨク Ⓒヨサ	ヨミシ	右：ヨク　左：ヨサ	ヨミシ
43	是**非**之理	Ⓐ Ⓑアシキ Ⓒアシサ	アシムスル	右：アシキ　左：アシサ	アシムスル
44	**賢**愚	Ⓒカシコク(合符、左)	×	カシコク(合符、左)	カシコク(合符無)
45	如環**无**端	×	×	ナキ	×
46	民**無**両主	Ⓒシ	无×	無シ	無×
47	遇**賢**	Ⓐ サカシヒト	サカシヒト	サカシヒト	サカシヒト
48	**難**待一聖	×	×	シ	×
49	不得**賢**聖	Ⓒサカシキ人	×	サカシキ人	×
50	**良**典	Ⓒヨキ(合符、無)	×	ヨキノリナリ(合符、左)	ヨキノリナリ(合符、左)
51	**少**事是軽	Ⓐイササケキ(合符、左)	イササケク	イササケキコト(合字)（合符、左)	右：イサケノ 左：イササケノコトハ
52	少事是**軽**	Ⓒカルカルシク	×	カルカルシク	シ
53	若**疑**有失	Ⓒウタカワシキトキ	×	ウタカワシキトキ	右：フ 左：ウタカハシキトキハ
54	**好**佛像	ⒶヨⒷキ	ヨキ	ヨキ	ヨキ
55	**敦**禮	Ⓒアツク	(就)アツク	敦礼アツク	敦禮アツク
56	**周**祇山川	Ⓐ Ⓑア Ⓒマ	アマネク	アマネク	アマネク
57	**新**館	ⒶⒷニヒシキ	ニヒシキ(合符無)	ニヒシキ(合符、左)	ニヒシキ(合符、左)
58	**新**館	Ⓒニハシキ(合符、左)	×	ニハシキ(合符無)	×

59	**輒**不可罪	©タヤスク	タハヤスク	タヤスク	右：タハヤスク 左：タヤスク
60	不良	Ⓐサカナシ(合符、中)	サカナシ	サカナシ(合符、中)	右：サシナシ 左：サカナシ(合符無)
61	**無**隔遐邇	©シ	×	シ	×
62	無隔**遐**邇	Ⓐト	トホク	トヲク	トホク
63	無隔**遐邇**	©トヲクチカキ(合符、左)	トホクチカキ	トヲクチカキ(合符、左)	トホクチカキ(合符、左)
64	**深**氣至誠	©キ(合符、左)	×	キ(合符、左)	×
65	**遠**修朝貢	©ク	×	ク	×
66	**久**憶方解	Ⓐキ(合符、左)	×	ヒサシク	左：ヒサシク
67	薄**冷**	薄：Ⓐヤウヤウ **冷：**©ス(ズシ)(合符、中)	×	薄：サムク(合符、中) **冷：**スサマシ　　(左)	左：薄：サムク(合符、中) **冷：**スサマシ
68	**暴**風	Ⓐアラキ©アカラシマカセ	アカラシマ	アカラシマカセ	アカラシマカセ
69	**安**臥	ⒶⒷヤスラ©ヤスク	ヤスク	右：ヤスラカ　左：ヤスク (合符、左)	ヤスク
70	既**空**	ⒶムナシクナリⒷムナシクナリタリ©ムナシ	ムナシクナリタリ	右：ムナシ 左：ムナシクナリタリ	ムナシクナリタリ
71	**少**魚	ⒶチヒサイⒷチヒサキ	チヒサイ	チイサキ(合符、左)	チイサキ(合符、左)
72	勝之大**高**	©シ	×	勝之太**高：シ**	大高×
73	**赤**氣	©アカ	×	アカ(合符、左)	×
74	如失**愛**児	ⒶⒷメクキ©ミノ(合符、左)	メクイ	メクミ(合符、左)	メクミ(合符無)

75	少幼	ⒶⒷワカイ(合符、中)	ワカイ(合符、中)	ワカイ(合符、中)	ワカキ(合符、中)
76	斷金	ⒶⒷウルハシキ(合符、中)Ⓒムツマシキ	ムツマシキ(合符無)	右：ムツマシキ 左：ウルハシキ	ムツマシキ(合符、左)
77	**小**幡	Ⓒチヒサキ(合符、左)	×	チイサキ(合符、左)	×
78	**珎**国	Ⓒメツラシキ(合符、中)	×	メツラシキ(合符、左)	左：メツラシキ(合符無)
79	不**晩**	Ⓒオソカラ	オソカラ	オソカラシ	オソカラ
80	**反覆**	ⒶⒷカヘカヘシキⒸカヘカヘシ	かへかへ(合符、中)	カヘカヘシキ(合符、左)	カヘカヘシ
81	**小**国	ⒶⒷキ(合符、左)	×	スコシキ(合符、左)	左：スコシキ(合符無)
82	**悔**乎	Ⓒクヤシキ	×	クヤシキ	×
83	**早**遣師矣	Ⓒク	×	ク	×
84	**無**任那之迎船	Ⓒキ	×	キ	×
85	**惡**逆	Ⓒアシキ(合符、中)	×	アシキ(合符、左)	左：アシキ(合符無)
86	**重**罪	Ⓒオモク	×	オモク	×
87	**惡**逆	Ⓐサカ(合符、中)Ⓒアシキ	×	アシキ	サカワサ(合符無)
88	**賢哲**	ⒶサカシクマシマスコトⒷサカシクマシマス(合符、中)	サカシキ	右：サカシクマシマス 左：サカシキ(合符、左)	右：サカシキヲ 左：サカシクマシマスコトヲ
89	**惡**逆	Ⓒアシキ(合符、中) (450 行)	×	アシキ(合符、左)	左：サカワサ(合符無)
90	**惡**逆	Ⓒアシキ(451 行)	×	右：アシキ 左：アシキワサセル(合符、中)	×
91	**不賢**	Ⓐ Ⓑ ヲサナキノミナラム (合符、中)	右：ヲサナカラ 左：ヲサナ(合符無)	右：ヲサナキノミナランヤ 左：ヲサナカラス(合符、中)	右：ヲサナカラ 左：ヲサナキノミナランヤ(合符

					無)
92	不忠	Ⓐ Ⓑ ツタナクナリナⒸ (ツタナクナリナ)ン(合符無)	ツタナカラム(合符無)	ツタナカラン(合符、中)	ツタナラム(合符無)
93	惡名	Ⓒアキナ(合符、左)	ナラムトイフ(合符、左)	アシキナラムトノタマイ(合符、左)	×
94	有**武**畧	ⒶタⒷタケキ	武略×	武略：タケキ	左：タケキ
95	有**辨才**	Ⓐ Ⓑ ワイワイシコトⒸ ワイワイシキカト(合符無)	ワイマヘ	右：ワイワイシキカト 左：ワイマヘ(合符、左)	右：ワイワヘ(合符無) 左：ワイワイシキカト
96	非**輒**言	Ⓒタヤスク	×	タヤスク	左：タヤスク
97	不可**軽**言	ⒶカロカロⒸ(カロカロ)シク	輒×	**軽**言　右：カロカロシク 左：タヤスク	×
98	汝肝**稚**之	Ⓒワカシ	ワカシ	ワカシ	ワカシ
99	勿**厚**葬	Ⓒク	匂厚葬　×	ク	×

巻二十四

番号	原文	岩崎	圖書寮	兼右	寛文九年
1	作惡	Ⓐアシキワサ(合符、中) Ⓑアシキワサス	アシキワサ(合符無)	アシキワサ(合符、左)	×
2	**高**名之人	Ⓒキ(合符、左)	×	タカキナ(合符、左)	タカキ(合符、左)
3	**傳**潤天下	ⒶⒷアマネク	(溥)×	アマネク	左：アマネク
4	行**無禮**	ⒶヰヤナキワサⒷヰヤナキワサス(合符、中)	ヰヤナキワサ(合符無)	礼　イヤマキワセス(合符、中)	ヰヤナヒワサ(合符、中)

5	**小**蟲	ⒶⒷキ(合符無)	×	虫 キナル(合符、左)	×
6	大**小**魚	Ⓒチ(ヒサ)キ(合符、左)	×	チキ	×
7	**皐**氣	ⒶクサⒷクサキ(合符無)	クサキ(合符無)	クサキ(合符、左)	クサキ(合符無)
8	**煩**労	Ⓐワツラハ（合符、中)		ワツラハシ(合符、左)	ワツラハシ(合符、左)
9	損身**固**國	Ⓐ̲Ⓑ̲メ(動詞かたむ)	カタクセム	カタクセン	カタクセ
10	其勝**定**之	ⒶⒷウツムナシ Ⓒウツムナ（タ）シ	ウツナシ	右：ウツムナシ 左：ウツムタシ	右：ウツナシ 左：ウツムナシ
11	**伎楽**	Ⓐオモシロキオト(合符、中) Ⓑオモシロキヲト Ⓒ(オモシロキ)コエ	オモシロイコエ(合符無)	オモシロキコエ(合符、左)	オモシコキコエ(合符、左)
12	行**暴悪**	Ⓐアシキワサ(合符、中) ⒷアシキワサスⒸアライワサ	アライワサ(合符無)	右：アライワサ(合符、左) 左：アシキワサス	アライワサ(合符、左)
13	不亦**殆**乎	ⒶⒷアⒸヤ	×	アヤウカラ	左：アヤウカラ
14	曾**善**於軽皇子	ⒶⒷウルハシ	ウルハシ	ウルハシ	左：ウルハシ
15	意氣**高**逸	Ⓒタ(カ)ク(合符、左)	×	タカク(合符、左)	タカク(合符無)
16	高鋪**新**蓆	ⒶⒷニヒシキ	新蘆(褥)ニヒシキ	蓆ニヒシキ	ニヒシキ
17	為人**忠正**	ⒶⒷタタシク(合符、中)	恵タタシ	タタシク(合符、中)	恵タタシ(合符、左)
18	有**匡**濟心	×	タタシ	タスケ(合符、左)	
19	長**幼**之序	ⒶⒷオトトⒸワカキ(合符、左)	ワカキ(合符無)	右：ヲイタルワカキ 左：コノカミオトト(合符、左)	ワカキ(合符無)
20	**哲**主	ⒶⒷサカシキⒸサカシキキミ(合	サカシキキミ(合符、中)	サカシキキミ	サカシキキミ(合符無)

		符、中)			
21	幽抱	Ⓐフカキオモヒ(合符、中) Ⓑフカキオモ	フカイココロ(合符無)	右：フカキオモク 右：(抱)ココロ	フカイココロヲ(合符、左)
22	成**婚姻**	ⒶムロシフトⒷムロシフトノ Ⓒムツマシキ(合符、中)	ムココト(合符無)	右：ムツマシキ 左：ムロシフトノ(合符、中)	右：ムココト 左：ムロシヒトノ(合符、左)
23	**曲従**所議	ⒶⒷヒハヒラⒸツマヒラケニ	ツハヒラケ	ツハヒラケ	ツワヒラカニ
24	亦復不**晩**	×	オソカラ	×	×
25	**赤**心	ⒶⒷキヨキ(合符無)	キヨキ(合符無)	キヨキ(合符、左)	キヨキ(合符無)
26	**毒**物	ⒶⒷアシキ	アシキ	アシキ(合符、左)	アイキ(合符無)
27	大有**氣味**	ⒶⒷカウハシキⒸアチハヒ (合符、左)	氣：カウハシキ(合符無) 味：ハヒ	カウハシキ(合符無)	カウハシキ(合符無)
28	不在	ⒶⒷナシ(合符、中)	ナシ(合符、中)	ナシ(合符、中)	左：ナシ(合符無)
29	無病而**壽**	ⒶⒷシ	イノチナカ	イノチナカシ	イノチナカシ
30	陳酒陳菜	**陳**酒：ⒶⒷフルキⒸフルサケ(合符、左) 陳菜：フルナ(合符、左)	フルサケフルナ(合符無)	右：フルサケフリナ 左：フルキ(合符、左)	フルサケフルナ(合符、左)
31	**新**富	ⒶⒷニヒシキⒸニヒシキトミ	ニヒシキ	ニヒシキトミ	ニヒシキトミ
32	**奇**術	ⒶⒷア(ヤシ)	ア	ア	×
33	**毒**殺之	ⒶⒷアシキモノⒸ(アシキ)マシモノ	アシキモノ	右：アシモノ 左：アシキモノ	右：アシモノ 左：アシキモノ
34	流汗**浹**身	ⒶⒷアマネクⒸウル	ウル	右：ウル	ウル

				左：アマネク	
35	恐**近**天皇	Ⓐ Ⓑツケル Ⓒチカクハヘル	チカクハヘル	チカクハヘル	チカクハヘル
36	**決矣**	Ⓐウツムナシ Ⓑウツムマシ Ⓒウタカハシ	ウツムマシ	右：ウタカハシ 左：ウツムマシ	右：ウツムマシ 左：ウタカハシ
37	**疾**取	ⒶⒷトク	トク	トク	トク
38	性**順**	ⒶⒷユルクシⒸ(合符、左)	ユル	ユルクシ	ユルクシ

参考資料 6：岩崎本原文の形容詞とそれと対応する古訓

巻二十二

	所在[67]	原文	語法構造	和訓
1	5	嗣位既**空**。	述語	
2	28	其烟氣**遠**薫、	形＋動	
3	29	則**異**以獻之。	意動用法	Ⓐケⓒケナリトソ
4	42	越國獻**白**鹿一頭	形＋名	ⓒシロキ
5	45	百濟貢駱駝一匹・驢一匹・羊二頭・**白**雉一隻	形＋名	
6	50	**惶**之舉**白**旗、到于將軍之麾下而立。	動詞化、形＋名	ⒶⒷカシコ
7	63	以詔之曰、**急**救任那。	形＋動	
8	85	其臨大事而不遂矣、甚**悲**乎	述語	ⒶⒷカナシキ
9	95	我有尊佛像、誰得是像以**恭**拜。	形＋動	ⒶⒷヰヤヒマツラウ
10	104	以**和**爲**貴**、無忤爲宗。	名詞化	和：Ⓐヤワラク 貴：ⓒタフトシ
11	105	人皆有黨亦<u>少</u>達者	述語	(スクナ)シ
12	106	然、上**和**下**睦**諧於論事則事理自通、何事不成。	述語	和：ⓒャ 睦：ⒶⒷムツ
13	106	**篤**敬三寶。	形＋動	
14	108	何世何人、非**貴**是法。	副詞＋形	ⓒタウトハ
15	108	人**鮮**尤**惡**、能教從之。	述語	
16	109	其不歸三寶、何以**直**枉。	使役化	タタサム
17	110	天覆地載、四時**順**行萬氣得通。	形＋動	
18	114	上不禮、而下非**齊**	述語	ⒶⒷトトノホラ(ス) ⓒ(トト)ノホラス
19	115	是以、群臣有禮、位次不**亂**	述語	
20	115	絶餮棄欲、**明**辨訴訟。	形＋動	
21	118	**乏**者之訴、似水投石。	形＋名	ⓒトモシキ
22	119	是以、**貧**民則不知所由	形＋名	ⓒマツシキ
23	120	懲**惡**勸**善**	名詞化	ⓒアシキ
24	120	古之**良**典	形＋名	ⓒヨキ
25	120	是以、无匿人**善**、見**惡**必匡	名詞化	
26	121	其諂詐者則爲覆國家之**利**器、爲絶人民之**鋒**劒	形＋名	利：ⒶトⒷトキ 鋒：Ⓐトキツ

[67]原文の行数をアラビア数字で示す、「5」は巻二十二の 5 行目を指す。

27	122	亦、**佞媚**者、對上則好說下過	形＋名	Ⓐカタミコフ ⓒカタマシク
28	124	是**大**亂之本也	形＋名	
29	125	其**賢**哲任官、頌音則起、**奸**者有官、禍亂則**繁**	形＋名、述語	賢：Ⓐサカシ 奸：Ⓐカタマシキ Ⓑカタマシ ⓒカタマシキ(ヒト) 繁：(シケ)シ
30	126	世**少**生知、剋念作聖	述語	ⓒスクナシ
31	126	事無**大少**、得人必治	名詞化	少：Ⓐイササケキ Ⓑ(イ)ササケキ ⓒイササケキト(イフコト)
32	127	時無**急緩**、遇**賢**自**寛**	名詞化、述語	緩：ⓒオソキ 賢：ⓒサカシヒト 寛：ⓒユタカナリ
33	127	國家**永久**社稷勿**危**	述語	危：アヤフカラス
34	129	群卿百寮、**早**朝**晏**退	形＋動	早：Ⓐハヤク 晏：ⒶⒷオ(ソク)
35	129	公事靡盬、終日**難盡**。	形＋動	ⓒカタシツクシ
36	130	是以、**遲**朝不逮于急、**早**退必事不盡。	形＋動	早：ⓒハヤク
37	131	其**善悪**成敗、要在于信。	形＋形	ⓒヨサアシキ
38	135	我必非聖、彼必非**愚**、共是**凡**夫耳。	述語、形＋名	凡夫：ⓒタタヒト
39	136	相共**賢愚**、如鐶无端。	名詞化	**賢愚**：ⓒカシコク(オロカ)ナルコト
40	137	**明**察功過、賞罰必當。	形＋動	ⓒアキラカニシ
41	139	執事群卿、宜**明**賞罰。	使役化	
42	143	然、得知之日、**和**如曾識	名詞化	Ⓐアマナフ Ⓑアマナフコト
43	146	所以、智**勝**於己則不悦、才**優**於己則嫉妬。	比較表現	勝：ⓒマサレハ 優：ⓒマサレハ
44	147	五百之乃今遇**賢**、千載以難待一聖。	名詞化	Ⓐサカシヒト
45	148	其不得**賢**聖、何以治國。	形＋名	ⓒサカシキヒト
46	151	故初章云、上下**和諧**	述語	Ⓐアマナヒトト（ノホレ）

				Ⓑアマナヒ(トトノホレ)
47	152	使民以時、古之**良**典。	形＋名	ⓒヨキ
48	155	夫事不可**獨**斷、必與衆宜論	形＋動	ⓒヒトリ
49	155	**少**事是**輕**、不可必衆。	形＋名、述語	少：Ⓐイササケキ 輕：ⓒカルカルシク
50	171	然鞍作鳥之**秀**工、不壞戸得入堂	形＋名	Ⓐスクレたる Ⓑスクレ(タル)
51	179	今朕爲造丈六佛、以求**好**佛像	形＋名	Ⓐヨ(キ)Ⓑ(ヨ)キ
52	190	朕聞之、**曩**者、我皇祖天皇等宰世也	形	Ⓐムカシ
53	191	**敦**禮神祇、**周**祠山川、**幽**通乾坤。	形＋動	敦：ⓒアツク 周：ⓒアマ(ネク) 幽：ⓒハルカニ
54	213	其大國客等聞之、亦**不良**。	述語	Ⓐサカナシ
55	224	境内**安樂**、風俗**融和。**	述語	安樂：ⓒヤスラカニシ 融和：Ⓐトホリアマナヒ
56	224	**深**氣至誠、**遠**脩朝貢。	形＋動	深：ⓒ(フカ)キ 遠：ⓒ(トホ)ク
57	237	世清等至、**久**憶方解	形＋動	Ⓐ(ヒサシ)キ
58	237	季秋**薄冷**、尊何如、想清愈。	形＋形	薄冷：Ⓐヤウヤウニ
59	243	是歲、新羅人**多**化來。	形＋動	
60	304	惡其**異**於人	比較表現	Ⓐケ
61	306	若惡臣之斑皮者、**白**斑牛馬不可畜於國中。	形＋名	ⓒアタラナル
62	306	亦臣有**小**才	形＋名	ⒶⒷいささか
63	307	其留臣而用則爲國有**利。**	活用	ⒶⒷクホサ
64	308	何**空**之棄海嶋耶	使役化	
65	319	覆飢者而言、**安**臥也	形＋動	ⒶⒷヤスクⓒヤスラ
66	325	爰皇太子大**悲**之。	述語	
67	327	先日臥于道飢者、其非**凡**人、必**眞**人也。	形＋名	凡人：ⒶⒷタタヒト 真人：ⒶヒシリⒷヒシリナリⓒヒシリナラントノタマ
68	330	屍骨既**空**	述語	

69	331	時人大**異**之曰	意動用法	Ⓐ Ⓑア(ヤシヒ)て
70	352	便得**好**材、以將伐	形＋名	
71	354	**多**祭幣帛、遣人夫令伐	形＋動	
72	357	卽化**少**魚、以挾樹枝	形＋名	Ⓐチヒサイ Ⓑチヒサキ
73	367	天有**赤**氣、**長**一丈餘、形似雉尾。	形＋名	ⓒアカ Ⓐ Ⓑナカサ
74	373	悉**長老**、如失愛兒而鹽酢之味在口不嘗	名詞化	Ⓐ Ⓑオキナ
75	374	**少幼**、如亡**慈**父母以哭泣之聲滿於行路	名詞化、形＋名	Ⓐ Ⓑワカイ ⓒウツクシミ
76	378	聞上宮皇太子薨、以大**悲**之	動詞化	ⓒカナシヒタテマツル
77	392	**大**觀頂幡一具・**小**幡十二條	形＋名	ⓒチヒサキ
78	398	定之**珎**国也。	形＋名	ⓒメツラシキ
79	400	不可**急**討。	形＋動	ⓒスミヤカニ
80	401	後擊之、不**晩**也。	述語	ⓒオソカラ
81	405	百濟是多**反覆**之國、	形＋之＋名	Ⓐ Ⓑカヘカヘシキ
82	410	任那**小**國、天皇附庸。	形＋名	Ⓐ Ⓑ(イササケ)キ
83	421	於是、船師滿海**多**至	形＋動	Ⓐ Ⓑサハ(ニイタル)
84	421	兩國使人、望瞻之、**愕然**、乃還留焉	述語	Ⓐ Ⓑカシコマリオツ
85	426	聞軍**多**至而豫慴之、請服	形＋動	
86	431	悔乎、**早**遣師矣。	形＋動	ⓒ(ハヤ)ク
87	433	先**多**得新羅弊物之故	形＋動	Ⓐ Ⓑサハ
88	434	是以、未待使旨而**早**征伐耳	形＋動	
89	442	何無讖忌輒犯**惡逆**	名詞化	ⓒアシキ（ワサナルコト)
90	444	若事実者**重**罪之	形＋動	ⓒオモク
91	445	則**惡逆**僧及諸僧尼並將罪。	形＋名	ⓒアシキワサセル
92	448	然我王聞日本天皇之**賢**哲而貢上佛像及內典、	名詞化	Ⓐ Ⓑサカシク
93	450	故當今時、以僧尼未習法律、輒犯**惡逆。**	動＋形	ⓒアシキワサ
94	451	仰願、其除**惡逆**者以外僧尼、悉赦而勿罪。	形＋名	ⓒアシキモノ
95	467	**愚癡**婦人臨天下以頓亡其縣	形＋名	ⓒオロカナルカナ
96	468	豈獨朕不**賢**耶、大臣亦不**忠**	述語	Ⓐ Ⓑヲサナキノミナラム Ⓐ Ⓑツタナクナリナム

97	469	是、後葉之**惡**名	形＋名	ⓒアキナ
98	476	乃庭中開**小**池、仍興**小**嶋於池中	形＋名	
99	478	天下**大**飢之、**老**者噉草根而死于道垂、**幼**者含乳以母子共死。	形＋動 形＋名	
100	480	又强盜竊盜、並**大**起之不可止。	形＋動	
101	488	本非輒言、恆之所**重**	名詞化	
102	489	汝愼以察之、不可**輕**言	形＋動	
103	490	汝肝**稚**之。若雖心望、而勿諠言	述語	ⓒワカシ
104	493	雹零、**大**如桃子。壬辰、雹零、**大**如李子	名詞化	
105	497	比年五穀不登、百姓**太**飢	形＋動	
106	497	興陵以勿**厚**葬、便宜葬于竹田皇子之陵	形＋動	ⓒ(アツ)ク

巻二十四

	所在	原文	語法構造	和訓
1	15	故先**獨**來也	形＋動	
2	16	然其國者、今**大**亂矣。	形＋動	
3	20	百濟國主謂臣言、塞上恆作**惡**之。	名詞化	Ⓐアシキワサ Ⓑアシキワサス
4	24	有**高**名之人卌餘、	形＋名	ⓒ(タカ)キ
5	43	仍賜**良**馬一匹	形＋名	
6	59	獲**白**雀子。是日同時、有人、以**白**雀納籠	形＋名	
7	78	天皇詔大臣曰、朕思欲起造**大**寺。	形＋名	
8	89	庚申、天**暖**如春氣。辛酉、雨下。壬戌、天**暖**如春氣。	述語	
9	92	十二月壬午朔、天**暖**如春氣。	述語	
10	101	辛亥、天**暖**如春氣。	述語	
11	110	**專**擅國政、**多**行無禮。	形＋動	
12	114	一色**青**霧、**周**起於地。	形＋名、 形＋動	周：Ⓐヨモ ⓒヨモニ
13	118	伺候大臣渡橋之時、爭陳神語**入微**之說。	形＋之＋名	
14	119	其巫甚**多**、不可悉聽。	述語、形＋動	
15	122	夏四月庚辰朔丙戌、**大**風而雨。丁亥、風起天**寒**。	形＋動、述語	
16	123	天**寒**、人著綿袍三領。	述語	
17	126	甲辰、近江國言、雹下、其**大**徑一寸。	名詞化	ⒶⒷ(オホキ)サ
18	132	於是、大夫問調使曰、所進國調、**欠少**前例。	比較表現	Ⓐタラスⓒタラス

19	137	是月、茨田池水大皃、**小**蟲覆水、其蟲口**黑**而身**白**。	形＋名、述語	Ⓐ Ⓑ(チイサ)キ
20	138	茨田池水、變如**藍**汁、死蟲覆水。	形＋名	
21	139	溝瀆之流、亦復凝結、**厚**三四寸。	名詞化	Ⓐ Ⓑ(アツ)サ
22	139	大小魚臭、如夏爛死。	述語	Ⓐ Ⓑ(クサ)レ ⓒクサル
23	148	是月、茨田池水漸々變成**白**色。亦無**臭**氣。	形＋名	Ⓐ Ⓑクラキ
24	180	入鹿聞而大懼、**速**發軍旅、	形＋動	
25	193	其幡蓋等、變爲**黑**雲。	形＋名	
26	195	入鹿、極甚**愚癡**、	名詞化	Ⓐ Ⓑオ(ロカニシ)テ
27	196	專行**暴惡**、儞之身命、不亦**殆**乎。	名詞化、述語	Ⓐ Ⓑアシキワサ Ⓐ Ⓑア(ヤフカラス) ⓒ(アヤフカ)ラ(スヤ)
28	201	又棄捨其宮匿**深**山相也。	形＋名	
29	206	中臣鎌子連、曾**善**於輕皇子	動詞化	Ⓐ Ⓑウルハシ
30	207	輕皇子、**深**識中臣鎌子連之意氣**高逸**容止**難**犯	形＋動、述語	
31	209	**淨**掃別殿、**高**鋪**新**蓐、靡不具給、敬重特異	形＋動/名	新：Ⓐ(ニヒ)シキ Ⓑニヒシキ
32	213	中臣鎌子連、爲人**忠正**、有**匡濟**心。	述語	Ⓐタダシク
33	214	乃憤蘇我臣入鹿、失君臣**長幼**之序、	名詞化	長:Ⓐ Ⓑコノカミ ⓒヲイタル 幼:Ⓐ Ⓑオトト ⓒワカキ
34	216	便附心於中大兄、踈然未獲展其**幽**抱。	形＋名	Ⓐ Ⓑフカキ
35	229	少女**怪**父憂色、就而問曰、憂悔何也。	動詞化	
36	231	以我奉進、亦復不**晩**。	述語	
37	232	奉以**赤**心、更無所忌。	形＋名	Ⓐ Ⓑキヨキ
38	237	便看紫菌挺雪而生、**高**六寸餘、滿四町許。	名詞化	
39	238	押坂直與童子、由喫菌羹、無病而**壽**。	述語	Ⓐ Ⓑ(イノチナガ)シ
40	239	其莖**長**八尺、其本**異**而末連。	名詞化、述語	
41	240	其人**驚怪**猿歌、放捨而去。	動詞化	
42	255	爭陳神語**入微**之說。其巫甚**多**、不可具聽	形＋之＋名	
43	264	祭此神者、到**富**與**壽**。	名詞化	
44	266	**貧**人致**富**、**老**人還**少**、	形＋名	少：ⓒワカユ

45	267	而使呼曰、**新**富入來。	形＋名	Ⓐ Ⓑニヒシキ
46	268	置於**清**座、歌儛、求福棄捨珍財。	形＋名	Ⓐ Ⓑシキヰ
47	270	於是、葛野秦造河勝、**惡**民所惑、打大生部多。	動詞化	ⓒニクム
48	275	其**長**四寸餘、其**大**如頭指許、其色**緑**而有**黑**點。	名詞化、形＋名	大Ⓐ Ⓑ(オホキ)サ 緑ⓒミトリ 黒Ⓐ Ⓑクロ
49	292	或使**枯**山變爲青山、或使**黃**地變爲**白**水、	形＋名	**枯**Ⓐカラ
50	293	種々**奇**術不可殫究。	形＋名	Ⓐ Ⓑ(アヤ)キ
51	302	知蘇我入鹿臣、爲人**多**疑、晝夜持劒。	形＋動	
52	313	鞍作臣、**怪**而問曰、何故掉戰。	意動用法	
53	314	山田麻呂對曰、恐**近**天皇、不覺流汗。	動詞化	ⓒチカクハヘル
54	335	然則爲誰**空**戰、盡被刑乎。	形＋動	
55	347	此卽上宮王等性**順**、都無有罪、而爲入鹿見害	述語	

参考資料 7：岩崎本『日本書紀』の合符のある用例

Ⓐ平安中期末点（29）

（一）漢字の中央にある合符の用例

1　漢字二字（14）

ア(ヤシキ)ハケ:奇－術、イトナシ: 靡－盬、ウルハシキ:断－金、オモシロキオト: 伎－樂

カヘカヘシキ: 反-覆、サカシクマシマス: 賢－哲、サカシヒト:賢－哲

サカシキキミ:哲－主、サカナシ: 不－良、タタシク:忠－正、ナシ:不－在

フカキオモヒ: 幽－抱、ワカイ:少－幼、ヲサナキ:不－賢

2 漢字三字（2）

アシキワサス:行－暴－悪、ヰヤナキワサス:行-無－禮

（二）漢字の左側に合符のある用例（13）[68]

ヲホイナリイササケキ:大_少、イササケキ(コト)少_事、イササケキ(クニ) :小_国

イツクシキ(ノリ):憲_法、カウハシキ(アチハヒ):氣_味、カタマシキ(モノ): 奸_者

ト(キウツハ):利_器、ト(ホクチカキ): 遐_邇、ニヒシキムロツミ:新_館

(ヒサシ)キ(オモ)イ:久_憶、フルキ(サケ):陳_酒、メグキ(コ):愛_児

ヒトナリユルクシ(テ):性_順

[68]本稿は横書きのため、合符を字間の下につけることにする。

Ⓑ院政期点（20）

（一）漢字字間の中央にある合符の用例

1　漢字二字（9）

ア(ヤシキ)ハケ:奇－術、ウルハシキ: 斷-金、オモシロキオト: 伎－樂

カヘカヘシキ: 反-覆、サカシクマシマス: 賢－哲、サカシキキミ:哲－主

タタシク:忠－正、ナシ:不－在、フカキオモヒ: 幽－抱、ヲサナキ:不－賢

2　漢字三字（2）

アシキワサ:行－暴－悪、ヰヤナキワサス:行-無－禮

（二）漢字字間の左側に合符のある用例（9）

ヲホイナリイササケキ:大_少、イササケキ(クニ）:小_国、カウハシキ(アチハヒ):氣_味

カタマシキ(モノ): 奸_者、ト(キウツハ):利_器、ニヒシキムロツミ:新_館

フルキ(サケ):陳_酒、メグキ(コ):愛_児、ヒトナリユルクシ(テ):性_順

Ⓒ室町時代点（25）

（一）漢字字間の中央にある合符の用例

1　漢字二字（8）

アシキワサ:悪－逆、アライワサ:暴－悪、イトマナシ: 靡－盬、カヘカヘ(シキ): 反-覆

ムツマシキ: 斷-金、オモシロキコヱ: 伎－樂、ムツマシキ:婚－姻

メツラシキ(クニ): 珎－國

2　漢字四字（1）

(コノコロヤウヤウ)スズシ: 季－秋－薄－冷

（二）漢字字間の左側に合符のある用例（16）

アシキナ:悪_名、ヲホイナリイササケキ:大_少、イツクシキノリ:憲_法

トキヲソキ: 急_緩、カウハシキアチハヒ:氣_味、カシコクナルコと:賢_愚

カタマシク(コフル): 佞_媚、カタマシキ(モノ): 奸_者、タカキナ:高_名

タ(カ)ク(スクレテ): 高_逸、トヲクチカキ: 遐_邇、トモシキ(モノ):乏_者

(フカ)キ:深_氣、フルサケ:陳_酒、ヨキ(ノリ):良_典、ヲイタルワカキ:長_幼

参考資料 8：古訓と原文形容詞語彙の語法構造一覧表

見出し語	用例所在	和訓(加点時期)	語法構造(和訓)	原文	語法構造(漢文)	訳文
あし(悪) 用例：	22-120	アシキ(コト)Ⓒ	連体形(形＋名) 目的語	懲**惡**勸善、古之良_典	名詞(目的語)	**悪**を懲らし善を勧めよというのは、古の良い教訓である。
	22-131	アシキⒸ左 右：(アシ)サⒶ	連体形(形＋名) 主語	其善**惡**成敗、要在于信	名詞(主語)	善と**悪**、成功と失敗の要は、必ず信にある。
	22-135	アシキⒶⒷ 左：アシサノⒸ	連体形(形＋名)	是**非**之理、詎能可定	動詞の名詞化 名+名	**是非**の理を、いったい誰が定めることができようか。
	22-442	アシキⒸ (アシキワサ)	連体形(形＋名) 目的語	何無懺忌、輒犯**惡ー逆**	名詞(目的語)	よく考えて思いとどまることもせず、安直に**悪逆な行為**を犯すことがあってよりものか。
	22-445	アシキワサⒸ サカワサⒶ	連体形(形＋名)	則**惡ー逆**僧及諸僧尼、並將罪	名詞 名+名	**悪逆な罪**を犯した僧だけでなく諸諸の僧尼も共に罪にしようとした。
	22-450	アシキワサⒸ	連体形(形＋名) 目的語	今時、以僧尼未習法律、輒犯**惡ー逆**	名詞 目的語	今この時にあたって、僧尼がまだ法律に習熟していないためいに、軽率にも**悪逆な罪**を犯したわけで…
	22-451	アシキⒸ ワサセルⒶ	連体形(形＋名)	仰願其除**惡逆**者以外僧尼、悉赦而勿罪	名詞+名詞	どうか**悪逆者**を除いて、そのほかの僧尼は、みな赦免して罪としないようにお願いします。
	22-469	ア(シ)キナⒸ	連体形(形＋	是後葉之**惡_名**、則不聴	名詞の形容詞	「後世に**悪名**を残すことになろう」と仰せられて、お聞き入れにな

			名)		化/熟語	らなかった。
	24-20	アシキワサⒶ/Ⓑアシキワサス左	連体形(形＋名) 目的語	百済国主謂臣言、塞上恆作－**惡**之。	名詞(目的語)	百済国主は私に語って、「塞上はいつも**悪業**を行っている」
	24-196	アシキワサⒶ/Ⓑ同訓、左/Ⓒアライワサ	連体形(形＋名) 目的語	入鹿極甚愚癡、専行－**暴－惡**	形＋名 目的語	入鹿極甚だ愚痴にして、専ら**横暴な悪事**ばかり行ったものだ。
	24-239	アシキⒶⒷ左	連体形(形＋名)	總言、不知、且疑**毒**物	名詞形容詞化	皆は、「知らない」と言い、また**毒**ではないか
	24-297	アシキモノⒶⒷ同訓、左　マシモノⒸ	連体形(形＋名) 目的語	高麗国知得志欲歸之意、與**毒**殺之	名詞 目的語	高麗国は得志の帰国したいという気持ちを知り、**毒**を与えて殺しました。
あつし(厚)	22-191	アツクⒸ	連用形	**敦**禮神祇、周祠山川	形＋動詞	**厚く**天神地祇を敬い、山川をあまねくお祭りし、
	22-497	(アツ)クⒸ	連用形	其爲朕興陵以勿**厚**葬	形＋動詞	私のために陵を造って**厚**葬ることは止めよ。
あまねし(遍)	22-191	ア(マネク)ⒶⒷアマ(ネク)Ⓒ	連用形	敦禮神祇、**周**祠山川、幽通乾坤	形＋動詞	厚く天神地祇を敬い、山川を**あまねく**お祭りし、深く天地に通じておられた。
	24-69	アマネクⒶⒷ	連用形	遂雨五日、**傳**潤天下	動+名	ついに雨が五日間降り、天下を**普く**潤した。
	24-313	アマネクⒶⒷウルⒸ	連用形	而子麻呂等不來、流汗**浹**身、乱声動手	動+名	子麻呂らが来ないので不安になり、全身**汗みずく**になって声を乱し手を震わせた。
あやし	24-293	ア(ヤシキ)ⒶⒷ	連体形	種々**奇**_術、不可殫究	形＋名	種々の**奇術**は究め尽すことはできません。
あやふし	22-127	アヤウカラスⒸ	述語	因此國-家永久、社-稷勿**危**	形(述語)	国家は永久で、社会も**安泰**である。

(危)	24-196	ア(ヤフカラスヤ)ⒶⒷ/(アヤフカ)ラ(スヤ)Ⓒ	述語	儞之身命、不亦**殆**乎	述語	お前の生命も**危ない**のではないか。
あらし(荒)	22-249	アラキⒶアカラシマカセⒸ	連体形	忽逢**暴**風、漂蕩海中	名詞(暴風)/熟語	たちまち**暴風**に逢って、海を漂流したいました。
	24-196	アライⒸアシキⒶⒷ	形+名	入鹿極甚愚癡、専行一**暴一悪**	形+名	入鹿極甚だ愚痴にして、専ら横暴な**悪事**ばかり行ったものだ。
いささけし(少)	22-126	イササケキⒶ(イ)ササケキⒷイササケ(キ)Ⓒ	連体形	事無大_**少、**得人必治	形容詞の名詞化	事の**大少**にかかわらず、適切な人事によって必ず治るだろう。
	22-155	イササケキⒶ	連体形	**少**_事是輕、不可必衆	形+名	**小事**は些細であるから、必ずしも衆人に議からなくてもよい。
	22-410	イササケキⒶⒷ	連体形	任那**小**-國、天皇附-庸	名詞(小国)	任那は**小国**ではありますが、天皇の属国です。
いつくし	22-104	イツクシキⒶⒸ	連体形	皇太子親肇作**憲**_法十七條	形+名	皇太子はご自分で初めて**憲法**十七条をお作りになった。
いとなし	22-129	イトナシⒶ	終止形	公_事**靡一盬**、終日難盡	不明	公務は**ゆるがせにできず**、終日やってもやり尽せない。
いとまなし	22-129	イトマナシⒸ左	終止形	公_事**靡一盬**、終日難盡	不明	公務は**ゆるがせにできず**、終日やってもやり尽せない。
いのちながし	24-241	(イノチナカ)シⒶ/Ⓑ同訓、左	終止形	押坂直与童子由喫菌羹、無病而**壽**	形容詞(述語)	押坂直と子どもとは、菌の羹を食べたために、病にかからず**長生きしました**。
うたがはし	22-156	ウタカハシキトキⒸ	連体形	唯逮論大事、若**疑**有失。	動詞(述語)	ただし大事を論じる時には、もしや過失があるかもしれない。
	22-335	ウタカハシⒸ左	終止形	大臣亦於今日明日立俟其誅**決**矣	副詞	大臣も今日明日のうちに、直ちに誅殺されるであろうことは**必定**で

						ある。
うつむたし	24-189	（ウ ツ ム ）タ(シ)Ⓒ左	終止形	吾起兵伐入鹿者、其勝**定**之	形容詞(述語)	私が兵を起こして入鹿を討伐すれば、勝つことは**必定**である。
うつむなし	24-189	ウ ツ ム ナ シ Ⓐ/Ⓑ同訓左 ウツムナシⒸ左	終止形	吾起兵伐入鹿者、其勝**定**之	形容詞	私が兵を起こして入鹿を討伐すれば、勝つことは**必定**である。
	24-335	ウツムナシⒶ	終止形	大臣亦於今日明日立俟其誅**決**矣	副詞	大臣も今日明日のうちに、直ちに誅殺されるであろうことは**必定**である。
うつむまし	24-335	ウツムマシⒷ左	終止形	大臣亦於今日明日立俟其誅**決**矣	副詞	大臣も今日明日のうちに、直ちに誅殺されるであろうことは**必定**である。
うるはし	22-383	ウルハシキⒶⒷ	連体形	今太-子既薨之、我雖異-國、心在**斷ー金**、其獨_生之何益矣	不明	私は異国の地にあっても、**心は太子と堅く結ばれている**。一人生き残っても、何の益があろうか。
	24-206	ウルハシⒶ/Ⓑ同訓、左	終止形	中臣鎌子連曾**善**於輕皇子、故詣彼宮而将待_宿	形容詞の動詞化	中臣鎌子連は以前から軽皇子と**親交があった**。それで、その宮に参上して、宿直をしようとした。
おそし	22-127	ヲソキⒸ	連体形	時無急_**緩**、遇賢自寛	形容詞(熟語)	時の**緩**急に関わらず、賢者を迎えれば自然に鎮まるだろう。
	22-129	オ(ソク)ⒶⒷ	連用形	群卿百寮、早朝**晏**退	形+動	群卿や百官は、早く出仕して**遅く**退出せよ。
	22-401	ヲソカラ(シ)Ⓒ	未然形	先察状、以知逆後撃之不**晩**也	形(否定形)	まず状況を調べて、反逆を確認した後に攻撃しても**遅く**はありません。
おもし	22-444	オモクⒸ	連用形	若事實者、**重**罪之	形+動	もし事実なら、**重罪**とせよ。
おもしろし	24-191	オモシロキⒶⒷ オモシロキⒸ	連体形	于時、五色幡蓋、種種**伎**ー樂、照_灼於空、臨_垂於寺。	（伎樂）名詞	この時、五色の幡蓋が種々の**伎楽**を伴って、空に照り輝いて、寺に垂れ下がった。

かうばし	24-240	カウハシキⒶⒷ カウハシキⒸ	連体形	於是押坂直与童子煮而食之、大有**氣**_味	名詞	そこで押坂直与と子どもが煮て食べてみたところ、大そう**香ばしい**味がありました。
かしこし	22-58	カシコ(キ)ⒶカシコキコトⒷ	連体形	仍奏表之曰、天上有神、地有天皇、除是二神、何亦有**畏**乎	動詞の名詞化	そして、上表文を奉って、「天上には神がおいでになり、地には天皇がおいでになります。この二神のほかに、どこに**畏敬**するものがありましょうか。」
	22-136	カシコクⒸ	連用形	相共**賢**_愚、如鐶无端	形容詞	お互いが**賢**であり愚でもあって、鐶に端がないようなもので区別はつかない。
かたし	22-129	(カタ)シⒸ	接尾語	公事靡盬、終日**難**盡	形容詞	公務はゆるがせにできず、終日やっても**やり尽せない**。
かたまし	22-122	カタマシクⒸ左 カタミコフⒶ	連用形	**佞**_媚者、對上則好說下過	動詞	また**媚びへつらう**者は、上に対して好んで下の過失を告げ、下に向かっては上の失敗を誹謗する。
	22-125	カタマ(シ)キⒶ カタマシ(キ)Ⓑ (カタマシ)キⒸ	連体形	**奸**_者有官、禍亂則繁	形+名	**奸人**が官になれば、頻繁に混乱が起こる。
かなし	22-85	(カナ)シⒶ (カナ)シキⒷ	終止形 連体形	其臨大事而不遂矣、甚**悲**乎	形容詞(述語)	大事に臨んでこれを成し遂げられなかった。実に**悲しい**ことだ。
かへがへし	22－405	カへカへシキクニⒶⒷ かへかへシ(キクニ)Ⓒ左	連体形	不然。百一濟是多**反-覆**之國、道-路之間尚詐之。凡彼所請皆非之。故不可附百濟。	形(熟語)+名	それは違います。百済はよく言を翻す国です。道路の距離さえも簡単に欺きます。およそ百済の言うことはすべて信用できません。
かるがるし	22-156	カルカルシクⒸ	連用形	少_事是**輕**、不可必衆	形容詞(述語)	小事は些細であるから、必ずしも衆人に議からなくてもよい。
	22-489	(カルカル)シク	連用形	故汝愼以察之、不可**輕**言	形+動	お前は慎重に考え、**軽々しいこと**を言ってはならない。

		Ⓒ				
きよし	24-232	キヨキⒶⒷ	連体形	奉以**赤**心、更無所忌	形+名	娘は**忠誠心**をもってお仕えして、少しもそれを厭わなかった。
くさし	24-148	クサ(キ)カⒶ クサキカⒷ	連体形	是月、茨田池水漸變成白色、亦無**臭**氣	形+名	この月に、茨田池の水がしだいに変化して白色になった。また**臭気**もなくなった。
くやし	22-431	クヤシキⒸ	連体形	**悔**乎、早遣師矣	動詞	**残念なことだ**。軍勢を遣わすのが早かった。
けやけし	22-108	ケヤケレトモⒸ	仮定形	人**鮮**尤惡、能教從之	形容詞	人は極悪である者は**少なく**、よく教えると従うものである。
さかし	22-148	サカシキ人Ⓒ	形+名	其不得**賢**聖、何以治國	形容詞の名詞化	**賢人**聖人を得なければ、いったい何によって国を治めればよいのかと。
	22-448	サカシクⒶⒷ	連用形	然我王聞日本天皇之**賢ー哲**、而貢上佛像及内典、未滿百歳。	形容詞/熟語	しかるに我が王は、日本の天皇が**賢哲**であられると聞いて、仏像と経典とを貢上しましたが、それからまだ百年にもなりません。
	24-216	サカシキⒶⒷ	連体形	而求可立功ー名**哲ー主**	形+名	成功できそうな**明哲**の主を求めた。
サカシヒト	22-125	サカシヒトⒶ	形+名	其**賢ー哲**任官、頌音則起	名詞(熟語)	**賢哲**を官に任じれば、称賛の声が起こる。
	22-127	サカシヒトⒸ	形+名	時無急緩、遇**賢**自寛	形容詞名詞化	時の緩急にかかわらず、**賢者**を迎えれば自然に鎮まるだろう。
	22-147	サカシヒトⒶ (サカシ)ヒトⒷ	形+名	是以、五百之乃今遇**賢**、千載以難待一聖	名詞化	それゆえ、五百年に一人の**賢人**に今遭遇しても、千年に一人の聖人の出現を待つのは難しい。
さがなし	22-213	サカナシⒶ	終止形	時天皇勅之曰「妹子、雖有失書之罪、輒不可罪。其大國客等聞之、亦**不-良**。」乃赦之不坐也。	形容詞の否定	ここに天皇は勅して、「妹子には書簡を失った罪はあるが、軽々しく断罪してはならない。かの大国の客らがこれを聞いたら、不都合であろう」と仰せられ、赦して罪を問われなかった。
しげし	22-125	(シケ)シⒸ	終止形	奸者有官、禍亂則**繁**	形容詞(述語)	奸人が官になれば、頻繁に混乱が起こる。
しろし	22-42	シロキⒸ	連体形	越國獻**白**鹿一頭	形+名	越国が**白鹿**一頭を献上した。
すくなし	22-105	(スクナ)シⒸ	終止形	人皆有黨、亦**少**達者	形容詞(述語)	人はみな党類を組むが、賢者が**少ない**。

	22-126	スクナシⒸ	終止形	世**少**生知、剋念作聖	形容詞(述語)	生まれつき分別のある人は**少ない**。よく思慮して聖人となる。
すずし	22-237	ス(スシ)Ⓒ	終止形	季－秋－薄－**冷**、尊何如	形容詞(述語)	季節は秋で、**涼しく**なりましたが、皇帝にはお変わりありませんか。
すみやけし	22-130	スミヤ(ケキ)Ⓐ スミヤケキⒷ	連体形	是以遲朝不逮于**急**、早退必事不尽	形容詞の名詞化	それゆえ、遅い出仕は急用に間に合わず、早い退出は必ず仕事をやり残すであろうと。
たかし	22-366	(タカ)シⒸ	終止形	時倭漢坂上直樹柱、勝之太**高**	形容詞(述語)	その時、倭漢坂上直が建てた柱は、たいそう**高かった**。
	24-24	(タカ)キⒸ	連体形	有**高_名**之人卅餘、被放於嶋	形(熟語)	**高名**な人四十人余りが島に追放されました。
	24-208	タ(カ)クⒸ	連用形	軽皇子深識中臣鎌子連之意氣**高_逸**、容止難犯	形(熟語)	軽皇子は、中臣鎌子連が心ばえが**高く優れており**、立ち居振る舞いの犯し難いことをよく知っているので
たけし	22-474	タ(ケキ)Ⓐ タケキⒷ	連体形	性有**武**畧亦有辨才	名+名	性格は**軍略**にたけ、また人の議論を弁別する才能があった。
ただし	24-213	タダシクⒶ、Ⓑ同訓、左	連用形	中臣鎌子連爲人**忠-正**、有匡濟心	形容詞(熟語)	中臣鎌子連は**真心のある正しい**人で、乱れを正し救済しようとする心があった。
たふとし	22-104	タフトシⒸ	終止形	一曰、以和爲**貴**、無忤爲宗	形容詞	一にいう、**和を尊び**、逆らい背くことのないようにせよ。
たやすし	22-212	タヤスクⒸ	連用形	時天皇勅之曰、妹子雖有失書之罪、**輒**不可罪	動詞	ここに天皇は勅して、「妹子には書簡を失った罪はあるが、**軽々しく**断罪してはならない。
	22-488	タヤスクⒸ	連用形	則召田村皇子謂之曰、昇天位而経綸鴻基、馭万機以亭育黎元、本非**輒**言	動+名	そこで田村皇子をお召しになって、語って「天位に即いて大業の基礎を治め整え、国政を統御して人民を養うことは、もとより安易に言うことではない。
ちかし	22-223	チカキⒶⒸ	連体形	愛_育之情、無隔**遐_邇**	形容詞(熟語)	慈しみ育む気持ちには、**遠近**による隔てなどない。
	24-314	チカクⒸ	連用形	山田麻呂對曰、恐近天皇、不-覺流汗	形容詞	山田麻呂は、「天皇のお側近いことが恐れ多く、不覚にも汗が流れたのです」と答えた。

ちいさし	22-357	チヒサイⒶ		即化**少**魚、以挟樹枝、即取魚焚之、遂修理其船	形+名	そして**小さな**小魚になって、樹の枝の間に挟まった。そこでその魚を取って焼いた。こうしてついにその船を造り上げた。
		チヒサキⒷ	連体形			
	22-392	チヒサキⒸ	連体形	仍貢仏像一具及金塔併舎利、且大観頂幡一具、**小**幡十二条	形+名	そうして仏像一具と金塔、それに舎利と大観頂幡一具・**小幡**十二条を合わせて貢上した。
	24-137	(チヒサ)キⒶⒷ	連体形	是月、茨田池水大臭**小**虫覆水	形+名	この月に、茨田池の水が大そう腐って、小さな虫が水面を覆った。
	24-139	チ(ヒサ)キⒸ	連体形	溝瀆之流亦復凝結厚三四寸、大**小**魚臭如夏爛死。	形+名	溝の流れもまた凝り固まって厚さ三、四寸ほどになり、**大小**の魚が、夏に爛れ死んだ時のように腐臭を放った。
つたなし	22-468	ツタナクⒶⒷ	連用形	豈獨朕不-賢耶、大臣亦**不忠**、是後世之悪名、即不聴	形容詞の否定	「決して私ひとりの愚行では済まず、大臣も**不忠**とされ、後世に悪名を残すことになろう」と仰せられて、お聞き入れにならなかった。
ツマビラケ	24-227	ツマヒラケニⒸ	連用形	中大兄聞而大悦、**曲**従所議	形＋動	中大兄はこれを聞いて大そう喜ばれ、この**提案のとおり**に従われた。
とし	22-121	ト(キ)ⒶトキⒷ	連体形	其諂詐者則爲覆國－家之**利**_器、爲絶人－民之鋒劒	形＋名	おもねりは偽る者は、国家を覆す**利器**であり、人民を滅す鋭い剣である。
	22-122	トキⒶ	連体形	其諂詐者則爲覆國－家之利_器、爲絶人－民之**鋒**劒	形＋名	おもねりは偽る者は、国家を覆す利器であり、人民を滅す**鋭い**剣である。
とし	24-338	トクⒶ、Ⓑ同訓、左	連用形	船史恵尺即**疾**取所燒國記而奉中大兄	形＋動	船史恵尺は**とっさに**、焼かれようとしている国記を取り、中大兄に奉った。
とほし	22-223	ト(ホクチカキ)ⒶトヲクチカキⒸ	連用形	愛育之情、無隔**遐_邇**	形容詞(熟語)	慈しみ育む気持ちには、**遠近**による隔てなどない。
	22-224	(トホ)クⒸ	連用形	深－氣至誠、**遠**脩朝貢	形＋動	志が深く至誠の心があって、**遠く**からはるばると朝貢して来たこと

						を知った。
ともし	22-118	トモシキⒸ	連体形	便有財之訟、如石投水、**乏**_者之訴似水投石	形＋名	財ある者の訴えは、石を水に投げ込むようなもので必ず通り、**貧しい**者の訴えは、水を石に投げかけるようなもので、受け入れられることはない。
ながし	24-241	(イノチナガ)シⒶⒷ	終止形	押坂直與童子、由喫菌羹無病而**壽**	形容詞	そこで押坂直と子供とは、菌の羹を食べたために病に罹らず**長生きしました**。
なし	22-113	ナイⒶ		其治民之本、要在乎禮、上**不**禮而下非齊、下無禮以必有罪	副詞	人民を治める根本は、必ず礼にある。上が礼が**なければ**、下は乱れ、下が礼を失えば、必ず罪を犯す者が現れる。
		ナキⒸ	連体形			
	22-123	(ナ)クⒸ	連用形	其如此人皆**无**忠於君、无仁於民	副詞	このような人はみな、君に対する忠誠の心が**なく**、民に対する仁愛の念がない。
	22-126	(ナ)クⒸ	連用形	事**無**大少、得人必治	動詞	事の大小**にかかわらず**、適切な人事によって必ず治るだろう。
	22-127	(ナ)クⒸ	連用形	時**無**急緩、遇賢自寬	動詞	時の緩急**にかかわらず**、賢者を迎えれば自然に鎮まるだろう。
		(ナ)シⒸ　左	終止形			
	22-140	ナシⒸ	終止形	國**非**二君、民無兩主	動詞	国に二人の君は**なく**、民に二人の主人はない。
	22-140	(ナ)シⒸ	終止形	國非二君、民**無**兩主	動詞	国に二人の君はなく、民に二人の主人は**ない**。
	22-223	(ナ)シⒸ	終止形	愛育之情、**無**隔遐_邇	副詞	慈しみ育む気持ちには、遠近による隔てなど**ない**。
	22-436	(ナ)キⒸ	連体形	磐金亦曰、曷**無**任那之迎船。	動詞	磐金はまた、「どうして任那の迎船は**ない**のだ」と言った。
	24-232	ナカレⒸ	未然形	奉以赤心、更**無**所忌	動詞	娘は忠誠心をもってお仕えして、少しもそれを厭わ**なかった**。
	24-240	ナシⒶⒷ左	終止形	明日往見、都**不ー在**焉	副詞+動詞	翌日に行ってみると、まったく**ありません**でした。
	24-316	ナクⒶⒷ左	連用形	卽共子麻呂等出ー其ー**不ー意**、以劒傷割入鹿頭肩。	副詞+動詞 四字熟語	子麻呂らと共に入鹿の**不意**を突いて、剣で入鹿の頭と肩を斬り割いた。

にひし	22-203	ニヒシキⒶⒷ	連体形	爲唐客更造**新**_館於難波高麗館之上	形+名	唐の客のために、また**新しい**館を難波の高麗館の傍らに造った。
	22-206	ニハシキⒸ	連体形	是日以餝-船卅-艘迎客等于江_口、安-置**新**館	形+名	この日に、飾船三十艘を出して、客らを江口に迎えて、**新しい**館に宿泊させた。
	24-209	ニヒシキⒶⒷ左	連体形	乃使寵妃阿倍氏、淨_掃別_殿、高鋪**新**蓐、靡不具給、敬_重特異	形+名	寵妃阿倍氏に、別殿を払い清めて**新しい**敷物を高く重ねて座席を設け、飲食物を十分に給仕させ、特別に敬いあがめるもてないをなさった。
	24-267	ニヒシキⒶⒷ左	連体形	由是、加勸捨民家財-寶、陳_酒_陳菜六畜於路側、而使呼曰、**新**富入來	形+名	そうして、さかんに民に家の財宝を捨てるよう勧め、酒を並べ、菜・六畜を路傍に並べて、「**新しい**富が入って来た」と呼ばせた。
はやし	22-129	ハ(ヤク)Ⓐ	連用形	八曰、羣卿百寮、**早**朝晏退	形+動	八にいう、群卿や百官は、**早く**出仕して遅く退出せよ。
	22-130	(ハ)ヤクⒸ	連用形	是以、遲朝不逮于急、**早**退必事不盡	形+動	それゆえ、遅い出仕は急用に間に合わず、**早い**退出は必ず仕事をやり残すであろうと。
	22-431	(ハヤ)クⒸ	連用形	爰大臣曰「悔乎、**早**遣師矣」	形+動	残念なことだ。軍勢を遣わすのが**早かった**。
ひさし	22-237	(ヒサシ)キⒶ	連体形	爰天皇聘唐帝、其辭曰「東天皇敬白西皇-帝。使-人鴻-臚-寺掌-客裴-世-清-等至、**久**_憶方解。	形+動	ここに天皇は唐帝に訪問の挨拶を表し、「東の天皇が謹んで西の皇帝に申し上げます。使者鴻臚寺の接待役裴世清の一行が来て、**長年**の思いがまさに解けました。
ふかし	22-224	(フカ)キⒸ	連体形	**深**_氣至誠、達脩朝貢	形+名	志が**深く**至誠の心があって、遠くからはるばると朝貢して来たことを知った。
	24-217	フカキⒶ フカキⒷ左	連体形	便附心於中大兄、疏然未獲展其**幽ー抱**	形+名	そして中大兄に心を寄せたが、親しくないために、まだその**深い**思いを伝えることができずにいた。

ふるし	24-267	フルキⒶ、フ(ルキ)Ⓐ、フルキⒷフルサケⒸ	連体形	由是、加勸捨民家財-寶、**陳**_酒_陳菜六畜於路側、而使呼曰、新富入來	形+名	そうして、さかんに民に家の財宝を捨てるよう勧め、酒を並べ、菜・六畜を路傍に並べて、「新しい富が入って来た」と呼ばせた。
まづし	22-119	マツシキⒸ	連体形	是以、**貧**民則不知所_由、臣道亦於-焉闕。	形+名	それでは、貧しい民はなすべもなく、臣としての道もまた、欠けることになろう。
むつまし	22-383	ムツマシキⒸ左ウルハシキⒶⒷ	連体形	今太-子既薨之、我雖異-國、心在**斷ー金**、其獨_生之何益矣。	不明	今ここに太子は薨去された。私は異国の地にあっても、心は太子と堅く結ばれている。一人生き残っても、何の益があろうか。
	24-225	ムツマシキⒸムロシフトⒶムロシフトⒷ左	連体形	請、納蘇我倉-山-田麻呂長_女爲妃、而成**婚ー姻**之昵	熟語(名詞)	どうか蘇我倉山田麻呂の長女を召し入れて妃とし、**姻戚**関係を結んでください。
むなし	22-330	ムナシクⒶⒷ	連用形	乃開以見、屍-骨既**空**、唯衣-服疊置棺上。	形容詞(述語)	中を開けて見ますと、屍骨はすっかりなくなっておりました。ただ衣服だけが、畳んで棺の上においてありました
		ムナシⒸ左	終止形			
めぐし	22-373	メグキⒶⒷ	連体形	是時、諸王諸臣及天下百姓、悉長-老、如失**愛**_兒而鹽_酢之味在口不嘗…	形+名	この時に、諸王・諸臣と天下の人民はみな、老人は愛児を失ったように悲しみ、塩や酢の味が口に入れても分からず…
めづらし	22-398	メツラシキⒸ左	連体形	且其大唐國者法-式備_定之**珎**ー國也	形+名	また大唐国は、法式の整備した貴重な国です。
やすし	22-319	ヤスクⒸ左	連用形	皇太子覩之與飲-食、卽脱衣-裳、覆飢者而言**安**臥也	形+動	皇太子はこれをご覧になって、飲物と食物を与えられた。そうして衣服を脱いで、飢えた人に掛けてやり、「安らかに寝ていよ」と仰せられた。
ゆるし	24-347	ユルクⒶⒷ	終止形	此卽上_宮王等性_**順**、都無有罪、而爲入鹿見害。	形容詞	上宮の王たちが温順な性格のため、まったく罪がないままに、入鹿のために殺された。
よし	22-54	ヨクモアラシⒶ	連用形	時、將軍共議曰、新羅知罪服之、强擊**不**	形容詞の否定	そこで将軍は協議して、「新羅は罪を知って降伏した。強いて攻撃

		Ⓑ		**可。**		するのは**よくない**」と言った。
	22-120	ヨキⒸ	連体形	懲惡勸善、古之**良**_典	形+名	悪を懲らし善を勧めよというのは、古の良い教訓である。
	22-126	ヨクⒸ	連用形	世少生知、**剋**念作聖	動詞	生まれつき分別のある人は少ない。よく思慮して聖人となるのである。
	22-135	ヨクⒶⒷ	連用形	**是**非之理、詎能可定	形(是非 ;熟語)	**是**非の理を、いったい誰が定めることができようか。
	22-152	ヨキⒸ	連体形	十六曰使民以時、古之**良**典	形+名	十六にいう、民を使うのには時節を考慮せよというのは、古の**良い**教訓である。
	22-179	ヨ(キ)Ⓐ(ヨ)キⒷ	連体形	今朕爲造丈六佛、以求**好**佛像	形+名	今、私は丈六の仏を作るために、**ふさわしい**仏像を求めていたが、
	22-406	ヨクモアラスⒶⒷ	連用形	田中臣曰「不然。百濟是多反覆之國、道路之間尚詐之。凡彼所請皆**非**之。故不可附百濟。」	動詞	田中臣は、「それは違います。百済はよく言を翻す国です。道路の距離さえ簡単に欺きます。およそ百済の言うことはすべて**信用できません**。それゆえ、任那を百済に帰属させてはなりません」と申しあげた。
わいわいし	22-475	ワイワイシⒶⒷ ワイワイシキⒸ左	連体形	大臣則稻目宿禰之子也、性有武略亦有**辨才**、以恭敬三寶。	熟語(動+名)	大臣は稲目宿禰の子である。性格は軍略にたけ、また人の**議論を弁別する才能**があった。仏教を深く敬う。
わかし	22-374	ワカイⒶⒷ		**少ー幼**者、如亡慈父母以哭泣之聲滿於行路。	熟語(形+形)	**幼児**は慈父母を亡くしたように悲しみ、泣き叫ぶ声が往来に満ちた。
	22-490	ワカシⒸ	終止形	卽日召山背大兄教之曰「汝肝**稚**之。若雖心望、而勿諠言。必待群言以宣從。」	形容詞	その日に、山背大兄をお召しになって、教えて、「お前は**未熟**である。もし心に望むことがあっても、あれこれ言ってはならない。必ず群臣の言葉を待って、それに従うがよい」と仰せられた。

	24-214	ワカキ©左 オトトⒶⒷ	連体形	乃憤蘇我臣入鹿、失君臣**長_幼**之序…	形容詞	蘇我臣入鹿が君臣**長幼**の序を破り、国家を我がものにする野望を懐いていることを憤って…
ゐやなし	24-110	ヰヤナキⒶ ヰヤナキⒷ左	連体形	於是、上宮大娘姫王、發憤而歎曰、蘇我臣專擅國政多行－**無－禮**	熟語(動+名)	ここに上宮大娘姫王は憤慨し嘆いて、「蘇我臣は国政をほしいままにして、多くの**無礼**をはたらいた。
をさなし	22-468	ヲサナキⒶⒷ	連体形	於是、天皇詔曰「…豈獨朕**不-賢**耶、大臣亦不忠。是、後葉之惡名」則不聽。	形容詞の否定	ここに天皇は詔して「…決して私ひとりの**愚行**では済まず、大臣も不忠とされ、後世に悪名を残すことになろう」と仰せられ、お聞き入れにならなかった。

注：①岩崎本古訓形容詞の取集際には、築島・石塚(1978)の移点本を利用し、岩崎本の複製本を合わせて参照した。

②漢文原文及びそれと対応する和訓の行数はアラビア数字で示す。

③形容詞で読む漢字に下線を引く。

④現代語訳は『新編日本古典文学全集・日本書紀』(小学館)による

参考文献

著作

日本語

太田辰夫 2013『中国語歴史文法』朋友書店

石塚晴通 1984『日本書紀：図書寮本(研究編)』汲古書院

伊藤雅光 2002『計量言語学入門』大修館書店

内田賢徳 2005『上代日本語表現と訓詁』塙書房

遠藤慶太 2015『日本書紀の形成と諸資料』塙書房

神田喜一郎 1949『日本書紀古訓攷証』養徳社

北原保雄 2010『日本語の形容詞』大修館書店

小島憲之 1962『上代日本文学と中国文学 ： 出典論を中心とする比較文学的考察』塙書房

小島憲之ほか（校注／訳）1994－1998『新編日本古典文学全集 2－4・日本書紀』小学館

小林芳規 1967『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会

佐藤喜代治編 1983『講座日本語の語彙 9 語誌Ⅰ』明治書院

杉浦克己 1995『日本書紀神代巻和訓研究索引：六種対照』武蔵野書院

田島毓堂 1999『比較語彙研究序説』笠間書院

築島裕 1963『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

唐煒 2009『日本書紀における中国口語起源二字漢語の訓読』北海道大学出版会

中田祝夫 1979『古点本の国語的研究・総論編』勉誠社

村田菜穂子 2005『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院

森博達 2011『日本書紀成立の真実』中央公論新社

洪誠原著；森賀一恵・橋本秀美訳 2003『訓詁学講義：中国古語の読み方』(中国古典文献学・基礎篇 2)すずさわ書店

中国語

陸宗達・俞敏 1954『現代中国語語法』群衆書店

朱德熙 1982『語法講義』商務印書館

馬建忠 1983『馬氏文通』商務印書館

王力 1985『中国現代語法』商務印書館

吕叔湘 1990『中国文法要略』商務印書館

聂代顺・簡志勤・張華渝 1997『古代漢語語法解析』重慶出版社
李佐豊 2004『古代漢語語法学』商務印書館

論文

石塚晴通 1978「前田本日本書紀院政期点(研究編)」『北海道大学文学部紀要』26(2) 北海道大学文学部
石塚晴通 1983A「日本書紀の古訓について其の一」『天理図書館善本叢書月報』55 八木書店
石塚晴通 1983B「日本書紀の古訓について其の二」『天理図書館善本叢書月報』56 八木書店
石塚晴通 1985A「岩崎本日本書紀初點の合符」『東洋学報』66 東洋文庫
石塚晴通 1985B「岩崎本日本書紀初點の合符に見られる単語意識」『築島裕博士還暦記念国語学論集』明治書院
石塚晴通 1992「兼方本日本書紀古訓の性格」『小林芳規博士退官紀念国語学論集』汲古書院
上野務 1952「日本書紀古訓に関する一考察－岩崎本を中心として－」『芸林』3 芸林会
于艷麗 2013「シク活用形容詞の語構成に関する考察－歴史的変化の観点から－」『立教大学大学院日本文学論叢』(13)立教大学大学院文学研究科
金紋敬 2008A「日本書紀古訓における母親を表す語彙に関して」『古事記年報』(51)実教出版
金紋敬 2008B「日本書紀古訓＜イロ＞に関して－兄弟姉妹を中心に－」『待兼山論叢・文学篇』(42)大阪大学文学研究科
小林芳規 1963「神田本白氏文集の訓の類別」『国語と国文学』40 巻 1 号東京大学国語国文学会
小林芳規 1969「日本書紀古訓と漢籍の古訓読－漢文訓読史よりの一考察－」『国語学論集 ： 佐伯梅友博士古稀記念』佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会編 表現社
小林芳規 1979「訓点における合符の変遷」『訓点語と訓点資料』62 訓点語学会
阪倉篤義 1960「万葉語彙の構造-(その一)名詞について-」『万葉』34 万葉学会
寿岳章子 1955「形容詞の語彙的変遷－中古から中世へ－」『国語学』22 日本語学会
杉浦克己 1990「江戸時代の日本書紀訓読について－神代巻の敬語表現を中心として－」『訓点語と訓点資料』85 訓点語学会

杉浦克己 1991「黒羽版日本書紀の訓読上の特色について」『放送大学研究年報』9 放送大学
杉浦克己 1992「闇齋版神代紀の訓読上の特色について」『放送大学研究年報』10 放送大学
杉浦克己 1997「小寺清先『校正日本書紀』の訓読上の特色について」『放送大学研究年報』15 放送大学
杉浦克己 2008「日本書紀古訓の諸相」『日本語学』27(12)明治書院
田島毓堂 1992「比較語彙論の構想－異文化比較研究のために－」『国際開発研究フォーラム 2』名古屋大学大学院国際開発研究科
築島裕 1956「訓点語彙の一考察」『国語学』27 日本語学会
中川ゆかり 1993「＜努力＞をユメと訓むことについて」『古事記年報』(36)実教出版
中村宗彦 1986「日本書紀訓詁私見」『富山大学教育学会紀要 A 文科系 34 富山大学教育学部
西崎亨 1999「天理図書館蔵正安本『古文孝経』の訓点」『訓点資料の基礎的研究』思文閣
松本直樹 2001「天降の意味追考－日本書紀の古訓－」『早稲田大学教育学部学術研究国語・国文学編(50)早稲田大学教育会
三保忠夫 1995「日本書紀における助数詞について」『鎌倉時代語研究』18 武蔵野書院
村田菜穂子ほか 2003「訓点資料の形容詞の語構成」『国際研究論叢：大阪国際大学紀要』17-1 大阪国際大学
村田菜穂子 2004「訓点資料の形容詞－語彙の量的性格」『帝塚山学院大学日本文学研究』35 帝塚山学院大学日本文学会
村田菜穂子 2010「改訂増補　古代語形容詞の語構成―上代～中世編―」『帝塚山学院大学日本文学研究』41 帝塚山学院大学日本文学会
門前正彦 1959「漢文訓読史上の一問題(二) －「ヒト」より「モノ」へ－」『訓点語と訓点資料』11 訓点語学会
林勉 1968「岩崎本日本書紀の訓点」『上代文学論叢 ： 五味智英先生還暦記念』桜楓社
林勉 1970「日本書紀古写本における日付・時刻の訓読」『論集上代文学第一冊』笠間書院
林勉 1971「岩崎本日本書紀訓点にみられる音便」『論集上代文学第二冊』笠間書院
林勉 1972「岩崎本日本書紀における所謂再読字の訓読について」『論集上代文学第三冊』笠間書院

林勉 1973「岩崎本日本書紀訓点にみられる副詞・接続詞・助詞・助動詞の類の訓読について」『論集上代文学第四冊』笠間書院
林勉 1977「岩崎本日本書紀の敬語表現」『論集上代文学第七冊』笠間書院
春日和男 1985「比較訓読について 1」『帝京大学文学部紀要国語国文学』(17)帝京大学文学部国文学科
春日和男 1986「比較訓読について 2」『帝京大学文学部紀要国語国文学』(18) 帝京大学文学部国文学科
山口佳紀 1967「形容詞より見たる漢文訓読語と和文語の性格」『東京大学教養学部人文科学科紀要国文学・漢文学』44、東京大学出版会

辞書

天理図書館善本叢書和書之部編修委員会編 1976『類聚名義抄：観智院本』天理大学出版部
上代語辞典編修委員会 1967『時代別国語大辞典・上代編』三省堂
室町時代語辞典編修委員会 1985 - 2001『時代別国語大辞典・室町時代編』三省堂
小学館国語辞典編集部 2000 - 2002『日本国語大辞典(第二版)』小学館
大槻文彦著 2004『言海』筑摩書房
大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編 1990『岩波古語辞典(補訂版)』岩波書店
鎌田正・米山寅太郎著『新漢語林(第二版)』2011 大修館書店
白川静 1996『字通』平凡社
土井忠生・森田武・長南実編訳 1980『日葡辞書：邦訳』岩波書店
中田祝夫ほか 1983『古語大辞典』小学館
飛田良文・浅田秀子 1991『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
山田忠雄[ほか]編 2012『新明解国語辞典(第 7 版)』三省堂
大東文化大学中国語大辞典編纂室 1994『中国語大辞典』角川書店
（清）張玉書ほか編 1985『康熙字典』上海書店
（漢）許慎撰（清）段玉裁注 1992『説文解字』天工書局

調査資料

著作

天理図書館善本叢書和書之部編修委員会編 1983『日本書紀：兼右本』八木書店
天理大学天理附属図書館編集 2015『日本書紀：乾元本』八木書店
京都国立博物編 2013『京都国立博物館所蔵国宝　岩崎本日本書紀』勉誠出版
前田育徳会尊経閣文庫編 2002『尊経閣善本影印集成 26　日本書紀』八木書店

赤松俊秀編 1971『国宝卜部兼方自筆日本書紀神代巻』法蔵館
石塚晴通 1980『日本書紀：図書寮本(本文編)』美季出版社
石塚晴通 1981『日本書紀：図書寮本(索引編)』美季出版社
石塚晴通編 2005-2006『宮内庁書陵部影印集成 1-4・日本書紀』八木書店
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 1993『日本古典文学大系(新装版)・日本書紀』岩波書店
築島裕・石塚晴通 1978『東洋文庫蔵　岩崎本日本書紀本文と索引』貴重本刊行会
築島裕編 2007－2009『訓点語彙集成』汲古書院
宮島達夫ほか編 2014『日本古典対照分類語彙表』笠間書院
八尾甚太郎 1669『日本書紀(寛文九年版本)』北海道大学札幌農学校文庫

電子資料

日本古典籍総合目録データベース
日本古典資料調査データベース
SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース
Japan Knowledge Lib：新編日本古典文学全集
近代デジタルライブラリー
日本語歴史コーパス
web データに基づく形容詞用例データベース
中国哲学書電子化計畫

謝　辞

本論文の作成及び本研究を進めていくにあたり、研究課題に関する相談から、資料の収集、論文の構成、また論文完成後の修正にいたるまで、指導教官の池田証壽先生より丁寧なご指導・ご助言をいただきました。池田先生のご指導及びご支持がなければ、論文の完成に至らないと思っております。ここに厚く御礼を申しあげます。

そして、本研究を進めるにあたり、石塚先生からも貴重なご意見をくださいました。特に、調査資料を収集した際に、多大なるご協力を心から深く御礼申しあげます。

また、本論文の査読及び貴重なご指摘をしていただいた加藤重広先生、金沢英之先生にも、深く感謝いたします。加藤重広先生、金沢英之先生にご指摘いただいた点をふまえて、論文を修正して完成することが可能となりました。

最後に、日々の研究において、私を暖かく応援して、絶えずに励ましてくださった研究室の皆様にも感謝の意を表します。